

1. プログラム

平成 27 年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業 ESD・ユネスコスクール研修会 岡山 2015

主催:文部科学省、岡山大学

共催:岡山市教育委員会

後援:岡山県教育委員会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

テーマ:「ESD の授業実践に向けて」

日 時: 2015 年 11 月 1 日 (日) 13:00~15:30

場 所: 岡山大学教育学部

プログラム:

13:00~13:10 開会式

【学校種別分科会】

①小・中学校分科会

13:10~13:45 岡崎市立男川小学校 稲垣 裕子 教諭

「ESD の視点に立つ教科学習の展開」

～宇宙空間の概念を広げ、自然観を豊かにする理科学習を通して～

13:45~14:20 大田区立大森第六中学校 柴崎 裕子 教諭

「ESD の推進および授業改善」 ～未来につなぐ地域連携教育～

14:20～ ディスカッション・ワークショップ

「ESD の日常授業における実践に向けて」

②高等学校分科会

13:10~13:45 福島県立ふたば未来学園高等学校 對馬 俊晴 教諭

『復興教育からの ESD～新教育プログラムへの挑戦』

13:45～ ディスカッション・ワークショップ

「ESD の日常授業における実践に向けて」

15:30 分科会ごとに閉会

2. 開会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ただ今より、平成27年度文部科学省日本／ユネスコパートナーシップ事業、ESD・ユネスコスクール研修会岡山2015を始めたいと思います。

最初に、この会に先立ちまして、岡山大学の大学院教育学研究科、高塚研究科長に来ていただいておりますので、ご挨拶をいただきたいと思います。

○高塚成信 岡山大学大学院教育学研究科



皆さんこんにちは。ただいまご紹介にあずかりました岡山大学大学院教育学研究科長の高塚と申します。

本日は、大変お忙しい中、ESDユネスコスクール研修会岡山2015にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本研修会は、

先ほどご紹介もありましたように、文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業の一環としまして、私ども教育学部のESD協働推進室が岡山市教育委員会様との共催で、岡山県教育委員会様及びユネスコスクール大学間ネットワーク様のご後援のもと開催させていただくものでありまして、平成23年度から実施させていただいており、5回目となります。

本年度のテーマは「ESDの授業実践に向けて」というものでありまして、ESDの授業実践に精力的に取り組んでこられました福島の高校、東京の中学、愛知の小学校、いずれもESD大賞受賞をなさっており、素晴らしい実践をされている先進校から3名の先生をお迎えいたしまして、実践のご報告と、後ほどディスカッション及びワークショップをしていただくことになっております。3つの学校よりいらっしゃいました對島先生、柴崎先生、稲垣先生には、大変遠いところをお越しいただきまして、大変ありがたく思っております。

さて、ESDの10年を経まして、これまでのESDの概念や基本的項目に関する研修から発展させ、今回は日常の教科の授業におけるESDの実践等をテーマにしていることが大きな特徴でございます。昨年11月に岡山市で開催されましたESD世界会議を経て結成されました岡山県ユネスコスクール高校ネットワークの研修会とタイアップしまし

て、E S D 世界大会の経験を踏まえ、E S D を継続させ、発展させていこうという強い思いでいるところでございます。

本研修会が、E S D を推進しておられますユネスコスクール学校間の交流、ネットワークの形成と活用を促し、すばらしいE S D の実践が共有され、それぞれの学校におかれましてE S D の実践がますます推進されることをお祈りいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は何とぞよろしくお願いいたします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

高塚先生、ありがとうございました。

それでは続きまして、この会の趣旨及び流れにつきまして、本研究科の川田先生よりお願いいたします。

○川田力（岡山大学大学院教育学研究科）

本日は、先ほど高塚研究科長からもご紹介いただきましたように「E S D の授業実践に向けて」というテーマで、半日の研修会を企画させていただきました。学校教育におけるE S D 実践では、総合的な学習の時間を中核としましたE S D の実践が国内ではかなり普及しているように思います。そうした総合的な学習の時間でのE S D の実践をより豊かなものにしていくためには、総合的な学習の時間のみならず、全ての教科、ホールスクールでE S D を実践していくというようなことが望ましいのではないかとというふうに考えております。本日の授業では、そうしたことに長い間取り組んで、既に実績を上げておられます小学校、中学校、高等学校の先生方の実践報告をもとにしまして、少人数でしっかりと議論するような会にしていきたいと思いますと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、講師の先生方をご紹介させていただきます。

まず、岡崎市立男川小学校の稲垣裕子先生でございます。岡崎市立男川小学校は、E S D に非常に積極的に取り組んでおられまして、平成26年度E S D 大賞の小学校賞を受賞されております。また、今年度教育課程研究指定校事業でE S D を実践されておられまして、つい最近E S D の視点に立つ教科学習の展開ということで、全国から多数の先生方をお集めになられた研究発表会を終えられたばかりのお忙しいところをおいでいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、大田区立大森第六中学校の柴崎裕子先生でございます。大田区立大森第六中学校も非常にE S Dに積極的に取り組んでおられまして、平成24年のE S D大賞のユネスコスクール最優秀賞を受賞された学校となっております。また、先ほどの男川小学校とも同様、教育課程研究指定校事業の研究指定校として、今年度から来年度にかけてE S Dの研究を推進されています。柴崎先生は、当初からその中心的な立場で大森第六中学校のE S Dの展開をリードされてきた先生でございます。先生のお話が聞けることを本当に楽しみにしております。今日はよろしく願いいたします。

福島県立ふたば未来学園高等学校から對島俊晴先生にお越しいただきました。ふたば未来学園高等学校は、先生方もご存じのとおり、福島県の広野町という原発事故で大変な被害を受けた地域に今年度から新設された学校ということでありまして、全国的にも注目されている学校で、スーパーグローバルハイスクールの指定等さまざまな研究指定を受けて、多様な教育活動を、生徒、それから先生方が一体となって取り組まれている学校になります。

對島先生は前任校が、福島県立安達高等学校という高等学校でございまして、對島先生はそちらの高等学校でもE S Dを中心に推進されてこられた先生で、安達高等学校は平成25年にE S D大賞の大賞を受賞された学校となっております。そうした2つの学校の実践を、對島先生から聞きできることを楽しみにしております。よろしく願いいたします。

本日の進行でございますけれども、この後すぐに小学校、中学校の分科会と高等学校の分科会の2会場に分かれまして実践報告をいただき、その後少し休憩をいただいた後にディスカッションの時間を設けさせていただいております。それぞれの会場で解散となりますけれども、それぞれの会場の様子は、報告書に詳しく掲載させていただく予定ですので、そちらで他会場の様子をご覧いただければと思います。

それでは、よろしく願いいたします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして全体会を終了させていただきます。

【移動】

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは皆さん、これから小・中学校の分科会を始めたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、大体の流れについて共有をしておきたいと思います。

これから小学校は稲垣先生、中学校は柴崎先生に30分程度でそれぞれの取り組みについてご発表をしていただきます。これからお二人の発表を聞きながら、ご参加された方にはESDを日常的な授業実践の中で実践していく上で大切なことを、1つから3つほどお考えいただこうと思います。聞いていただきながら、「ああ、これがうちの学校では大切なポイントだな。」とか、「ここがなかなか乗り越えられないポイントだな」というのをメモして頂きたいと思います。メモしたものを、後ほどマジックをお配りしますので、今お配りしたA4サイズの紙に大きく書いて、それをグループで共有したいと思います。ディスカッションで何がポイントになるかというのを少し意識してメモをとっていただきながらお二人の発表を聞いていただけるとありがたいです。どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、早速、ご報告をいただきたいと思います。

まず、男川小学校の稲垣先生からよろしくお願いいたします。

1. 岡崎市立男川小学校 稲垣 裕子 教諭

「ESDの視点に立つ教科学習の展開」

～宇宙空間の概念を広げ、自然観を豊かにする理科学習を通して～

愛知県にあります岡崎市立男川小学校から参りました稲垣と申します。本校の研究テーマは「ESDの視点に立つ教科学習の展開」です。よろしくお願いいたします。

本校は、これをテーマに平成25年度より研究を続け、本年度で3年目になります。子供たちが将来生きる社会には、環境や国際関係、多文化共生などさまざまな問題が山積しています。こうした未来を見据えたとき、子供たちに自ら課題を見つけ、他の人や身の回りの事象と関わり合い、積極的に課題を解決していく資質や能力を育む必要があると感じ

ました。そのためには、教科学習を通して子供自身が課題にかかわる知識や情報を持ち、それらを活用した思考力、判断力、表現力を身につけることが大切です。そこから課題への見方や考え方を多角的、多面的に広げていけるよう教科領域を関連させて、系統的、発展的に扱う大単元を設定することを計画しました。



子供たちが学んだ内容と周りの人々や社会、自然環境など今日的な課題とのつながりを意識し、自分事として切実感を持ち、ともに生きる未来のために身につけた資質、能力を生かして行動できる姿を願いました。

そこで、目指す子供像を次のように設定しました。地域や周りの「ひと・もの・こと」との「つながり」に気づき、周りの人々と協力し、ともに生きる未来のために考え、行動できる子です。このような子供の姿に迫るため、仮説1として、E S Dの視点に立ち、教科領域を関連させて大単元を設定することによって、教科の学びと今日的な課題のつながりに気づき、ともに生きる未来をつくろうとする姿につながるであろうと考えました。そして、資料2ページにありますように、手だてを4つ講じました。

仮説2としてはひとり学習——個別学習のことです——ひとり学習を基盤にして、かわり合いや振り返りを重視した授業展開の工夫をすれば、子供たちの思考力、判断力、表現力が高まり、課題解決に迫る資質能力が身につくであろうと考えました。

また、E S Dの視点に立った学習指導で本校が重視する8つの能力、態度をこのように示しています。文部科学省の例をもとに、本校の児童の実態に合わせ、黄色の部分の文言を追加したり、わかりやすく表現し直したりしました。

本校では、各担任がそれぞれ今年度重点的に進めたい教科を決め、そこからつながるE S Dの視点を見据え、学級の実態を踏まえながら大単元を設定します。そのために、まず教科や教材とのつながりを明確にするこの「E S Dカレンダー」を作成しました。各教科領域と総合的な学習の時間または生活科を関連させ、E S Dの視点に立った1年間の学習計画を立てたものです。縦軸に教科領域、横軸に月を表示しています。

そして、各学級で設定したE S Dの課題に迫る学習を教科学習から展開するため、重点

的に扱う単元や題材をこのように太枠で囲みました。これが教科を関連させた大単元で、本校ではE S D重点単元と呼んでいます。

この学習活動を具体的に表記したものが、こちらの重点単元指導計画です。目標を持った子供たちが学びを展開していくプロセスを計画しました。この中に地域の人材や専門家から知識や技術を得る授業というのを取り入れました。子供たちの知的好奇心を揺さぶり、追求の糸口や新たな視点を持たせようと考えました。

また、互いの学びを共有する男川ユネスコフェスティバルという会を年度末に開催します。1年間の各学級のE S Dの学習を発表し合います。他学級の学から、それまで意識していなかった身の回りの問題に気づき、教科の学習が自分たちの生活につながって役立つ場面を実感できるようにと考えました。

本校では、毎朝「元気調べ」という時間を設け、自分の今日の健康状態とともに自由なテーマで話し、その内容について質問や感想を述べ合っています。資料6ページのように、相手を意識し納得させるように語る言葉の使い方、それから受け答え方というものをここで習得し、かかわり合いの技術へとつなげてきました。

思考を判断、表現する力を培うためには、教科学習から得た知識を基盤にして、課題に対する見方や考え方を持たせるひとり学習が学びの柱となります。学習のさまざまな場面で子供たちは迷い、つまづきます。追求の視点を与える個別支援や、得た情報を活用させる個別支援を工夫しました。互いの考えを比較検討し、類似点や相違点など友達の意見と関連づけ、思考判断するかかわり合いの場面は、課題解決へと追求を深める大切なプロセスです。

そして、建設的なかかわり合いをもとに子供たちは学びを振り返りました。友達の考えから新しい見方を取り入れ、自分の考えを修正したり、深めたりする記述が見られるようになりました。このようにひとり学習、かかわり合い、振り返りが、1時間の授業の中でも課題に向かい、追求していく小単元や大単元の過程においても、スパイラルに進められていきます。そして、E S Dの視点に立った学びの展開により、教科の学びが自分の生活や環境とつながり、子供の見方や考え方を広げていきます。

本校ではE S Dは、各担任が本当に自分の得意な授業で、自分が取り組みたい授業で行っております。私は、理科を通して子供たちをE S Dの世界へつなぎたいと思ひまして、理科学習から展開するE S D学習について今から実践を報告させていただきたいと思ひます。テーマは「宇宙空間の概念を広げ、自然観を豊かにする理科学習」で、4年生の「宇

宙の不思議を探ろう」の実践から報告させていただきます。

目指す子供の姿をこのように設定しました。理科学習で身につける知識から科学的根拠を持った思考表現の力を高め、自分が暮らす環境とのつながりを新たな見方や考え方で見詰め、自然観を豊かにできる子供を目指したいと考えました。

実際に名前を知っている星ってあるって言いながら子供たちに聞きましたら、その知っている星を実際の空で確認したことがあると答えたのは5名だけでした。星ってどんな形をしていると思うと聞かれたら、驚いたことに半数近くが星マークです。この形をしていると答えて、球体と答えられた子は、5～6人しかいませんでした。子供たちにとって星というのは、機会があればめぐる景色という感覚であるという実態が浮き上がってきました。季節の変化も、楽しい潮干狩りも、近年話題になっている地球温暖化、これらも全て地球の中でのみ起こっている現象という見方をしていました。でも、地球の外に出たことがないので、これは当然です。

そこで、まず美しい星空の世界へ子供たちを引き込もうと、また、これから始める月や星の観察に視点をしっかり持って取り組めるようにと移動プラネタリウムの設置を依頼しました。学校に、業者の方でこういう移動プラネタリウムをプロデュースしている会社があります。体育館に大体これ10メートル四方ぐらいのドームなんですが、これを設置していただきました。内容も学芸員の方に全てお願いしまして、今夜の男川小学校の上空っていうのを映し出していただきました。専門学芸員の方から「明るい星はこれだよ」、とか、夏の大三角、北極星の見つけ方、興味を子供たちが持っている12星座などを解説していただきながら、自分が今夜見つけたい星を課題として見つけ、方位、それから高さのはかり方、それをシミュレーションしながら学ぶことができました。ただやみくもに空を見るのではなく、この方位にこれぐらいの高さでこの星を見つけないかという見通しを持った観察に挑戦をさせました。観察できた星を次々と報告に来る子供たちでしたが、中にはどの星かはっきりわからなかったという子もいました。家庭での観察には直接支援をしておりません。反対に、「教科書には1等星が一番明るいって書いてあったけど、ベガやデネブより明るい星があったんだけどあれは何？何等星なの？」っていう新たな課題を見つけてくる子供もいました。

そこで、互いに観察結果を共有する星空観察会を開くことにしました。星空観察は、結構天気に阻まれるので3回ほど延長したんですが、8月5日にやっと思うことができました。8月5日を選んだのは、この日が上弦の月だからでした。それから、火星と土星がこ

の月に接近し、夏の大三角形は見ごろです。それから、ちょうどこの日、国際ステーションが上空を通過する日だったからです。天文学会の専門家に星空講話をしていただきながら、専門的な大きな天体望遠鏡を4つ設置していただきまして、双眼鏡と交代をしながら実際の目で星空を観察しました。この日は土星の輪、それから衛星のタイタンまで、本当に米粒ぐらいだったんですが、天体望遠鏡を通して子供たちは自分の目で確認することができました。強い光で北の空を通過していった国際宇宙ステーションに、一緒に来ていただいた保護者の方々と大歓声で、シミュレーションしたもの、自分が観察したもの、それを実際の空で照合してみる、またそこでその自分の観察結果を友達同士で共有し合ったり、これ自分じゃないっていうような検討をし合ったり、そんな機会もとることができました。

月の観察の単位では、正しく結果を記録する技能を高めようと思いまして、透明シートというのを作成しました。ハンガーを曲げまして、ビニールシートが張ってあります。これを自分専用パイプ椅子というのを置きまして、観察位置を固定します。目印となる建物や木をマジックで書くと、2回目、3回目に時刻を追って重ねたときに目印をずらさないように、透明のためにずらさないで合わせて記録するよという、こういう記録用紙で観察をしてみました。

これでもなかなか、ずれたり違った結果をして「おかしい、おかしい」と言う子が出てきて、「大型シート」というのを用意しました。よく運動会で使う旗に農業用ビニールシートを張りました。ここの中央にパイプ椅子を置きまして、塩ビのパイプをてこのように座椅子の中央に固定して、高さや方角を変えられるようにしまして、観察記録者のほうが、今ここに見える、目の視点も統一はしたんですが、そこにマジックで記録をして、それを重ねていったら、ちょっとこれ実は軌跡がおかしいんですけど、子供たちは「そっちじゃない。」「あっちじゃない。」とか、「僕が見るところだ。」って言いながら、ちょっと全員で共同作業でやるっていうことをやってみたんですが、こんな感じで上がると、だんだん月は南へ向かって高く上がっていくんだ、東から南へ方位はずれていくんだっていう感覚がつかめて、この後の観察結果で、全くばらばらの月を書いていた目印をずれて書いていた子が正しく書けるように少しずつなっていました。

観察した記録をもとに、月の動き方について話し合う授業をしました。記録に関しましては、月は7月から10月末まで、もう上弦が来るたび、満月が来るたび、途中とか、もう随時記録用紙は毎日渡していましたので、特に下弦の月っていうのを昼間学校で観察が

できます。そういったことを繰り返しながら記録を重ねて、同じ日の月の観察同士で比べ合ってみようか、あるいは日にちを変えて形が違うとき、いろんな視点から話し合いをしようと思ってこの時間を組みました。

まず、資料の16ページから17ページに、この時の考えを一部載せています。このように違う結果になった子がいるんです。左の子は正しく記録ができていません。「僕の観察おかしいと思うんですけど、ちょっとみんな考えてください。」って言いましたら、右の子が「僕はこういうふうになったんだけどね。」と言いながら、観察の位置と目印を固定する必要があること、それから方位、高さを正確に記録するこぶしの高さの基準をきちっとすること、そういったことを子供たちが気づくことができました。

昼間観察した半月…ちょっと三日月、ちょっと半月でしたかね？…この観察を「夕方家に帰ってから続きを僕はやった」という子、その2人の観察をつなげてみました。つながったことによって、「東から上って南の高いところを通ったら、その後は西に沈んでいくんだね。」っていう動き方の規則性を判断する話し合いの結果につながりました。

また、半月の動きと満月の動きを比べた子がいまして、形が違っても同じ動き方をするという新たな視点で、観察結果を根拠に規則性の裏づけをすることができました。見ることができない時間帯の、「この後じゃあ多分満月は上っていった後、やっぱり西に向かうと低くなって沈んでいくんだね。」という、自分が起きている時間では観察できない、そういった時間帯の動きを推論する考えにもつながりました。

じゃあ実際続きはどうだったかっていったら、観察できた子とできなかった子といましたので、理科室の3階のベランダにカメラを設置しまして、インターバル撮影をしました。

10分置きに1秒間撮影したものをつなげた映像です。これは、男川小学校の校舎3階のベランダから見た月が沈んでいく様子です。「あ、僕の家で沈んでいった。」っていう子もいたんですが、これを見て、「あ、僕たちの推論、つまり予想は当たったね。」っていうことが授業の最後に確認はできました。

それから、技術的に結構高まってきたものは、「3日間続けて3回同じ形を記録すると、何かまた新しいことが見つかるかもしれないよ。」って投げかけたら、この子はちょうど満月前後の7月11、12、13を3日続けて観察をしました。そうしましたら、「同じ時刻に観察すると、前の日より1時間ずつ東にずれるよ、先生。」って言い出しまして、それから『「満月はいつも夜に見えるけど、三日月って絶対夜は見えない」って

…そういったこともみんなに言いたいよ。』って、観察カードを示しながら発言する、そういう姿もありました。

星がある宇宙って、ここで生まれた見方、考え方をその後カシオペア座やオリオン座の観察にも生かすことができました。星がある宇宙っていう空間に次第に興味を深めていた子供たちは、図鑑やインターネットでどんどん調べ出していきます。「空気がないらしい…星はボールのような形らしい…太陽系とかという地球の家族があるみたいだよ…」と、調べてきました。そうすると、やはり「宇宙って一体どうなってるの、本当はどうなの？」っていう疑問が出てきます。

そこで、愛知教育大学の宇宙物理学の沢教授にお願いをしまして、3D映像を学校に持ってきていただきました。M i t a k aという会社の「3D宇宙の旅」というソフトがありまして、それを使って講義をしていただきました。子供たちは3D眼鏡をかけて、地球を出発します。月、太陽、それから惑星に立ち寄って、解説を聞きながら銀河系を抜けて、最後に現在解明されている宇宙の果てまで行ってきました。チョウチョ状に広がっているんですが、チョウチョの羽のような形で。でもそれは、それが全てではなく、そこまでしかまだ観測がされていない、解明がされていない、まだまだ宇宙は広いというお話でした。最後は、数え切れない星の映像に手を伸ばしながら、泳ぎながら地球へと帰ってくる、そういった宇宙空間というものを疑似体験する授業を行いました。

地球に最も近い天体である月を知ることから、地球を知ることができます。ちょっとここに映像はないんですが、愛知県には「生命の海科学館」というところがあり、授業連携を依頼できます。専門学芸員の方に「4年生にとってわかりやすい月の満ち欠けの仕組みって教材をつくりたいんですけど」と相談しましたら、小型カメラの映像を地球の視点にして太陽を光、月を発泡スチロール球であらわしまして、モデルを作成していただきました。そこの科学館に子供たちを連れていって、実際に満ち欠けの仕組みを実験することをさせていただきました。このときに月食の仕組みについてもふれたいなと思いたので、少しお話もしていただきながら、学校でも月食の仕組みというものを授業で取り上げました。この年、皆さんもご存じのとおり昨年ですが、皆既月食があったんです。

10月8日、皆既月食観察会を開きました。このときはビデオカメラとプロジェクターをつないで、校舎にスクリーンを設置してライブ投影を行いました。ビデオカメラを通すと、本当に肉眼や双眼鏡よりもちょっとはっきりと地球の影、この丸みを映し出すことができまして、子供たちはこの月を見て、地球は丸いっていうことを肉眼で確かめられる、

自分たちが今立っている大地が影として映っているんだということを本物で確かめることができました。

月をもっと知りたくなって、JAXAにも授業連携を依頼しました。宇宙教育アドバイザーの月の専門家に来ていただきまして、その実態と地球環境や生物とのつながりを教えていただきました。地球周回衛星かがやが撮られた月の映像をそのまま持ってきていただきまして、実際の月の姿っていうものを子供たちは知りました。月というのは、地球にとって特別な存在の星でした。月のほかにも地球に近く、明るく見える星があります。でも、それは星座早見には載っていません。それは、地球の家族、太陽系の惑星たちです。直径を調べても、7京の天文学な数字に全くぴんときません。

そこで、その大きさを比べようと地球が直径10センチのソフトボールだったらという縮尺で、このように水、金、地、火、木、土、天、海を並べました。すると、太陽がどうなっちゃうのっていうと、ちょっとガス会社のタンクぐらいになってしまいまして、持ってこられなくなりました。運べない。じゃあ、その直径10メートルの円をみんなで書こうかって書いたら、体育館半分ですが、こんな感じになりました。私は甘く見ていて、教室で書いたら教室にはこの4分の1ぐらいしか床を広げられないので、1週間かけて子供たちと一緒に塗りました。でも、「太陽はでっかいなあ」って、そういう子供のつぶやきを聞くことができました。

物づくり活動も取り入れました。オリオン座を構成する星っていうのは、実際の宇宙では全くばらばらの位置にあります。でも、子供たちは世界を2Dの世界っていうか、平面でオリオン座の模様に、星もそのように並んでるっていうふうに捉えがちです。そこで、これもJAXAの宇宙教育センターの活動教材集の中にオリオン座の3D星図というのがあります。それを利用して発泡スチロール、竹ひご、それから本当に紙粘土っていう簡単な材料なんですけど、これで実際のオリオン座の位置というのをつくりました。今この子供が見詰めている方向、これが地球の方向なんです。実はばらばらに点在する星たちが、ある一定の方向から見たとき、真ん中に3つ星の並ぶオリオンの形を見ることができます。「これが地球から見たオリオン座。じゃあ他の星から見たら、オリオン座には見えない。」それを角度を変えながら子供たちは初めて知りました。

このような探求を経て、子供たちは自分が一番掘り下げて調べたいテーマを決めます。そして、ポスターにまとめる活動をしました。ポスターセッションを開いた後、地球とのつながり討論会を行いました。21ページの資料8に、ちょっと小さい字で申しわけない

んですが、各調べたテーマのチームから、その星の特徴を言いながらも、だからこういう点が地球とつながっているんだっていう地球のつながりについて意見が出ました。

それで、自由研究から見えてきた地球の姿っていうものをもう一度子供たちに見てもらいたいと考えて、問いかけました。「他の星よりすばらしいところは？」と聞いてみると、「水がたくさんある…水の惑星地球…これは他の星にはない特別な星。」「空気がほかにはない。」、それから「生き物がいる。」、やはりこの3つでした。

「じゃあ、残念なところは？」って聞いてみたら、「星が見えないほど電気を使い過ぎ。」「これは実は一番最初のプラネタリウムのところで後ろのほうには述べてあるんですが、東京、大阪、名古屋の電気が、これ衛星写真ですが、明るいのがわかりますでしょうか。実は、東京は世界で2番目に明るいんだそうです。つまりそれは、子供たちの中で、「えっ、じゃあ日本は世界で2番目に星が見えないっていう国っていうこと？」っていうつぶやきが出まして、そのとおりなんです。東京は世界で2番目に星が見えない都市なんです。名古屋も、実は子供たちが住んでいる愛知県も近いものがあります。それから、人工衛星とかの残骸、それからいろんなものがそのまま宇宙では回収されずにあるので、今現在宇宙ごみはこのような状態で、宇宙ステーションは地上から400キロメートルぐらいのところですが、もし今からもう一度月に行こうとしたら、これらをかいくぐってぶつからないように行かなければたどり着けない、というのが現状なんだそうです。こういった姿を残念な姿として、子供たちは言いました。「星が見えないほど電気を使い過ぎ。宇宙ごみに覆われた星。」、そう子供たちは答えました。

じゃあ、「すばらしい地球がいつまでも続くにはどうしたらいいかな？」と投げかけると、「水や空気がきれいだと青い地球でいられる。星がきれいに見える空でないと宇宙から見た地球もきれいじゃない」、そういう考えを持ちました。そして、「星がきれいに見える地球でいたい。どの星からもきれいに見える地球でいたい。」という願いが生まれ、「豊かな水、澄んだ空気、緑ある大地が美しい空と宇宙を結ぶんだ。」という子供たちの見方や考え方を生みました。このように理科、好きな星の学習を糸口に宇宙概念を広げた子供たちは、そこからいま一度地球に視点を戻し、自分が暮らす環境に立ち返ることができました。

それでは、研究を考察します。

まず、成果についてです。実際の夜空を自分の目で見ることと、それを結果として記録する技能の習得により得た知識は、時間の経過と天体の動きを関係づけて思考するための

基盤となりました。ひとり学習とそれを支援する教師の手だての大切さを改めて感じました。また、専門的な知識、技術を導入すること、それからモデル作成や映像資料の活用は、宇宙空間の概念を広げて、宇宙や天体という自然をより科学的な根拠を持って思考する場面につながったと感じています。子供たちの知的好奇心を刺激することの有効性も見えました。それから、ポスターで図や言葉を用いて書く活動は、かかわり合いの場面あるいは発表の場面で、自分の考えを話して伝える力に役立ちました。また、視覚的に友達の考えにふれることもでき、有効であったと考えます。

次に、課題ですが、理科学習としての面とE S Dの視点に立った勉強、両面から述べさせていただきます。

理科学習としての課題は、予備実験、予備観察は幾ら行っても、やはり子供たちの視点や技術に問題点が出てきます。できるだけ本物を、そして子供自身の諸感覚を使って追求できるような教材研究はさらに進める必要があります。そして、理科でのどの学びが自分の考えの根拠となったのか、子供自身が自覚し、その理解の有用性を実感できる授業構成をさらに練っていくことです。

E S Dの視点に立った課題としては、教師のE S Dの捉え方についての検討です。本研究では、宇宙という自分とは無関係だった世界が地球とつながった大きな自然の一部であることに広がったことで、自然界がこれまでより豊かになったこと等を捉えましたが、これでいいのか考えたいと思います。地球環境の課題は多様で、多面である中、電気の光と宇宙ごみに話題が集まったこともよかったのか。また、23ページに挙げたのですが、気象情報に目を向けた子供がいました。きれいな水、きれいな空気に目を向けた子供もいましたが、拾い上げられずに1年の学びを終えてしまいました。振り返るべき点がまだまだあります。一緒にお考えいただければ幸いです。

それから最後に、午前中、高校生の実践発表を聞いていたんです。その中の矢掛高校というところがとてもおもしろいプレゼンをしたんですが、ユネスコのUNESCOって皆さん何だかわかりますよねって聞かれて、恥ずかしいんですが、私はつきり答えられなかったんです。国連のUN、教育のE、科学のS、文化のCが入っているそうです。しっかり私は認識していませんでした。今日9校の中で、地域文化の分野にふれていたところが6校ありました。国際協力、支援、人権が延べ4校、そして私が今回研究したように自然科学的な分野から環境を見つめたことを発表した学校が2校でした。少数派なのかなって今回はちょっと思いましたが、環境問題も社会問題も切り離しては考えることはできません

ん。

それで、その中、高校生がこう言ったんです、「地域を活性化するには、地域を再興するには子供の力が必要なんです」って。大人でなく高校生がこう言ったことに、私は心が震えまして、私はこういう高校生になる小学生を、今の目の前の子供たちを育てていきたいと、本当にそう思いました。ですから、こういう高校生になれるような、将来そういった考えを、小学校で培った考えが基盤となるような、残っていけるような素地をつくっていくこと、それが小学校教育の中でESD学習を展開していくのに大切なことなのかなと考えながら、午前中、高校生の発表を聞きました。ご清聴ありがとうございました。よろしくお願いします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

それでは続きまして、中学校の実践のご報告をよろしくお願いいたします。

2. 大田区立大森第六中学校 柴崎 裕子 教諭

「ESDの推進および授業改善」 ～未来につなぐ地域連携教育～



初めまして、東京都大田区立大森第六中学校、柴崎裕子と申します。

本校は、2011年1月1日に正式にユネスコスクールに加盟いたしました。大田区の山側、この辺にあります。

田園調布といったら割と知られているかと思いますが、その近くにあります。隣接地には風光明媚な洗足池、ここは日蓮上人が別邸跡地に、これが歌川広重が書いた浮世絵なんです、これが洗足池ですが、けさをかけた松が今でも残っています。また、勝海舟が愛した風景があり、本校は勝海舟の別邸跡地に建てられました。もともと住宅地ですので、教育熱心な家庭が多いのですが、生徒の状況はいい学校、いい大学、いい就職というだけで、何のために学習するのかわからないという生徒が多くいました。

そこで、学習指導要領で推進しているユネスコスクールの理念に基づく持続可能な開発のための教育、E S Dを5年前に始めることにしました。これこそが生きる力につながり、学びの本質があると確信しております。多くの活動を始めていくうちに、ユネスコスクール最優秀賞、環境教育農林水産大臣賞、東京都教育委員会表彰などを受けることができました。

そのE S Dの成果として、自己肯定感が育まれます。地域の活動を主に始めると、ありがたうと感謝され、自己有用感が、そして自己肯定感が育まれています。人を思いやる気持ち、規範意識は大田区一番です。また、課題解決能力を育むための力が養われるのもE S D、O E C Dがよくうたっております能力とも一致しております。

そこで、26年、27年度、大田区教育推進校として、また27、28年度国立教育政策研究所の教育課程発表校として研究を進めているテーマ、これがE S Dの推進及び授業改善です。

10月16日に発表した際、いまだE S Dが周知されていないために、ワークショップ形式で発表を進めました。これはそのときのものなのですが、S Dの概念を理解していただき、持続可能な開発を進めるための教育であるということを強調しました。E S Dの概念形成、そしてE S Dで育まれる力と態度を5年間校内研修で取り入れ、全教科が3つの分科会に分かれ、研究を進めてきました。他教科から見たアドバイスは有効でした。

まず、思考力分科会では、文部科学省教育課程企画特別部会の論点整理によれば、新しい指導要領における育成すべき能力、資質は、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）」、「どのように社会・世界とかわかり、よりよい人生を送るか（人間性や学びに向かう力）」などとされています。

本分科会内におきましては、この中で思考力に焦点を当て、生徒の思考力をいかに育むかをテーマに研究してまいりました。一口に思考力といっても、大変幅が広いものです。そこで、私たちは国立教育政策研究所、学校における持続可能な発展のための教育に関する研究にある学習指導で重視する3つの力を思考力の中身と考え、研究を進めることにしました。

第1番目は、批判的に考える力です。この言葉は、クリティカルシンキングの訳語と考えられます。クリティカルシンキングは、代替案の思考力と訳されることもあるように、相手の考えを否定的に批判することではありません。多くの場合、課題の解決方法は1つ

ではなく、それぞれの考えを認めながら、よりよい解決方法を見出していく力であると考
えています。

2番目は、未来を予測して考え、計画を立てる力です。まず、よりよい未来像を共有化
し、それに向かってどのようなスキルやステップが必要かを共同して考え、実行していく
力と考えました。

3番目は、多面的、総合的に考える力です。情報を共有化しながら、お互いの立場や考
えの共通点や相違点を理解し、共感したり、統合したりしながら、課題を解決していく力
です。

このような思考力を育む上で重要なことは、まずその授業でどの思考力を狙いとするの
かを焦点化することだと考えます。それとともに重要なことは、適する授業形態を研究す
ることです。アクティブラーニングの取り組みは、極めて有効なものと考えられます。課
題の発見と解決に向けて、主体的、共同的に学ぶ学習として、プロセス、インタラクショ
ン、リフレクションの3つの過程をより生徒の思考力を伸ばしていけるものと思ってい
ます。

今後の課題として、まず本校のESDカレンダーでの位置づけ、どの思考力をどの単元
でどこまで育てるのかという教育課程全体での見通しを持つこと。

次に、アクティブラーニングの手法の開発、思考力の評価法の検討が上げられます。文
科相の学力・学習状況調査のB問題についての高い正答率を示していますが、それ以外の
評価法について検討、開発することは必要と考えています。

次に、コミュニケーション分科会です。文科省のコミュニケーション教育推進会議で
は、「グローバル化が一層進む21世紀は多様な価値観、異なる文化や歴史に立脚する
人々とともに課題を解決していかなければならない多文化共生の時代である」と言ってい
ます。

このような社会の中で、持続可能な社会のためにも解決していかなければならない問題
や課題に対する答えは一つではなく、また正しい答えがないことが問題解決をより困難に
しています。多くの考え方の中から互いの立場を尊重した上で最善の道を探していくこと
が必要になりますが、そのためにはコミュニケーションは欠かせません。多文化共生時代
の問題解決のためには、人間関係を深め、対話により自分の意見を見直し、相互の考えを
伝え、深め合うことを可能とするコミュニケーションを行う力を育てることが重要である
と考えました。

分科会では、まず育てたい力を5つ考えました。まず、課題に対して自分の考えを持ち、伝えたいことをしっかり持つ発想力です。これを伝えたいと思うものがなければ、コミュニケーションはとれません。2つ目は、その伝えたいことを相手にしっかり伝えるために根拠を示しながら、相手に伝わるような言葉であるいは態度で表現する論理力です。3つ目は、相手の意見をしっかり聞き取り、相手の言いたいことを認める聞く力。4つ目は、相手の意見を聞き、それをもとにさらに自分の意見を構築する批判的思考力。そして、この4つの力を駆使して、相手が誰であろうと自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、やりとりする中で課題解決の糸口を探す力です。

私たちは、この力を授業の中で育てるために、コミュニケーションを行う活動を意図的、計画的に設定する取り組みをしてきました。そのために、討論会やディベート、ゲーム形式、スピーチなど、また人数も2人、4人、6人などで取り組みました。また、自分の意見をしっかり言ったり、相手の意見をしっかり聞き取ったりするために、書くことも重視しました。

これは授業の様子です。4人のグループワークが、全員が話し合いに参加しやすく、生徒の積極性が引き出しやすいと思います。あえて司会やリーダーを決めないことで、誰でも話し合いに参加できるようになりました。

自分の考えを筋道立てて組み立てたり、相手の意見を正確に聞き取る力を育てたりするため、ワークシートも必ず用意しました。ホワイトボードをグループごとに配り、これを使って発表したり、またほかの班にこれを使って説明したりしました。簡単に書きかえられること、色を使って強調できること、黒板にも張ることができるという点で有効でした。

生徒の感想では、「自分の意見を言ったり、ほかの人の意見を聞き、考えを認められた」、「相手の意見を踏まえて考えることが人と接するときには大切だと思った」、「他者の意見を参考に自分の意見を振り返り、共感や批判をすることで考えを深めることができるようになり、発想力がつきました」。また、「1つの教科で学んだことを他の教科で生かすことができるようになりました。」「1人の表現力の向上は、クラス全体の表現力を向上させることができますと思います。」「話し合い活動を多く取り入れた結果、どのようなグループでもスムーズに話し合いができるようになりました。」「よく人間関係がよいのでコミュニケーションがとれると言われますが、コミュニケーションをとる活動をすることで相手を尊重する姿勢が付き、よりよい人間関係をつくることができるのだと思

ます。」

最後に、1人で考えるときよりも人の意見を聞き、より深い考え方ができるようになったことで、自己肯定感や達成感を感じることができるようになりました。みんなで課題に対し考え、コミュニケーションをとることで授業形態を意図的、計画的につくり、継続していくことが必要であると考えます。

今後の課題ですが、1回の授業でコミュニケーションを使う力はつきません。今後もコミュニケーションをとる授業形態を意図的、計画的につくり、継続的にしていくことが必要であると考えます。

50分の授業を使って行うことは、時間的に難しいと思いますが、5分、10分でもみんなで考える時間をとることで少しずつ力がついてくると思います。このとき、興味関心のあるテーマや身近に感じることができるテーマを設定することが、より効果を上げることになると思います。これからも全ての教科や行事などで話し合っ、課題解決を図る取り組みを続けていきたいと思っています。コミュニケーションの意義は、考える機会を増やし、他者のさまざまな考えを聞くことで自分の考えを深め、課題解決に近づく点にあると思います。

E S Dの態度分科会では、持続可能な担い手としての必要な資質、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度を育てることとしました。求める生徒の理想像として、「異文化を拒まない、命を大切にする、積極的にかかわる」、この3つを立て、授業改善のテーマを「平和」としました。各教科で共通理解を図るために協議をし、クロスカリキュラムの作成から始めました。生徒が主体的に学び、ユネスコスクールとしての交流を中心とした行事での活躍、そして態度分科会の成果がこれらの取り組みの中で見えてきました。課題として、平和に関する概念について適当であったか、ユネスコスクール以外での実践がどうなのか、それからクロスカリキュラム、今後ますます完成させていくことなどが挙げられています。

我々の六中のE S Dというのは、実は授業改善から始まったわけではありません。3つの主な環境教育、それから防災教育、国際理解教育からE S Dを子供たちに活動を通して学ばせました。

まずはその環境教育なんです、本校、このユネスコスクールに入る前は荒れておりました。子供たちも荒れを経験した中で、まず「学校をよくし隊」というのができました。これはボランティアグループなんです、その子供たちが一生懸命学校をきれいにしたりと

いう活動が始まったんですけれど、その代が卒業した後、ちょっとよくし隊というのは余り良くないねということで、勝海舟の別邸跡地ということもあって、坂本龍馬の海援隊、あの名前をなぞって「農援隊」というものを発足しました。

始業前に活動、これは洗足池の、毎週金曜日、洗足池清掃の様子です。それから、勝海舟のお墓、ここら辺をよく磨いております。そして、校庭非常に広いものですから、落ち葉が大変なんです、落ち葉のミミズコンポストをつくる。その落ち葉で地域の人や小学生を招いて焼き芋大会。それから、夏休みは「きれいきれい活動」—これは小中一貫ですが—そして、ミミズコンポストでできた腐葉土でゴーヤのグリーンカーテンづくり。これは、そのゴーヤを9月の最初の給食で食べるということです。

そして、環境教育の最も大きな活動として、蛍復活プロジェクトがあります。洗足池で、まずこの水生植物への造園、そして毎年6月の放流式、昨年度は200人ほど地域の方、それからよそからもいらっしゃいました。自生もしつつあるんですが、さらに水質浄化が必要だということで、「水生植物いかだ」—こんなものを浮かべて景観も大切にしております。

また、近くの駅前花壇、これを毎月1回メンテナンス作業を行っています。これには東急電鉄さん、それから東京都都市緑化基金などの助成を受けて活動しております。これらの活動によって、地域から感謝されるっていうことが多くなりました。

また、こういうお祭りにも参加しています。江戸伝統野菜ってご存じでしょうか、「馬込三寸人参」というものがありますが、これはやはり近くで畑を営んでる農家の人たち、ご高齢が進み、なかなか存続が危ぶまれているので、本校に依頼が来て、今飼育してありますが、なかなか難しいです。このように身につけてきたボランティア活動ですが、やはりここでも自己肯定感、養われたと思います。

防災教育では、私たちの地域でも類に漏れず高齢化が進んでおり、中学生が地域の役に立つことができないかということで、避難所開設訓練が始まりました。学校を逃げ込む場所から災害に立ち向かえる場所ということで、2年生の町なか点検、自治会の方々と一緒に消火器の場所とか、そういったところを点検してます。大田区学校防災拠点整備事業モデル校となりました。3年生が全員このような活動で動いてます。けが人の手当てとか、それから全員が救命技能認定証を取得します。

さらに、国際理解教育ですが、ユネスコスクールであるということで、おかげさまでといますか、さまざまな国が本校へ来ていただいています。これインドネシアの方、それか

らモンゴル、それから中国ですね。そして、本校からも中国へ視察に行かせていただきました。スペイン、そしてこれは国際ユース作文コンクールで受賞したベラルーシの中学生の少年が本校に来て、一緒に交流をしました。これは韓国招聘プログラムですが、韓国の先生が来て、授業を行ってくれています。この通訳は、全てPTAのボランティアで賄いました。それから、今年度始めました国際共同プロジェクト、インドとの食をテーマに交流をしています。

そして、平和維持活動です。本校の校庭に防空ごうが見つかりました。それを保存工事して、そしてこれはちょうど広島市長からいただいたアオギリ2世、ちょうど被曝したアオギリが何と種を残し、その種が芽を生やし、その苗をいただいて、そこに植樹している様子です。それを機会に、全校全員でつくった平和の歌、今作成中です。

学校行事も本校はESDに絡めて、責任感、協調性、団結力、こういったことを念頭に全て行っています。修学旅行は東北へ行ってつながりを、それから運動会、文化祭、それから学習成果発表会とさまざまな活動でESDを意識した形で、みんな課題を持って活動しています。部活動も盛んです。さらに全ての教室に新聞をとということで、6紙、毎朝24部が学校に届けられます。世界のトピックスということで、毎日各クラスでそのトピックスを選んで発表し、毎月1回共有の全校放送で記事を読んで、生徒が感想を書いています。はこのことによって批判力などを養っております。進路指導も順調に行っていますという、ちょっとこれは宣伝なんです。

昨年度、この岡山市で世界大会がありましたときにも、本校が参加させていただきました。ちょっとこの辺は飛ばさせていただきます。

成果と課題ですが、本校でも生徒アンケートをとりましたが、その中でやはり高かったのが、他者を理解した上でのコミュニケーション能力、自分たちで培っているなど、それからボランティアに積極的に参加する態度が養われた、これは生徒の意見の中で80%以上の生徒が肯定的な回答をしています。「自分の考えを伝えたり、ほかの人の考えをよく聞いて、自分の考えに人の考えを取り入れていくことは大切なことだと思う。」それから、「地域やボランティアに参加し、地域とつながりを持ちたいと思う。」こういった数字、2年生が残念ながら低いっていうのはどこのところでもあるのかもしれませんが、確実に3年生はそういったところを獲得して卒業していってくれています。「ほかの人と協力、共同して物事を進めることができる。」このことについても3年生、頑張ってくれます。

授業改善で取り組めた内容ですが、やはりアクティブラーニングの効果的な導入、これはE S Dの実践があったからこそと思っています。3つの分科会で、思考力分科会、コミュニケーション分科会、E S Dを育てる会の分科会、こういった中で育まれたというふうに思っています。まず課題設定を行い、そして学びのプロセスを工夫し、他者との共同やほかからの情報などを相互作用を通じて自分の考えを認め、最後にみずからの学習活動を振り返る、この4つの段階の中で生徒は学習態度を養っています。

課題として、アクティブラーニングの導入を図るためには、やはり年間の指導計画を検討しなければいけないと感じています。時間がかかります。やはりこれを常に話し合い、話し合いしていくと、やはり時間はかかります。ですから綿密に、どれもこれもアクティブラーニングを取り入れられることではなく、やはり年間の指導計画を十分に考えていかなければいけない。そして、話し合い学習や共同学習という意味では、思考が深まり、発展的な学習に対してはとても有効だというふうに感じておりますが、やはり基本的な事項の定着、これは絶対必要ですので、併用、これが絶対的な必要性を感じています。

ご清聴ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

それでは、今すぐ確認しておきたいことはありましたらお願いします。

○参加者

失礼します。どうも先生、ありがとうございました。

お二方の先生にお聞きしたいんですが、ユネスコスクール加盟に当たって、何かインセンティブというか、先生がユネスコスクールに加盟しようというのは、何か外から働きかけとか、自発的なものとか、そういう何かきっかけのようなものがありましたかということと、それからE S Dの学習、それからユネスコスクールでのいろんな学習をしていく上で、子供たちがそのE S Dをどのように捉えているのかみたいなものを、もし子供たちの声のわかるようなものがあつたらお聞かせいただきたいのと、それから、学校全ての先生方がやはり共同してやらないとE S Dって進まないと思うんですけど、何か先生方の秘訣のようなもの、この何か典型的なものがあれば教えていただきたいなと思いますので、よろしくをお願いします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

3つありましたね。ユネスコスクール、E S Dをやり始めたきっかけがどうだったかということ、子供たちはそれをどんなふうにとめてるんだろうかということ、先生たちはどういうふうにとめてるんだろうかっていうことの3つだったかなと思います。

では、小学校のほうからちょっと聞いてみましょうね。

○稲垣裕子教諭（岡崎市立男川小学校）

ユネスコスクール加盟に当たってですよ。それが、確か平成23年度のこと、私は一般の教員でした。愛知県の岡崎市なんです、市を挙げて、ちょうどE S Dの10年の岡山の大会を目指す前のときで、やはりこういった見方をして教科学習なり教育を進めていかなければ、これからの学校教育はだめだという考えからやはり本校もユネスコスクールに加盟して、こういった研究をこれから進めていこうっていうことで、それでその当時の校長が申請をすることになりました。1年半から2年かかりましたから、申請は大変で、24年度から指定されました。そこから本当にE S Dの学習を目的にスタートをしたっていう経緯で今に至っております。

2つ目が、E S Dを子供たちがどう捉えるかですね、小学生っていうのは持続発展可能なんていう難しい漢字を並べてはわからないので、先ほどちょっと中学校との違いを感じました。小学校ではE S Dありきではなく、教科学習していて、逆にこういうことを勉強したらこういうことが見てくる、こういうことが見えた、ほらこんなことにつながったよねっということを教師のほうが見つけます。子供たちは教科の学びから自分たちがつけた見方、考え方をどんどん一人学習でノートに書きとめ、それについて話し合いをしたら、今日の振り返りというのを必ず、「僕は、私は今までこう思っていたけど、今日の授業でとか、今日誰々ちゃんの意見を聞いてね。」っていう、そういう振り返りを必ずしてるんですが、それを子供たちはE S D勉強と呼び、E S Dノートと呼んで一冊のノートをいつもためているっていう、そういう勉強の仕方をしています。どっちかという、小学校ではE S Dの種まきを教師のほうの子供にしているという感じです。

3つ目が、教師の声ですが、それで小学校での勉強で、やはり教科学習が大事だとうちはやっているんですが、私は理科の専門で理科をやっていますが、理科の専門ではない先生がたくさんいるわけで、そこで校長が、やはり教員が本当に活性化し、若い教員のレベ

ルを上げ、自分たちでこの学習に取り組むには教員自身が自分の好きな専門教科、やりたいことをやらなきゃだめだっていうことで、本校はその先生が今年これをやりたいっていうもの、好きなものをやらせて、好きなだけやらせていただいているっていう、そういう現状で、すごく若い先生たちのほうが逆にパワフルで、アクティブで、今研究を進めているという、そういう現状です。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます、続いて柴崎先生いいですか。

○柴崎裕子教諭（大田区立大森第六中学校）

中学校のほうでは、まず導入のきっかけは、平成23年度大田区教育研究推進校になったということがまずはきっかけなんです、直接的な。ただ、何をやろうかといったときには、東京電力、今とは違う状況でしたので、研究会をいろんなところで開いてた中に、このESDを研究会として行ってたんですね。それを聞いてきて、ああ、これなら全職員でやれるっていうふうに思ったのがきっかけです。

先ほどもちょっと申し上げたとおり、学校なんかを壊す生徒が多くて、今日はトイレ、次の日はブザーが鳴るみたいな、そんな毎日を過ごしてたものですから、何とかそれを脱却したいと。それから、割と二極化しておりまして、住宅地ですので、教育熱心なご家庭もあって、「じゃあ私は関係ないわと、僕は関係ないよと、いい学校へ入ればいいよ。」っていうような生徒がいたりもして、結構二極化するような中で、何か違うんじゃないかと、もっと学びの本質、何のために勉強するのか、違うだろうっていうところから、「あ、ESDならいけるんじゃないか？」と。「学びの本質というものがそこにあるんじゃないか？」ということから始めました。

そして、生徒の変容についてですが、とても、やはり、このアクティブラーニングを手法にしてから、特に授業の中での子供たちの変容がみるみる変わってきました。まず、先ほども言いましたように環境教育とか国際理解教育とか、そういったところから始めて、子供たちはやはり意欲的になり、「何で学ぶの？」っていう声はなくなりました。とにかく「社会で役に立つ人間になりたい」という割合が非常に増えたのは確かなんです、それにさらにプラス授業改善の中で、アクティブラーニングとか、そういったものをしていくと、我々もその変容を見るためにESDポートフォリオというファイルをつくって

るんですが、そのファイルの中で見ていくと、子供たちはやはり「私がわからなかったものを何々君はわかって説明してくれてよくわかるようになった」とか、そういうような少しずつの変化が見えるようになってきたのも、ここ数年、明らかに変わってきた点かなというふうに思っています。

それから、全ての教員がっていうのはなかなかやはり温度差があります。最初のきっかけは校長でした。校長が強引に、「今はつらいけれど、きっといい成果が見えるよ」って言って、もう本当に半ば強引に我々お尻をたたかれながら進められたというのがありますが、でもやっていくうちに、やはり我々のほうがこのE S Dの面白みに気がついていくというか…何か乗せられて、この流れに流されて、なかなかもう止まらなくなってしまうというところがありまして。やはり授業—うちは教科ごとの研修会ではなくて、3つの分科会でいろんなさまざまな教科が一つの分科会に入ってるというのが特徴で、いろんな教科の観点からその授業を見るということをやっていますので、「もっとこうしたらいいんじゃないの？」っていうような教科からアドバイスがある、ということが結構大きいかと思います。

O J T、O J Tとは言ってますけれど、研究推進委員会も開きまして、その中でやっぱり組織をつくるっていうことも、これ大切かなと思っていますが、東京都では主幹教諭—私は指導教諭と言っているのですが—その教員たちがまず次の研修会ではこうしていこう、ああしていこうという話し合いをして、そして実際の校内研修では「こんな授業、あんな授業、あのときこうだね」っていうふうな話し合い、それから指導案のもとに話し合いすることができたのが割とよかったかなというふうに思って。今では、多少の温度差はありますが、でも全員が楽しい授業、子供たちがやはり笑顔になるような授業を目指して頑張っていく、いけるっていうのが、やはり教員として手応えを感じるところかなというふうに思います。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

今のご質問、そして回答で、また大分イメージが湧いたかなというふうに思います。

では、この後休憩をとって、グループで少しディスカッションしたいと思います。最初に言いましたが、2校のお話を聞き、「どうE S Dを日常的な授業の中で実践化していくんだろうか」というポイントをA 4の紙にちょっと大きく、共有できるように書いても

raitai to omoimasu. nanjirō no majikku demo kōkō desu no de, chōtō to ōkime ni kīwōdo o
shikite itadakeraba to omoimasu.

ディスカッション・ワークショップ 「ESDの日常授業における実践に向けて」

○司会 藤井

じゃあ、“ESDの日常授業の実践化のポイント”ということで書いていただいたので、イメージはこんなふうに出していただきながら。まず、そちらの先生からお願いします。

○参加者(鳥越)

鳥越と申しまして、岡山県が一番端っこにあります西粟倉村の教育委員会に所属しています。昨年まで11年間を西粟倉小学校のほうで教員をしていました。定年で辞めました。そこで「ふるさと元気学習」という取り組みをしていました。ESDという言葉は使ってはいないのですが、基本的にESDだなと思いながらやってきてまして、今年の4月、その前ですけども、定年の前にみんなで一生懸命話をしました。そろそろESDという言葉を使ってもいいし。

というのは、やはり「ふるさと元気学習」という一つのアカデミーの特色を出そうという言葉が使われてきたんですけども、いろんな広がり、つながりを考えますと、共有、世界的レベルで使われている言葉、ESDという言葉をそろそろ受け入れてもいいかなと。なかなか村の中にESDっていうのは浸透しませんけれども、私たち自身はそれを受け入れていく必要がある、勉強をさせてもらう。それで本年度から、西粟倉小学校では「ふるさと元気学習」イコール「ふるさとを元気にするESD」という、そういう呼び名につけ加えました。

話が長くなったんですけど、そういうことで、5年ほどやってきまして、教員をやった中で大事だなと思ったことがあります。

一つは、学校として子供たちをどういうふうに力を育てたいのかを真剣に吟味しましょうと。それはESDでダブらないわけがない、子供たちにそれを伝える力を一生懸命考え

ますということです。それはみんなで、要するに学習活動を通して育てたい力を真剣に考えようと。

それから、もう一つも今までありましたけど、私たちの授業を変えていく必要があるかなど。それは要するに日常の授業ですよ。特別な授業じゃなしに、日常の授業をどうやって変えていくのか。簡単に言えば、私たちの中にしみついている、教えるという授業を、子供たち自身が少しでも学び合って、自分たちで答えを見つけていくような授業にどうやって変えていくのかと。一つは私たちの発想を転換しなきゃいけないのが一つと、その筋道は、一体どういうふうにしたらそこへたどり着くのかなという、その辺がポイントじゃないかなというふうに思います。

それからもう一つは、教材開発力といったときに、これ先ほどの先生のお話を聞いて、そうだなというふうに思いました。やっぱり一人一人の先生が自由度を持って、その先生の得意なことや、やりたいことや、そういったものが反映されるようなものじゃないと、形だけできてもだめなんだということを思いました。以上です。

○参加者(片岡)

片岡と申します。私も教員ではなくて、市教委が今年構築したコンソーシアムの中のESDコーディネーターとして、岡山市の小学校や中学校を中心に、仕事をさせていただいています。もともと岡山ユニセフ協会に所属しています。

○司会 藤井浩樹(岡山大学大学院教育学研究科)

外部講師としては？

○参加者(片岡)

はい、毎年何度も依頼をいただいています。授業構築は難しいのですが、ESDの視点を持ちつつ考えています。

そもそもESDは身近な問題や事柄に取り組むことですが、ユニセフの講座では、遠い国の知らない人たちのことを話題にすることになります。そこで、まずは自分の暮らし、地域から世界とのつながりを考えます。つながりが見えてくると、自分の意識や行動が変わることで、結果的に世界の変化につながることを知ります。

それから、学校で問題になる活動の継続性ですが、教員の頻繁な配置換え、あるいは

子どもたちの縦のつながりが持ちにくいことなどが挙げられると思います。

稲垣先生のお話の中で、もうこれだと思ったのは、専門家をどんどん活用していらっしゃる事です。もちろん、先生自身が専門家でいらっしゃるんですけども、さらにその地域なりの専門家を活用することで、日常的なつながりが生まれてくる事例もあります。

<中略 以下、中学校の分科会の記録>

○参加者（中島）

今は教育研究研修センターで、先生方の研究と研修を担当している部署にいます。今日は、実は保護者のような気持ちで、あの生徒たちが1年後どういう育ちをしているのかと思い参加しました。もう全国大会だけのつながりになっていたらいけないなと思ったのと、県のユネスコスクールの高校の人たちや岡山市のコンソーシアムともつながって、こういう会が岡山でコンスタントに開かれればいいなというふうに思いました。今日は高校生よりも一層成長した姿を見て本当にうれしかったです。

もともと中学校の教員をしていてセンターに4年間、それから指導課に2年間いて、それから世界大会実現のために約2年間、ESDの世界会議の推進局に、それから一度指導課に戻って今の部署にいます。私の務めは、せつかく世界大会をして、高校生たちの成長する過程を見てきた者として、その成果をASPnetを通じてどのように発展させているのかなあとあって、楽しみにしてきました。

先ほど質問させていただいたので、私自身は納得しているんですが、このようにまとめてみました。学校でやっているいろんな勉強が全てESDなんですが、余りにも今やっている学習に無理やり結びつけようし過ぎていて、先ほどこちらで発表された小学校の先生もそうだったんですけど、ユネスコの意味を私は知らなかったんで、私なりに勉強するところから始めました。

ASPネットとユネスコの理念っていうのは、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というところから発生しているところに立ち返って、ESDって何だろうなって逆に考えるところから始めないといけないのかなって気もします。

例えばユネスコスクールになったから、今までやっていたそれぞれのこういった学習がESDにつながる、そっちの方向で教員としては考えがちなんですけども、ユネスコス

クールって何かいつも行きつ戻りつしながら、大人たちが、これは先生だけじゃなくって、地域の方々も含めて、うちの地域の子供たちをこんな子供に育てたいんだ、だからE S Dが要るんだ、E S Dが結局必要なんだよっていう共通理解のもとに、行きつ戻りつ人権の勉強をしながらE S Dにつながり、E S Dの勉強をしながら、またそれが人権に戻ってというような、そういった共通認識のもとに、そういう根っこの部分をやっぱりしっかり持たないといけないのかなというような気がしています。

そして、ユネスコスクールの活動とE S Dの世界に入ってしまった人はすごくマニアックなんですけど、はまってしまう傾向があるので、それをE S Dを知らない人にも広げていく、そんなこともしていかないといけないなというふうに思ってます。特に環境に強いで、環境教育イコールE S Dになってしまっている気がします。それぞれの学校の実態に沿ったE S Dの要素が必ずあるというふうに考えてます。

特に中学校では、今日の取り組みにもありましたけれども、E S Dカレンダーをつくるなどして、小学校はお一人の先生が朝から晩まで全ての教育活動を統括できますけれども、ばらばらしてしまいがちな教科間で、教科の専門性を問うが余り孤立してしまったりするところがあるんじゃないかなあというふうに思いまして、例えばテーマごとに先生方がまとまって、先生に教えていただいたような形で、同じまないとの上で勝負をするというか、理科だから理科でやってとか、英語だから英語でやってみたいな形じゃなくって、何か共通のテーマのもとに先生方が話ができるような、そういう仕組みづくりをやはりしないといけないのかなあというふうに思います。

岡山市の教育委員会でも、「いきいき学校園づくり」という学校訪問があったりするんですけども、どうしても中学校の先生って教科ごとにまとまって反省をしようとする傾向にあるんだけど、「こんな子供に育てたい」というテーマごとに、先生方が教科の垣根を取っ払って話ができるようにならないといけない、同じことがE S Dにも言えるんじゃないか、というような気がします。環境教育だから、それに強い人がするってというような形にしないで、「こんな子供を育てようよ」っていうところに立ち返るためにも、共通言語としてE S Dの年間カレンダーがつくられていたりとか、教科間連携が図れるようにならないといけないな、というふうに思います。

先生が言われたように、やっぱりE S Dを学習することで、今日だけじゃなくって、時代をさかのぼって今日につながる昔の勉強ができたり、それから未来につながる、時空が行ったり来たりする、時空のつながり、それから地域のつながり、今の時代を生きる他国

の人とつながったりするような縦のつながり、横のつながりができるのが、まさにこのESDのネットワークを生かした強みではないかなあというふうに考えています。

今日、午前中の高校の発表の中にもあったんですけど、先日うちの校長研修の場で、ある講師の先生が来られたんですが、地域学習に絡んで、我々がつけようとしている学力ってというのは、子供たちに「村を捨てる学力」をつけようとしているのか、「村をつくらうとしている学力」をつけようとしているのか、これをしっかり捉え直さないといけない



ねというような言葉が、もう本当に胸に刺さりまして、学力をつけて自分の村を捨てて外に出る学力ばかりをもしかしてつけようとしていないか、それを学力と捉えていないか、今日の矢掛の高校

生であったりとか、閑谷の発表なんかを聞きながら、あの子たちが村をつくっている、町をつくっている、町を活性化するために自分たちの力が必要なんだ、あんな子供たちの姿をやはりどうやったらつけることができるのかな、我々が捉えようとしている学力というのは何だろうというのを、またこのESDを通して学び直さないといけないんじゃないかなというふうなことを雑感として感じました。

以上です。

○司会 住野

ありがとうございました。

教育学部の住野と言います。では私から。私は3枚書きましたけど、重なってるので、1枚目はやはりESDカレンダーをつくって、教科でも総合的な学習の時間でも特活でもESDを計画的に行うんだっていうことを先に先生イメージしてないと、「どう自分は、いつ、何で、この教科の中でESDやるのか」っていうのはイメージできないので、それが必要じゃないかと思うのが、1つ目。

それから2つ目は、やはりどうしても中学校って、先ほどもありましたが、教科でしか授業研究をしないので、教科を超えて授業を研究することが当たり前ができる、そういう仕組みっていうのが中学校は必要なんじゃないかっていうのが2つ目。

3つ目は、さっきのアクティブラーニングと基礎教育の関係でも似てるのかもしれないけれども、教科学習を全部E S Dにするとか、ああいうことを考えるよりも、今教科書を使って教科で学習した内容を活用、発展させて、さまざまなSDにかかわる、持続発展にかかわる課題に取り組むような、そんなのがあるんじゃないか。それはさっきの小学校の理科の話聞きながら、理科は理科としてしっかりと学習する、宇宙の仕組み、月の動きがわかる、それを活用、発展させて、じゃあそれを見ながら「地球って一体どんな星なんだろう」、「地球の持続発展のために何ができるかな」という、そういうSD課題に取り組む発展的な学習活動が単元の中に位置づけられていくような。そういうやり方っていうのもあるんじゃないのか、全部教科学習をE S D化しようって考えなくてもいいんじゃないの？ということを感じたっていうことです。そういうふうにした方が、教科でやってきた先生たちには、「全部E S D的にやる必要はないんですよ。」っていう言い方が、中学校ではできるんじゃないか？っていうことも考えたということです。

では、先生には是非、自分の発表のポイントを絞るとどこですか？…お願いします。

○柴崎裕子 教諭 （大田区立大森第六中学校）

本当に皆さんのおっしゃるとおりで、まずは、キーワードはやっぱりつながりだと思うんですね。要するに時間的なつながりももちろんそうですし、地域とのつながり、世界とのつながり、社会と人とのつながり、全てここに来るなっていうふうにE S Dは思っているんです。このつながりを通して、さまざまな多くの活動につながっている。

4年前から本格的に始めたんですけど、最初は本当に落ち葉掃きから始めた。だから、最初の学年の子たちは、一様に「ユネスコスクールって何？」って聞くと「落ち葉掃き」って答える。そんなところからのスタートだったんですね。ただ、ボランティア活動、それがどんどんどんどん広がっていくうちに、「ああ、これがSDか。」というふうに思えてきたのは、二、三年前ぐらいなのかもしれません。かなり時間かかっています、本校の場合は。

ただ、じっくりじっくりやってきたおかげで、世界からもお声がかかるようになって。やはりそういった体験って、実際にテレビで見る中国の報道とか韓国の報道とかあるじゃないですか？そのニュースを見たときに、「うん」って思っていたことが、実際に韓国の先生と対話をすることで、「ああ、やっぱり同じ人間なんだ」と思えるっていうことが、やっぱりユネスコスクールであって良かったなって思える一つですね。

そういった活動を通して子供たちは、私たち教員以上に色んなものを感じ取ってきて、何で勉強をするのと言うようにならなくなったっていうのは、これ本当に実際そうです。ただ「いい学校へ行きたい、いい高校へ行きたい、いい大学へ行きたい」…親のほうはそう思ってますね。ですが、子供たちは「これをやりたい、あれをやりたい、こんな人になりたい、だから今勉強する。」って言えるようになってきたのも、このE S Dかなっていうふうに思います。

あと、組織の話今日は大分させていただきましたが、小学校の先生はもうかなり細かく理科の教育実践のほうを報告されて、私のほうはちょっと薄っぺらなような感じがして申しわけなかったんですが。この学校内の組織づくりということについては、かなり私も苦労しました。最初E S Dって全くわからないようなところからのスタートですので、校長自身も分かっていない。「何だそりゃ？…とにかくやれ！」みたいな感じで、それで私たちもいろいろ勉強をしていくうちに、「ああ、こういうものなのかなあ？」っていうようなところからのスタートで、最初は私一人が息巻いていても、皆さん「何それ？」っていう感じで、「一人でやってれば？」っていうムードは確かにありました。

でも、それがだんだん、区の教育委員会もO J T、O J Tって言ってくださって。割と今まで教諭、管理職っていうふうなものが東京都であったのを、主任教諭、それから主幹教諭、指導教諭、そして副校長、校長、そういうふうな階級っていうんでしょうかね。そういうものから始めることによって、やっぱりベテラン教諭が若手を育てるといふようなところに我々が置かれたときに、じゃあ「何を若手に伝えたらいいのか？」っていったときに、やはりこのE S Dはとて分りやすかったというか。若手教員に伝えやすかったっていうのは一つあります。

それで、まず研究推進委員会を開いて、何が足りないか、と。かなりこれも、“思考力”と言ってもどこでもやっていることだから、この“E S Dと絡める”ということについても色々話し合いもしました。かなり時間をかけてやってきた中で、それぞれの3つの分科会でリーダーシップをとらなきゃいけないベテラン教諭もかなり考えました。そして、若手教員はそれ受けて、「とにかく研究授業をしろ。」って上から言われるからやるんですけど、指導案を「これは普通と同じじゃないか？」とか、皆いろんな教科の立場からつつくというようなことでやっていくうち、やはり子供たちが変わっていくのが一番楽しかったかなと思いますね。

やっぱり一斉授業、普通の今までのやり方の授業だと子供たちは、例えば数学なら、と

にかく計算解いて、問題解いて、たまに黒板に書いて…ってというような授業から、話し合
いで進めていくってというのが、やはり子供たちにとってはとても楽しくて、だんだん笑顔
になっていく。それを見た教員が、「ああ、こんなに数学で笑顔になるんだ。」って感じ
たり。そこら辺はやっぱりとても大きかったと思うんですね。ですから、「子供のために
やってみようよ！」ってということから、ところが「実は自分のためになってるんだ。」っ
てというような変容が…子供の変容と同時に我々教員の変容を感じ取ることができたのも、
このESDかなって言うふうにあります。

○司会 住野

なるほど。それが子供のためなんだって思うことが大切な気がしますね。いやいや、
「子供のためだったら英単語を覚えさせたほうがいいんじゃないのか？」とか、「計算問
題させたほうが子供のためなんじゃないのか？」って言うのを突破する。そういう、さっ
きナルセ先生おっしゃったような、「どんな子供を育てたいの?」、「どんな力をつけたい
の?」って言う、その辺りがちゃんと共有されていかないとだめなのかな、というよう
なところも感じましたが。

じゃあ、学生目線ではどういう聞き方をしたのか。感想で構いませんので…どんな感じ
でしたか?

○学生A

ESDについて、言葉は聞いたことあったんですけど、実際に中学校とか小学校でど
ういった取り組みをしてるのか、いまいち勉強できていなかったの、実際の現場の先生
方のお話を聞いて、教科と結びつけて、小学校の例でいうと理科と結びつけて、1年を通
して星、月の勉強をしているので、普通というか、一般的な総合的な学習よりは子供たち
がどんどん興味を持って取り組めていけるので、いいなと思いました。

あとは、ESDを学校内で行うと、いろんな先生方がおっしゃっていたんですけど、全
ての教員が連携して学校でそのESDに取り組む組織をつくり上げていかないといけない
ので…多くの先生方というか、みんなで取り組まないといけないなと思います。

○司会 住野

はい、ありがとうございます。どうですか。

○学生B

お話ありがとうございました。すごい失礼かもしれないんですけどE S Dを、何かはやり言葉だから先生たちがやられてるのかなって、ちょっともう、すごい先入観を持っていて、「とりあえずE S Dやっとならばいいでしょ？」みたいな感じなのかなって私は思ってたんですけど、実際にお話を伺って、何か子供の学びが楽しくなってるっていうのを聞いて、そんな思いを込めてやられてるんだなというのが分かって良かったなと思います。

あと1つ疑問だったのが、岡山とかこの辺の地域とかだったら、結構地域のほうがE S Dに熱い、京山地区とかはE S Dに熱いイメージがあるんですけど、どの程度ほかの県ではE S Dが学校以外の部分とつながっているのかなと思いました。

○司会 住野

なるほど。その辺はどうなんですか？地域のE S Dに対する理解度とか。

○柴崎教諭

鋭いですね。実は、東京都のそれも23区は、公立中学校でユネスコスクールとして加盟してるのは4校だったかな…ぐらいなんですね。本当にまだまだで、多摩市っていうのがあるんですが、そこはもう教育委員会がE S Dをやれって。ユネスコスクールもそうなんですが、E S Dをやりなさいってということで教育委員会がおろしてる。ところが、23区はなかなかそういう形で「E S D、何それ？」みたいな人のほうが多いです。まして地域でって言っても、全然それは浸透してないのが現状です。ですから、今回校長会で校長が、「みんなE S Dを知りなさい。」っていうことで、かなり推進するような方向で話をしてもらっているんですが、それでも「うちはそんなことやってられない」、みたいなことが現状です。

○司会 住野

ありがとうございました。

そこで、今、幾つかポイント出てきたんじゃないかなと思います。

1つは、やはり教科を超えてE S Dに取り組むんだっていう仕組みっていうかな、そういう全校の体制づくりや研修の授業の研究の仕組みづくり、そういったものが必要だよな。それを行っていくためには、E S Dカレンダーのようなカリキュラム、教育課程レベ

ルでのつながりってというのが明確になっていないとだめだよなって。

そしてさらに、やっぱり教科を超えて、生徒たちのアクティブな学習をどの教科でもそのプロセスの中にちゃんと位置づけていきましょう、生徒たちがアクティブに思考し、コミュニケーションするような学習活動を教科を超えて位置づけていく必要があるよね。で、その中で子供たちのつながりをつくるし、子供たちの声を生かしていく、そういう子供たちが学びを広げていけるような学習活動が必要だよって、っていうようなところが出てきたんじゃないか。

大切なことは、これを学校でどう広げていくのか、そういうやる気のある何人かの先生たちだけじゃあなくて、広げていきたい。そのためにどうしたらいいんだろうかっていうことを、今日、最後にアイデアを出し合って終わりにしたいなというふうに思うわけです。

つまり、学校には何人かE S Dを推進しなければいけない人とか、推進しようと思ってる人がいるんですよ。でも、その周りには「E S Dって何？」っていう人たちがたくさんいる。ギャップがある。そこを埋めるような教員研修の、校内研修の工夫。どうあるべきなのか。そのアイデアを出したいわけです。

きっとこのお二人も何年かして現場に行ったら、どっちに行くんでしょうね。E S D何組になるのか。あるいは「E S Dってこういうもんですよ。」って推進していく側になるのか。…楽しみですけどね。

そのあたりの研修をどうするかっていうところを議論したいんですけど。まずせっかくですから、六中では研修をやりながら、基本は3つの分科会に分かれてということ。

○柴崎教諭

そうですね、毎年その3つの分科会をどういう力を育てたいかで、まずアンケートをとります。初年度は、文科省が最初に打ち出していた力、ちょっと文言が違うんですよ。そのE S Dの価値観とか体系的な思考力とか、そういう言葉を使っていて、その言葉で分科会を3つに分けてやった。

ただ今回、去年からか、国・県が出している力と態度、そこにちょっと焦点化して、その中で3つの分科会にしようといったときに、やっぱり未来を予測してとか、基幹的とか、そういった多面的、総合的っていうのは、これは思考力じゃないかということ、ここを思考力としてまとめてやろうと。それで、コミュニケーションはコミュニケー

ションで、全ていろいろなところに顔を出すような能力なので、コミュニケーション能力はそのまま行こうと。で、態度っていうのが出てきたので、やっぱりどうやって態度を育てたいのかも、これもESD的にアプローチしたほうがいいということで、3つに分けていうところが昨年度からの流れなんですね。

ただ、そうはいつでも、いきなり入ってきた先生方にそれを言ってもわからないので、まず新入生にESDのオリエンテーションをやります、1年生に必ず。どうして今ESDなのかというオリエンテーションの時間を1時間私のほうでもらうんですね。それで、子供に対して「何でESDなのか」という話をします。「今はいろんな課題があるよね」、…パワーポイント使ったりして…、「その課題を解決しなければならないんだけど、解決していくためにはいろんな学校で学ぶべきことがあるよね」、「力をつけてほしいんだ」、「こういう態度を身につけてほしいんだ」と話をして最初に行く。そうすると、それを聞いている教員が、「ああ、そういうことだったのか…」みたいなものが一つあるかなと思います。そうやって、必ず新入生にはESDのパンフレット、もう少しかみ砕いたパンフレットを配って、「本校ではこういう活動をしてる…環境教育や国際理解教育や…」、「あんたたち3年生になったら避難所運営やるんだよ」というふうな1枚のパンフレットと同時に、「ESD - こんな授業ではこんな力をつけましょうね」というパンフレットが一つあるんですが、それを配って解説して、そして1年生からESDを進めていくんですけど、実は私は先生たちに一。

○司会 住野

生徒と同じように先生たちに、同時に学んでもらおうと。

○柴崎教諭

「1年生、いいですか？私に『はい』って言って。」っていうことで、大体、なかなか1年生に関われなかったりするんで、1年生の総合的な学習の時間とかをもらって、そのオリエンテーションを必ずやって、先生たちに伝える…みたいなところから最初は始めたっていう感じです。毎年それはやってるんですけど。

○司会 住野

4月ぐらいに？

○柴崎教諭

はい。

○司会 住野

もう4月の最初の。

○柴崎教諭

新入生入ってきて、入学式の翌々日ぐらいにそれをやってる。

○司会 住野

なるほど。それは、だから総合的な学習の時間の最初のときっていうような時間の割り振りのにはなる。

○柴崎教諭

そうです、はい。ただ、おもしろいことに、ここ数年は小学校の保護者とか、小学生対象の学校説明会に私と校長で出向いていく。出前授業じゃないですけど、出向いていくんですね。そのときにESDの宣伝をガンとしてきて、結構「“農援隊”に入るために六中来ました」っていうぐらい少しずつ定着してきて、ESDも大分うちの地域は浸透してきたかなど。あと横断幕、ESDっていうのを学校の周りにべたべた張ってるので、少し地域的にも理解してきてこられたのがここ数年かなと思ってます。

○司会 住野

なるほど。例えば、総合的な学習の時間で、「本校はこういうカリキュラムがあって、そこでESD的にこんなことやってます。そこを先生方、学年団で取り組んでくださいね。」…それなら先生たちわかりやすいなと思うんですよね。それを、じゃあ「数学でもESD的にやってください。」、「美術でもESD的にやってください。」って言われると、「えっ、それ何したらええの？」っていう…ちょっとイメージができない先生たちが沢山いるんじゃないかと思うんですよ。そのあたりの教科の先生たちがどう授業をESD的にしていけばいいのか。そのあたりはどんな感じで。

○柴崎教諭

それが、やっぱりESDカレンダーが有効で、それを各教科で、必ず毎年赤入れてもらうんですね。もう既成の、去年まではつくっていたこのESDカレンダーにご自分で今年度赤を入れてください、各学年の教科の先生に、この単位ではここがESDだっていうのを考えてもらって、それを全部生徒に配るんです。

うちでは“あゆみ”っていう冊子を作っていて、全部校則から新聞学習から、さっきの世界のトピックスっていう新聞の感想から、それから行事ごとに作文を書かせる作文用紙から、夏休みの記録から、全部まとめたもの1冊あるんですね。そこにESDカレンダー

もあり、年間行事もありっていうようなことをさせていて、それに書いてもらってるので。各教科でも。ですから、そこで少し意識してもらえるかな？とは思うんですね。

○司会 住野

なるほどね。そのあたり、和田中ではどんな感じの、教員、先生方への共有、その辺はどんなふうな感じでしょうか。

○参加者 まだ教科って言われると、全然できてないという状況だと思いますね。だから、本当に今までやってきている地域学習であるとか、ボランティア活動であるとか、そういうのがとりあえず今E S Dの活動として和田中でやれていること。それをまた、学校運営協議会の委員さんにも分かっていたらいい、学校として取り組んでますよ、という。そういう段階ではあります。

○司会 住野

まずは、そういう総合的な学習の時間とかで、地域学習でとか、そんな、なかなか教科には…？。

○参加者 教科まではまだおりてないですね。

○司会 住野

そういう感じですか。

○参加者 今回授業の中でっていうのがあったので、どんなことかな、どうE S Dとかかわるんだろう？と思って、今日は勉強に来たんです。

○司会 住野

なるほど。そのあたり、どんなイメージを、作戦を立ててるんですか？これから広げるために。

○参加者 やっぱりその辺を、先ほどおっしゃられたんですけども、教科でと言われてしまうと、まだうちの学校もそこまではですが、多分今日この研修会行って、帰ると必ず職員会議でどういうことを学んで、E S Dについて…というのをいろんな先生方に発表する場が必ず課せられてるので、そういうところで少し知っていただく機会があると、あとは今、アクティブラーニング週間、あのi P a dを使ったI C T授業の週間っていうような、そういうようなものも位置づけが何度かあるので。

○司会 住野

ウイークですか。

○参加者 そうですね。そのときにやっぱり保護者の方とかに来ていただいたりだと

か、そういうところで位置づけして、いろんな方にも知ってもらおうというのがいいのかなとは思いましたけど。

○司会 住野

なるほど。今日の学習の、研修の成果を帰ってどんなふうに一？ちょっと植山先生、ヒントを与えてあげてください。

○参加者（植山） ヒントはもう全然。若手に伝えやすかった、わかりやすいつて先生おっしゃったポイントはどんななんですか？ESDは若手に伝えやすかったという。

○柴崎教諭 分かりやすかったというよりも、力がはっきりしていて、その力を伸ばすためにはどんな手法があつてついう、具体的に指し示す言葉があるついうのはすごく分かりやすいつて思つたんですね。これは我々が考えた言葉でも何でもなく、文科省や国・県が考えた言葉ではあるんですけども、その言葉を明確に伝えることができるついうのは、とても研修の中ではやりやすかつたつていう点ですね。

ただ、そうは言つても、批判的な思考力と言つても難しくつて、その言葉についていろんな意見を言い合つてついうことができたのも、とても研修としては充実できたつていうか。なかなか批判的な思考力つて日本人には受け入れられない言葉です。批判的つてついうと否定的なイメージがあつて。でもそうじゃないんだ、と。「吟味して」とか、いろいろな言葉が出てきて、そんな中に、やはり面白かつたのは「ジレンマ学習」ですね。答えのない問いみたいなものをつたつたときに、いろんな批判的な思考力、クリティカルシンキングが育つつてついうのを、本当に授業の中でもう推進してつてやる若手がいるんですけど、もうどんどん、めきめき力をつけているんですね、その若手教員。だから、ついう意味では言葉がしっかりあるつてついうのは、とても伝えやすいつたつてついうふうには思つました。

○司会 住野

なるほどね。目指すべきつきたい力みたいなのが明確なのかな。

○柴崎教諭 みんな悩みながらですけれども、もちろん。明確な答えつてついうのがないから面白いつてついうか。その問いに、授業の中で最初にこの授業はこのことについて解決しようつてついう課題を提示するときに、なかなか問いに対しての答えが明確でない問い…これを見つけるのが非常に苦労してつてつうところなんですね。それを考えるのがとても面白いつてついうか。

○司会 住野

そういう、まさに教材研究していくっていうか、そういう発問なり、学習課題をつくり出すところに、授業づくりの喜びを先生たちが感じていけるようになると楽しくなる。

○柴崎教諭 本当にそうで、それを面倒くさいと思ったらしいわけですから。

○司会 住野

たたき台があって、それぞれの教科、それぞれの学年の先生が出し合うというのがいいんでしょうね。「ESDって何だ？自分の教科で？」って言って出し合って。それを、しかも、子供たちに見せて、「こうだよ」って言ってオープンにして、みんなで取り組むっていうのがすごいですね。

○柴崎教諭 意外と自分の教科じゃない教科を見ることでヒントが得られるっていうのはあるんですね。「あ、この教科でこういうふうにしたけど、私の教科ならこういうふうに使えな。」とか、そういったのが見えるので、やはりいろんな教科で一つのテーマでやるっていうのは、割と有効かなと思いました。

○司会 住野

そうですね。そういう場をつくって、仕組みをつくっていくのは大切。教科を超える授業を見て、学び合えるような。

僕は…でもね、少し気になったのが、「じゃあそういう代替案をつくれるような思考力を育てればESDなんですか？」「コミュニケーション能力を育てれば、それESDなんですか？」「それはよく言う言語活動の充実とか、言葉の力の育成だっていうのと一緒じゃないですか？」って、言われませんかね。

○柴崎教諭 だから、いろんな態度が出てくるんで、やっぱり基礎的なことってやっぱり必要だと思うんですね。基礎的な知識とか、そういったものを身につける、さらに思考力、それからコミュニケーション、言語活動でしょうね。

さらに、ここのESDでは態度、精神的な部分—なかなか言語はなくても、何か首突っ込もうとする、進んで参加しようとする、協力しようとする。そういったつながりを大切にしようとする—その態度が含まれてるからこそ、このESDっていうのはよくできてるなっていうふうに思うんですね。

○司会 住野

だし、そういう態度を育てる教育だったら、いや、私も大切だと思うっていうかな。みんながその気になってくれるような気がしますよね。「黙ってる子供よりも、ちゃんと自分のことが言える子供になってほしいし、何でも自分勝手、自己中な子供よりも、みんなと

つながって一緒にチームで活動できる、そういう子供に育てたいよね。」っていう気持ちは、何かみんなでも共有できるような気がしますね。

○柴崎教諭 そうですね。だから、一時オウム真理教で何かディベートみたいなのがはやって、人を論破するような話し合いではなく、やはり「相手の意見を尊重した上で、自分の意見を伝えることができる、それがE S Dだ」というふうに我々は伝えてるんですけど。つながりを大切にしながら、自分の意見をしっかり伝えることができる。これがやはりただの、普通、いわゆるディベートと違うところかなっていうふうに思ってるんですね。

○司会 住野

なるほどね。じゃあ、そろそろ締め時間になってきたので、最後に一言ずつ、やっぱこういうことを言えば、職場のみんな、E S Dやってくれるんじゃないかなあっていう殺し文句。

○柴崎教諭 殺し文句ですか？

○司会 住野

殺し文句。「E S D、何それ？」っていう人たちに、明日職場でこう言ったら、そういう何それ派もやってみようかって思うんじゃないかなあ、っていう殺し文句を考えてほしいし、是非学生の皆さんは、こういうことを言われたら、私もE S Dやってみようと思う。E S Dやらないと首にするとか言われたらやるんだろうけどね、それは本当に殺しちゃう文句なのでいけません、さあ何と言う？…一言。

○柴崎教諭 保護者向けには、もういちころなのは、学力向上です。

○司会 住野

ああ、なるほどね。

○柴崎教諭 これはいちころです。

○司会 住野

殺し文句ですね。保護者には。E S Dやるのが学力を上げることになる。

○柴崎教諭 もう、要するに、本校の例で言えば、都立が集団討論を入れたんですね、推薦試験に。これ、うち強いんですよ。

○司会 住野

受験に強い子が育つ、都立がね。

○柴崎教諭 それで、都立では日比谷高校っていうのが一番ありますが、日比谷高校へ

推薦で4人ぐらい受かっちゃうんです。100人ぐらいしかいないんですけど。これは売りなんです。

○司会 住野

分かりやすいっていえば分かりやすい。分かりやすい。なるほど。

じゃあ、それを超える一言を、中島先生、ちょっと一言。

○中島 学力向上も含めて、子供が変わるよ、でしょうね。

○司会 住野

なるほどね、子供が変わるよ、ですか。植山先生はいかがですか。

○植山 そうですね。何か楽しいことができそうじゃないかな？っていうのが。先生、「楽しかった」って言われたんですけど、「何か楽しいことができそうですよ」って。

○司会 住野

「楽しいことができそうですよ。」

○植山 良いです、言ってみたいです。

○司会 住野

なるほど。どうですか？

○参加者 同僚とか、教員の先生方を動かすときにどうなのかってちょっと考えてたんですけど、どうだろうな…何か、でも、「ESDってもしかして知らないの？」みたいな感じで、僕は言うかもしれないですね。

○司会 住野

「えっ、まだ知らないの。」

○参加者 「知らないの？じゃあ一緒にやってみない？」

○司会 住野

なるほど。まだ知らないの、じゃあやってみる、なるほど。じゃあどうですか。

○参加者 そうですね、少子・高齢化が進むところで、国のあれでいったら、もしかしたら中学校がなくなるかもしれないぞ、と。将来的にはですね、そういうような立場にある学校でもありますし、ただ小・中連携は進んでますし、コミュニティ・スクールも進んでいますので、山口県は小・中100%ですから、ここら辺も含めて、「地域と連携しながら持続可能な和田をつくっていきましょう」ということを旗立てて、先生方と一緒にやっていきたいなというふうに思います。

○司会 住野

なるほど。裏返せば、E S Dやらないと本校なくなっちゃうかもよ。

○参加者 …目玉にして。

○司会 住野

これでやりましょうと。

○参加者 …町からも人を呼びましょうと。

○司会 住野

そういうことですね。

○参加者 …地域の子供だけじゃなくて。

○司会 住野

じゃあ、学生目線でどうですか。何て言われたら頑張れる。

○学生 「教師としてどうなんだ？」って言われたら。

○司会 住野

「E S D取り組まないっていうのは教師としてどうなんだ？」。

○学生 岡山大学ではもうE S Dをほぼ習います。大学で学ぶ機会があって、それでも尚「何それ？」っていう態度をとるのは何かそもそも受け入れる姿勢がないし、「その姿勢は教師としてどうなの？」って言われたら、ああ、ちょっとどうにかなるかもしれませんね。

○司会 住野

教師としてどうなんだと。どうですか。

○参加者 そうですね、「これからの時代はE S D。」

○司会 住野

教えてあげないとといかんと。50代のE S Dっていう言葉を知らずに50年生きてきた人たちに、「これからの時代はE S Dなんだよね」って、もう教えてあげなきゃいけないんじゃないかと。

○司会 住野

僕は何て言うかなと思うんですけど、「先生がやってるのがE S Dじゃん。」…普通過ぎました。

○参加者 私らも、でも言っとったよな。

○参加者 「それこそE S Dよね、それってE S Dじゃん。」って言って言っとくか。

○参加者 それはよく言いましょう。

○参加者 そうか。

○司会 住野

よくある、よくある回答ですよ。

じゃあ是非、そういう意味では教科の授業の中でE S Dって、E S Dのイメージが本当もう総合的な学習の時間とか、そういう何か特別な領域、特別な学習活動、単元でっていうイメージがあると、どうしてもなかなか教科の中に入っていかないんだけど、教科の授業では教え込み、E S Dって言った途端、自分たちで考えてやっごらんではあかんやろうと。やっぱりコミュニケーションする力、自分で考える力、チームで考えて行動できる力って、全ての教育活動を通じてやらなければいけないので、やっぱり両輪なんですよ。教科でも、そういう特別な領域でも、両輪でできるようにしていく必要があるよねっていう共通理解をつくり出す校内研修の工夫、していきたいけど。どちらから入るのか、学校によってそれぞれ事情があるし、総合のほう、地域との連携のほうがやりやすい学校もあれば、それは難しいから、まずは教科の中でやろうかのほうがやりやすい学校があるかもしれない。そのあたりは、そういうリーダーになる人が学校の様子を分析しながらということでしょうね。では、これにて、最後に言い残したことはありませんね。

○参加者 はい。

○司会 住野

では、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

3. 福島県立ふたば未来学園高等学校 對馬 俊晴 教諭

『復興教育からのESD～新教育プログラムへの挑戦』

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科ESD協働推進室）

それでは、おそろいようですので、分科会を始めさせていただきたいと思います。

私は、岡山大学大学院教育学研究科ESD協働推進室の柴川弘子と申します。コーディネーターをしております。今日は、こちらのファシリテーターを務めさせていただきます。なれない司会ですが、よろしくお願いします。

早速ですが、對馬先生から実践をご報告いただきたいと思います。

その際に、先生のご報告を聞きながら、ESDの授業実践に向けて、これがポイントだなどと思うこと、ここが重要だ、こういうことを大切にできるなというようなことを、お配りしているプログラムの裏にでもメモをしていただきまして、そのメモをもとに、後でグループワークに活用していきたいと思っております。是非、先生のお話聞きながらも、ポイントを書きとめていただければと思います。よろしくお願いします。

それでは、先生お願いします。

○對馬俊晴（福島県立ふたば未来学園高等学校）

改めまして、こんにちは。

福島県立ふたば未来学園高等学校から参りました對馬と申します。どうぞよろしくお願いします。

では、始めさせていただきます。

私は、先ほど川田先生からもご紹介を頂戴しましたが、前任が、この間の3月まで福島県二本松市の安達高校に6年ほど勤務しておりました。その6年ほどの勤務の間に起きたのが2011年3月11日の東日本大震災です。その福島県がいろいろな形で大変な状態になったところを、教育を通じてどう乗り越えていこうかというときに、ESDの力を借りたというような形になります。そこでの実践を前半でご報告申し上げまして、後半は、ハワイアンズというフラガールなんかで映画になったりした、いわき市のちょっと北のほうにある広野町に新しく出来た、ふたば未来学園高校での実践についてご報告を申し上げます。ちなみに、原発事故はこのあたりで起きています。

そして、最後に、「解のない事象への挑戦としてのESD」としまして、そもそも答え

が見つからないというか、試行錯誤の状態の現任校での教育活動についてお話を申し上げまして、問題提起のような形で、先生方にいろいろアドバイスをいただければと思います。また、後ほどのディスカッションのところでもいろいろ議論いただければありがたいなと思います。

それでは、安達高校での実践です。

当時おりました安達高校での進学実績は、国公立大学に7%ぐらい、私立大学に40%ぐらい、あとは専門学校へ進学したり、就職したりする生徒がいるような学校です。砕けた表現を申し上げますと、福島県内でも中間的な学校という形で、もっと砕けた言い方をしますと、ばりばり進学するわけでもないし、手がかかる生徒もいないので、非常に穏やかな学校で、平和に過ごしているような学校でした。

ですが、少子化に伴いまして、先ほどの地図で申し上げますと、ばりばり進学していきたい中学生、偏差値が高い生徒たちは、福島にある進学校や郡山にある進学校のほうに流れます。そして、地元の学校にいたいという生徒が安達高校を目指してくる形になるのですが、少子化に伴って、普通高校としての存在意義が非常に難しい問題になっています。岡山県でも、10年ほど前に統廃合が進んだとお聞きしましたが、福島県では統廃合はなかなか進みません。県内に88校の県立高校があり、私立合わせて100校ぐらいあるのですけれども、町や村から高校がなくなると、その町、村が相当衰退するというようなこともあって、学校を廃校にすることがなかなかできない県ではあります。お隣の栃木県は統廃合が結構進んでいるとお聞きしています。

そういう中で、福島県の安達高校では、普通高校として維持するためには特徴が必要だということになります。そして、5クラスに今年から減っていくというような状況です。それが前提の話になりまして、3・11が起きた2011年なのですが、4月半ばに入学式が10日ぐらい遅れて始まったのですが、この安達高校は原発事故があったところから60～70km離れているのですが、放射性物質が県内に強く、このラインで強く降り注いできたところがありまして、学校が再開されましたが、非常にいろんな意味で混乱していました。

それで、生徒たちも、地域も、親も、いろいろと悩みを抱えていた時期なのですが、学校が再開されて、大阪でのESDの国際ワークショップに招待されまして、生徒2人、この女子生徒2人が参加することになりました。この当時は県外とのやりとりも私もちよっと薄かったですけども、福島っていうのは悪いイメージで見られているので、生徒を他

県に連れて行って、交流させるのに教師としてもためらいまして、いろいろ傷つけることになるのではないかなと思って、そのケアをどうしようかなってというふうに覚悟しながら行ったのを覚えています。

ところが、E S Dで集まってくる子供たちのグループですので、非常にもう心配してくださっていて、本当にいろんな声をかけていただいて、子供たちが結果的に励まされて帰ってきました。その励まされて帰ってきたというのは、いろんな話しをして、交流をすることで子供たちの意識が随分変わったということになります。それから、もうちょっと細かく申し上げますと、県内で過ごしている、放射線に気をつけながら生活している私たちにとっての福島の解釈と、県外の方々の解釈は大きくやっばり違うなというのが実感です。本当にもうどうしようもないことなのですけれども、本当に一生懸命心配してくださっているのですが、話をしてみて初めて、その違いが明らかになって、いいところも、悪いところも含めて、話をして交流していかないと解決しないということを感じて帰ってきました。

結果的に、皆さん本当に親切だっということがわかったのですけれども、それで子供たちは励まされたし、それで交流をすることによって、相手にも誤解が解けていくようなところがあって、自信をつけて子供たちは帰ってきました。先ほどのカンボジアの中学生と交流している部分なんかは、子供たちにとってはすごく影響がやっばりあって、このときは韓国と中国ですが、関係も悪くなってきた時期だったと思いますが、交流することによって世界の見方も変わってきます。

あの女子生徒2人は大きく変わりました、普通におとなしい子供たちだったんですが、その後、勉強を一生懸命しなくては交流ができないとか、あるいはディスカッションができないというようなことに気づいたようで、その後いろんな挑戦をしていくことになりました。一人の女の子はカタールに行きまして、もう一人の女の子はアメリカのフルブライトの関係の研修でアメリカに行ってきたりしまして、それぞれ卒業して、一人は福島大学、もう一人は専修大学の特待生として進学していきました。

そのことから、その2人の様子を見ていて、私なりに分析すると、現状をしっかりと分析する必要があります。議論というか思考の前提となる基礎知識をきちんとつけて、そこからじゃないと話が深まらない。福島県をよくしたいっていう思いだけでは、議論が深まらずに、やっばり正しい知識を得て、課題を見つけて、その課題に対して解決するための将来像を描く。そして、その将来像を描くのに当たって、ギャップとなっている問題、課題に

対して、それを解決する努力をする、行動に移させるということが重要だなということに気づかされました。午前中の高校生の集まりで大野先生がおっしゃっていたようなことに通じるような感じがします。

それで、試行錯誤していた震災の年の1年間ですが、ふと気づくと、文部科学省では、大震災後、困難を生き抜く力や絆づくりの復興教育を柱とした教育プログラムを考えるようになっていました。特に、宮城県と岩手県です。宮城県や岩手県では、その震災をばねにして、力強く生きていくという主に防災教育のようですが、そのような方向性でプログラムが組まれていました。

ところが、福島県は原発事故と一言に言っても、いろんな複雑なものが絡み合っていて、放射性物質の流れはこういう流れですが、物理的な制限もあります。健康面での心配もたくさんありました。今でもあると言えばあるのですが、人の意識にはすごく差があります。私は物理の教員ですが、地図に色をつけるとすごく怖い感じなのですが、今住んでいる広野町だとか、私が住んでいるこの福島市のちょっと北の辺では、数字とかをいろいろ評価すると、このぐらいの線量であれば生活できるなという認識です。でも、お母さん方だとか、小さい子供を抱えている地域の方は、そう単純には思われなくて、福島県内でも意見は割れます。意見が割れるので、余りお互いに触れていませんが、ちょっとしたことでそれが噴き出してしまって、いろんな議論の対象になります。

ちょっと、私ごとですけども、この当時は幼稚園の子供が2人いて、ほかに小学校3年生だった娘がおり、今中学生になっていますが、妻の実家は埼玉だったのですが、埼玉の妻の実家からは引っ越してこいと言われました。仕事はどうするのかって言ったら、東京都の試験を受け直せと言われました。私も結構悩みましたが、引っ越しのリスク、それから転校先でいじめられたりするようなリスクだとか、そういったことを総合的に評価して、このぐらいの線量だったら、気をつけながら生活すれば大丈夫だということで、家族一緒に力を合わせて生きていくことを決断しました。県内では今でも8～10万人近くの人々がまだ県外にいます。岡山県でも大分お世話になっているという話を聞いております。そのような問題があって、安全と安心は違うという。安全は確保できても、安心は確保できないのが現状になります。

こういったところで、当時3・11の1年目では、福島に過ごしている子供たち、私の目の前にいる生徒たちが、福島の高校を卒業したから、デメリットの大きい教育を受けてしまったという意識を持たせるわけにはいかないと思うようになりまして、福島で育っ

たからこそ、寧ろいろんな現実を目を向けて、力強く生き抜いていく力や、困難な状況を変化させる力を育成できるのではないかと考えを変えるようになります。それは先ほどの女子生徒たちの行動が何か非常に自信になっていまして、何か教育を変えなくては行けないというふうに考えました。

そして、3・11の年の翌年に、すぐに担任にさせてもらいました。それまで、この学校の前任校でスーパーサイエンスハイスクールの担当をしていた関係で、7年間担任を持ってなかったのですが、担任をやって生徒に対峙しないと、どんな理念も子供たちに伝わらないということを何か実感していて、卒業式のたびに寂しく思っていたので、やっぱり担任になりたい、そして、何か復興教育を進めていきたいと考えまして、担任になりました。

そのときに、担任になった240人の生徒にアンケートをとりました。集計が2クラス分しかしてなかったのですが、放射線について学習したかどうかとか、理解できたかというのは、中学校時代にやっぱりそれぞれ難し過ぎてわからないということなので、それで震災2年目、担任になった1年目ということになるのですが、1年生の生徒たちを集めて、放射性物質、放射能という言葉が難しいので、それらを理解させるような教育、放射線教育をやりました。

校庭は、3・11の夏休みに除染という形で、大規模な表土を剥いで新しい土に入れかえたり、校舎の屋上を除染したりするという形なのですが、土などを洗い流して、洗い流したものを集めて、保管場所に持っていくというようなことをしました。今、こんなことやったって、大して変わらないです。大した意味がない。実質意味がない結果なのですが、当時は無我夢中で、少しでも生徒の安全を確保したいということで、男性教員がボランティアでこういった除染をしました。この人が当時の校長で、今県の教育次長になっています。そういったような形で、みんなで力を合わせてやったってということを、これはプールの除染ですが、生徒に示して、いろいろ心配事はたくさんあるけれども、力を合わせて、みんなでこの状況を乗り越えていこうという話をしているひとコマです。

放射線は、この当時、除染する前は校庭ではこういう数字です。単位はこれマイクロシーベルト毎時なのですが、2.5とか3で、4とか5とかあった数字が、除染後にはこのように小さくなったということも生徒と共有をしました。でも少しはあるじゃないかっていうのが大方の見方だと思うのですけれども、こういう数字の解釈は、小さな数字が2倍になったり5倍になっても、やっぱり小さい数字という意味合いになります。砂糖を0.

0.1グラムなめても甘くないのを5倍にしても、やっぱり甘くないみたいな、そういうふうな解釈になるような展開です。この辺の話をする、いろんな議論になるのですが、リスクを相対的に評価するということを生徒と共有します。例えば、たばこ1本で40マイクロシーベルトぐらいです。現在は校庭に1時間ただけで被曝するのは0.2とか0.3の数字です。たばこ1本吸うと40なので、たばこを吸っている人は福島県の放射線気にする必要はないです。たばこ1日10本も吸ったら、福島県で半年ぐらいの線量になります。飛行機1回乗ると20日分ぐらいの被曝になるのと同じような感じですよ。

ちょっとスライドが前後していますが、こういった放射線教育をしていたときに、ESDに着目しました。ESDそのものは、もう十数年前から私も存じ上げていたんです。東北では、宮城教育大学がESDを推進していて、現在の学長の見上一幸先生が大きく進めていたのが14年ぐらい前です。当時、全国にユネスコスクールは24校って聞いていましたが、そこから、今先ほどの939だったかという数字に現在なっているということになります。震災前からも聞いていたのですが、ふと何かのやりとりでESDのことを思い出しました。当時、福島県には一校もユネスコスクールがありませんでした。震災を乗り越えるためにも復興教育が必要だ。でも、復興教育、復興教育といっても、ただ思いをはせただけではだめで、何かやっぱり勉強の理念がないとだめだ。その理念が、やっぱり国連で示している理念が共通に当てはなるというか、そういうしっかりした理念のもとで教育活動をしていくということが、教師の指針にもなるし、生徒にも適当な感じのプログラムではなくて、しっかりしたプログラムになり得ると考えて、ユネスコスクールに申請させていただき運びになりました。

これは2月16日となっていますが、復興教育を始めた夏から3カ月ぐらいで申請にこぎつけることになりまして、県内初のユネスコスクールになりました。現時点では、福島県では、小学校、中学校含めて10校近くユネスコスクールが増えている形になります。

そして、その中で子供たちと乗り越えようという授業の一つの教材は、ユネスコスクールを意識すると、あっちこっちに眠ってしまっていて、先ほどの岡山県の生徒さんたちの活動も今後の私の教育活動にすごく参考になったなというのは、矢掛高校とか、いろいろな学校の話がすごくモデルになるなと思って、今後もいろいろ研究させていただきたいと思えます。

「バルト海プロジェクト」というのがユネスコスクールの大型プロジェクトでも有名ですが、このバルト海はいっぱい汚い水を流して、バルト海は世界一汚いと言われたそうで

すけれども、高校生がネットワークを組んで、水質を検査したりして、自分たちが将来生きていくこの土地がこんなに汚い、もう海が汚いというのはだめだ、許せない、何とかしなくちゃいけないということで、高校生が政府に提言したという話を聞いています。そうしたら、政府はすぐに動いて、水はきれいになっていったと聞いていますが、ここで言えるのは、大人が幾ら会議で議論しても、ほとんど変わらないというか、うまくいかないものが、高校生が自分たちの意見を政府に言ったり、大人たちに言うことによって、あっという間に世の中が変わるのだということは、福島県にとっても非常に重要だなという教材として使わせていただきました。大人たちが除染だ、原発がどうのこうのとか、東京電力がという議論を幾らしても、福島県の混沌さは変わらないのですが、高校生や中学生が自分たちの環境をよくするために動く行動は、すぐ大人の人たちを動かすことにつながっているようなところがあります。だから、自分たちできちんと線量をはかったり、あるいは自分たちで福島の将来をどうしたいかっていうのを議論して、それを発言したり、発表したり、交流したりすることで、世の中は変わっていく。大人は変えられないけども、子供たちが変えるんだ、子供たちが将来を生きていくのだから、子供たちの未来は自分たちで築いていくんだという論法だったりして、子供たちとそういう授業というか、考えることをやっていったのがこの復興教育の、ユネスコスクールの活動ということになります。

それで、担任をやっているも気づくことがあるのですが、子供たちはやっぱり傷ついています。福島県の土地が放射性物質で汚されてしまったっていうことに関わらず、それに加えて、イメージがすごくダウンしてしまったっていうことや、自分たちがもしかしたら将来結婚できないんじゃないかと思う女の子たちもいたりして、いろんな意味で傷つきました。でも、もっと傷ついていたのは保護者の方です。最も、最も重要な存在は子供なのに、その子供を心配がたくさんある福島の学校に通わせなくちゃいけないという親の気持ちはかなり何かかわいそうな部分があって、私も親なので、共通する部分があって、話を聞いていると、本当に切ない感じの方がいっぱいいました。地域もそれではっかりしていました。ところが子供が前向きな勉強や未来を新しくつくっていかこうとする活動をみることで、地域の人が元気になっていく、親も励まされるということを目にするようになりました。すなわち大人を元気にするのは子供の力だなと思います。子供が大人を元気にして、その大人が元気になる。頑張らなくちゃいけないなっていうふうに思うと、復興も早まっていくということになります。

でも、そこでさらにちょっと気づいたのが、子供を元気にさせるのは教師の役割だ、教育が非常に重要だということに改めて気づかされました。ユネスコスクールの先生方との交流もあって、こういう教育活動をしていて気づくのが、大変なのは福島県だけじゃないってことです。4大公害病を乗り越えていっている土地もあるし、広島だって原爆が落とされた。長崎だって、沖縄だって大変です。そういうところをみんなそれぞれ乗り越



えようとしているところがあって、福島だけが何か大変なんじゃないんだってということとか、そういうことを、やっぱり子供たちと共有して困難を乗り越えていかなくちゃいけない。そこで、やっぱり教育が非常に重要、

教師が重要だと自分の中では考えるようにしてしまっていて、本当に教師の仕事は無限につながっていく、無限にやることが出てくるなっていうふうな形です。

実は、最近ちょっと疲れていたのですが、岡山県に来たら、ちょっと元気になりました。すごく元気になりました。岡山の先生方とお話しさせていただいて、何で仕事に追われて、何で悶々とした日々なのだろうなあって、ここ半年ぐらい思っていたのですけども、新しい学校に行って勉強をしないといけないな、それから交流したり、いっぱい情報交換しないとだめだなっていうことに、久々にこのような交流をさせていただいて思いました。

あともうちょっと申し上げます。福島県の県全体の目標なのですが、2040年に100%自然エネルギーで賄うという方針を出しました。震災後、直後です。水力発電を含めた再生可能エネルギーを含めた自然エネルギーで100%です。当時2009年にこのぐらいの電力だったものを、再生可能エネルギーを伸ばしていくことで、2040年に100%にして、火力発電とかを使わないようなエネルギー源を確保するということです。そんなことちょっとできないのじゃないかと思うのですが、福島県だから世界に、こういった100%を訴えることはできるかなと思います。フクシマというのは世界共通語になってしまいました。悪い意味で使われている言葉ですが、それを何か前向きな発信をす

ることで、随分とやっぱり違ってくるので、福島県が100%を唱えるっていうのは重要なことだということ、これも教育に使えると考えて、こういったことを取り込みました。

あと、このような素材も使いました。先ほど、大変なのは福島県だけじゃないって言ったのですが、これは岩手県の陸前高田で、ちょっと全国のニュースにもなった有名な体育館の落書きです。お母さんへ、いつも本当にありがとう、いつも夢に出てきてうれしいよっていうものです。お母さんが多分亡くなったのだと思うのですが、そういったことを乗り越えようとしている人たちがいて、この気持ちを考えると、やっぱりいろんな意味で頑張っていかなきゃいけないなと思いました。こういったものも生徒たちと共有したりして、福島の現状を変えようと考えました。

だんだん中身を検討していったときに、生徒に自分たちのことを、自分たちの考えを整理して人前で発表するという情報の時間を利用して、復興教育、ESDを進めました。それで、復興教育を始めた1年生の終わりに、1学年全体で将来を持続させるためには、エネルギー関連だったり、放射線の関係だったり、病院の介護の関係だったり、生徒に自由にテーマを選ばせて、世の中を持続させるためにはどういった課題があって、その課題を乗り越えていくためには自分たちはどうするかという発表をやりました。

こういった活動が本校のユネスコスクールの活動の基本になりまして、その後、私の学年が2年生になったときに、新しい1学年、1個下の学年の先生方も何か興味を示してくださって、ESDって何だかわからないっていう学校の職員60人ぐらいいるのですが、何か勝手にあの学年はやっているってなっていました。次の学年の先生方も追随してくださって、そしてJICAの職員を呼んだ国際理解教育に次の学年はシフトして、放射線の教育と国際理解に行っています。

あと、これは部活の単位ではあったのですが、OECDが主催した、東北地区の高校生をパリでイベントをさせることによって、今後の新しい教育方法を模索するようなパイロット的なプロジェクトだったのですが、これに本校生徒も参加しました。2年半かけていろんな課題に取り組みさせてパリでイベントを開くことだったんですが、目的は教育システムを新しい教育をする、今しきりに言われているアクティブラーニングのはしりのようなパイロット的な取り組みです。ここに安達高校の生徒も7人参加しまして、パリのエッフェル塔の下のシャン・ド・マルス公園で、英語で発表したりして、帰ってきて、自信をつけました。この子たちは今もう大学1年生になっていますが、それぞれ進学を決めて、頑

張っています。

そして、安達高校でのE S D、ユネスコスクールの取り組みはその後、次の学年にもつながりまして、学校全体としてやると学校長もかじを切りました。最初は学年単位でほかの学年に迷惑をかけないようにするから、自分たちでやるからユネスコスクールにさせてくださいと職員会議でプレゼンテーションをして、ユネスコスクールに申請させていただきました。最初は、学年6人だけでやっていたのですが、次の学年、その次の学年で18人というか、18クラスやるようになって、学校全体の取り組みで、完成したのが昨年度になります。そして、全校生徒規模になったので、先ほど1年生だけで発表会やったものが全校生徒での発表という形になりました。そして、このユネスコスクールに学校全体で取り組むようになりました。私が今の学校に転勤してきたのですが、転勤した後、さらに発展していると聞きまして、担当していた私としては寂しい感じはするのですが、いなくても成り立つのです。私がいないとだめかなって思ったのですが、余り関係なかったです。いないほうがかえって発展しているということで、うれしいというか、悲しいというか、うれしい状況になっています。

昨年、岡山県の先生方に大変お世話になりました。世界大会、高校生フォーラムです。東北地区の代表で安達高校が参加させていただいて、事前の交流では4つの国の高校生と交流することができました。安達高校のその取り組み自体は、東日本大震災の年、それから右往左往した、あの2人の生徒がE S Dの大会に参加したというのは、この年のこの部分です。そこから復興教育1年目がスタートして、放射線教育をしました。その後、2年目に発展を見せて、国際フォーラムに参加させていただいたりして、そして3年目に、世界大会の事前準備会議、世界大会に参加して、それからOECDのパリでの発表を経験して、それからバングラデシュやチリの高中生と交流したりしたというのがこちらの状況です。

平成25年度にE S D大賞を頂戴しましたが、小学校の先生の取り組みや中学校の先生の取り組みがこの別な会場で行われていますが、あちらのE S D大賞って本当にすごいです。安達高校のE S D大賞はたまたまいただいたのですが、東北の応援という意味もあるでしょうし、ちょっと作文を一生懸命書き過ぎたようなところもあって、E S D大賞になってしまいました。多分、E S D大賞とかをもらうのは大事な部分はあるかもしれないのですけれど、そんなこと関係なくやっている学校がたくさんあって、たまたま書いてない学校がたくさんある中に、ひょこっと書いちゃったっていうような意味合いでの大賞だ

ったかなあなどとも思います。

この部分をまとめたいと思います。

フクシマから福島へということなのですが、困難の克服への努力によって、今後も耐えられるような力を育みたい。困難は福島県だけではないと言いましたが、個人個人もそう、放射性物質だけが大変なわけじゃなくて、失恋しても大変ですし、就職がうまくいかないときも大変ですし、交通事故に遭うかもしれないし、いろんな大変なところがあって、そういったものをやっぱり一つ一つ乗り越えていかなくちやいけない。そういったところに福島の教育が使えるかなと思ったりしました。高校生の努力は、保護者や教員を勇気づけます。それから、福島のメッセージ性は非常に高く、福島は危険だとか悲惨だつていう意味で、世界共通語です。でも、30年、40年後には福島つていう言葉の意味が困難を乗り越えるつていう意味や、立ち直つて頑張るとつていう意味で使われてほしいなと思っています。私が教員でいる間は無理かもしれないですが、今の高校生が私ぐらいの年齢になったときには、福島という言葉が前向きな気持ちの言葉で使われていれればいいなと思つて、学校教育活動しています。これからも戦争やテロは世界どこでも起こり得ますし、もしかしたら、これからまた大震災のようなものが起こるかもしれません。そのときに、福島しようぜと、福島になろうという合い言葉になれるような県にしたいなと思つて、今頑張っているようなところでは。

ちょっと今現在のところの話をつけ加えさせていただきます。

今現在は、ふたば未来学園高校に転勤しました。テレビで報道されたりしていますが、いろんな芸能人の方や小泉進次郎さんとか、いろんな方が力を貸してくれている学校です。応援団という方がいろいろいらっしやいまして、今現在直接お世話になっているのが平田オリザ先生や宮田東京芸大の学長先生や橋本五郎さん、林修さん、小泉進次郎さん、伊藤穰一さんは少しですね、箭内道彦さんなどが授業してくださったりしました。

放射性物質がいろいろ飛び散つて、この双葉地区の8町村というところの中学生や小学生が原発事故当時いろんなところに避難して、いろいろいじめられたり、学校に来られなくなってしまつたりという子供たちがいます。125人の生徒が校舎にいますが、そのうちの30人ぐらいは不登校です。不登校の生徒たちが今こうつて形で学校に来ているのですが、もう一度勉強をやり直したいみたいと何か頑張っているようなところがありまして、今不登校になつて、学校に来なくなった生徒が3人ぐらいいますが、30人のいろんな生徒たちの数からすると、頑張っている生徒が多いなということになつてい

ます。なかにはこういった教育活動に呼応して頑張りたいなっていう成績がいい生徒もいます。東大にちょっと届くかどうかという生徒もいるなど、いろいろな生徒が混在していて、悩みは尽きません。

3年間をかけて、海外に生徒を連れていくなど、いろんな教育をしていこうという形ですが、現在は、この段階です。それぞれのプロの方に、生徒にいろんな学びをしてもらっていて、そして間もなく11月3日に発表会をします。1年生しかまだいないので、明後日の11月3日文化祭でやります。

これは、その一端です。平田オリザ先生という演劇家の方なのですが、大阪大学の先生でもあるのですが、前期から今現在もお世話になっている一端を申し上げます。演劇を生徒にさせるのですが、解のないというか、答えの見つからない内容を題材にします。それで、例えば、実際はこれ子供たちの中でいいなと思われたものが、東京電力の社員と地元の人の葛藤みたいなのは演劇でちょっと目立つところがあるのですが、オリザ先生の言葉をかりると、こんな例を使っていました。糖尿病で入院しているおじいちゃんがいる、お母さんシングルマザーで、お母さんは働きに行っているから、ほとんどおじいちゃんに小さな孫が育てられている。ところが、おじいちゃんは糖尿病で入院してしまった。入院してしまったのに、小さな子供は一生懸命お菓子をつくって、おじいちゃんのところに持っていくと食べさせるべきか、どうすべきなのかということを経験するような演劇です。答えがあるようでないような、そのような葛藤を子供たちが演じます。20グループに分かれて、地域の素材を探してきて、みんな、全員で頑張っているのに、うまくいかないっていう題材を演劇にするような形です。そういう自分たちの体でいろいろ課題を見つけ、それを表現するという教育活動です。これはオリザ先生の話だと、外国では演劇は書道や音楽や美術と同じような扱いで、演劇をやっているようで学びが深いという。私も確かに実感しました。今は、そのような演劇を取り入れようとしている学校は日本にもあちこちに出てきているようで、灘高校も意識しているそうですし、筑波大学附属駒場も演劇を取り入れるということで、演劇を導入する教育活動が盛んに出てきそうな感じです。

その演劇は、アクティブラーニングにつながるようなところがあります。今各教科でアクティブラーニングが問われていますが、最初から教科でアクティブラーニングをなかなか進めづらいです。私なんか悩んでいます。理科教育の中でどうするのかということがありますが、こういう総合的な学習の時間のような時間を使っています。総合的な学習の時間での、こういう活動から教科のアクティブラーニングに使えるところが結構あるな

と思いますので、総合的な学習の時間で、いかに教科が関われるかっていうようなことも含めてやっていくといいかなと思っています。

E S Dはあちこちに題材が眠っているので、E S Dを使ったアクティブラーニングみたいなようなものが柱としてあって、それで教科に使っていくといいのではないかなって、おぼろげながら思っているところがあります。教員研修会も実施して、どういう子供を育てたいかって議論したりすることを3～4回開校してからやっているのですが、先生方と全員で、卒業するときにはこういう力をつけたいねみたいな、課題解決能力だとか発進力だとか想像力だとか、こういうのをつけたいねみたいなことを、4月の段階で話し合いました。

うちの学校の特徴は、何か共感性だとか協調性だとか、温かみを持たせたいみたいなことを考える教員が多くて、人の何か傷ついているのをケアするというか、人の心を大切にしたいみたいなどころにちょっと特徴があります。その指針になっているのがO E C Dの4つの技能のようなのですが、知識と技能と人格と、自分をみつめ直すというメタ認知がキーワードになっていまして、そういったことを意識してルーブリックの設定をしました。お手元の資料に、ちょっと雑なのですが、ルーブリック、段階評価を載せています。企業ではK P Iなんて言っているようですが、それを10項目、A、B、C、Dにまとめています。本校ではこのようなところに着目して、生徒の力を伸ばしたいということで、3年間をかけてやっていくような表になっています。寛容さ、能動的市民性がちょっと特徴的かなと思いますが、これは学校に応じてそれぞれなのかなと思います。

アンケートをその5項目で、平易な言葉にして、生徒にとったりしました。まだ、今やり始めたばかりです。

解のない事象への挑戦ということで、安達高校もそうですし、今のふたば未来もそうなのですが、内的動機づけによる勉強を一生懸命やるのに、E S Dや復興教育なんかがやっぱり使えます。何のために勉強しているのかにE S Dがいろいろな影響を持っているなと思います。テストで評価しにくい力を育成したい、生き抜く力です。ふるさと、自分の地元、自分の学校を大切にできない人が世界なんか大切になんかできませんので、地元を大切に、解のない事象への挑戦する、総合的に判断して答えなんかないことが大人の世界いっぱいありますので、最適化へ導く力をつけたいと思っています。そのためには、異文化交流が大事です。2年目の交流も、今日の集まりのように、チームで問題を解決していくことがすごく大事だになっていう感じです。1人で問題なんか解決できない部分がたくさ

んあって、初めて知り合ったチームで、どうお互いの個性を生かしながら、チーム力で勝っていくか、いいものをつくっていくかっていうのが大事かなと思われま

す。原発事故のときに、日本はすごい科学者を、研究者をいっぱい有しているのに、あの原発事故をとめられなかった。その後も、どんどんどんどん悪化させてしまいました。こんな日本が誇るいろんな技術者がいるのに、アメリカからロボットを入れたり、フランスから除染の装置を入れたりしていますけども、それはチームワーク力が乏しかった、あるいはリーダー力がなかったのかもしれませんが。そういったことを今後我々は子供たちにつけていかなくちやいけないなということがわかりました。具体的な目標は、入試がありますので、小論文や面接ですが、自分たちの言葉で表現することによって、将来こうなりたいということ自分たちの言葉で表現して、入試をクリアして行ってほしいなと思っています。そして、将来、大学入試がゴールじゃなくて、通過点だという形で頑張してほしいです。最終的には、愛する人を守っていく力ということかなと思います。どうやったら守れるのか。結局は勉強しないとだめだよと、行動しないとだめだよということにつながるかなと思います。

雑駁な話でしたが、以上で終わらせていただければと思います。ありがとうございました。（拍手）

○司会 柴川

對馬先生ありがとうございました。

では、これから今お聞きいただいた中で、これがポイントだと思うようなことを出し合ったり、それを深めたりしながらワークに入っていきたいと思いますので、その中で對馬先生にもこのあたりを回っていただきながら、チャンスがあれば、先生方一人一人とお話しするような形で進めさせていただきたいと思います。

ディスカッション・ワークショップ 「ESDの日常授業における実践に向けて」

○司会 柴川

それではこれからディスカッションとワークを始めたいと思うんですが、大体4つのグループに分けたいと思います。机がちょっと狭いですが、5～6人で1グループになると思うんですが、机3つ分ぐらいで1つになっていただいで、やっていただきたいと思っています。机はお話ししやすいようにしていただければと思います。机を2つを合わせて

下さい。

大き目のポストイットを配っていますので、余り時間がないので、先ほどのお話を聞いて、對馬先生のお話を聞いて、E S Dの授業を実践していく上で、これがポイントだったなどと思われることを1つまたは2つ、それぞれが出して行って、それをグループの他のメンバーで見比べて、整理していきたいと思います。

まずは、ポストイットを1～2枚ほど取っていただいて、ご自身の思われるポイントを書き出していただければと思います。色は何色でも構いません。紙用のマッキーを使っていただければと思います。

E S Dの授業を実践していく上で必要だと思うようなもの、それから取り組むべき課題。先生が実践されていることと共通する部分や、またそうでない部分など。さまざまと思うのですが、今日のお話を聞かれて思ったこと、1つ～2つ、ポイントを出していただければと思います。1枚のポストイットに1つのポイントを書いていただければと思います。それでは、よろしくお願いします。

大体、1つか2つは出していただけましたでしょうか。

では、グループの中で、自己紹介などをしながら、ポイントを他の方に見せながら、どうしてそれを重要だと思われたのか、とか、もし実践できていないことであれば、なぜ自分の学校あるいは自分はその実践がまだできていないのだろうか、またそういったポイントを今後自分としてはどのように発展させていくべきと考えるか。そういった辺りのコメントをしながら、自分の思ったポイントについて、グループの中で共有していただければと思います。

時間が限られていますので、今出されたポイントについて、各グループで「大凡こんなポイントが出て、みんなはなぜそれが重要だと考えるのか」。それから、先ほどポイントを出しましたが、「いかに実践していけるのだろうか」、「なぜ実践ができていないのか」、「どう発展させていくべきなんだろうか」というところ、こういったポイントで、短い時間ですが、話し合っていた点を各グループから1人、まとめて発表していただければ、他のグループと共有できるかなと思うのですが。いかがでしょうか。

○司会 柴川

濟いません、一番近くのこちらのグループではどんなポイントが出て、どういう話し合いをされましたか。こちらの班からお願いします。

○参加者（グループ1）

失礼いたします。

主に、對馬先生の話のを伺った後に、その中で出てきたお話の中で一番の目標は何だろうなっていうので、ゴール、希望を持たせるっていうことになりました。そのためには何が必要なのかなというのは、解のない事象への挑戦が出てきて、それは何のために必要なかっていうので、困難を乗り越えるための力であったり、活動をさせる、そしてまたそれを通じて物事を正確に分析し、理解するための力が必要だということです。また、それには何が必要かっていうので、真正の評価が必要であると。それいろいろなことも含めてもそうですけれども、僕自身感じたことは、格好いい姿も不格好な姿も含めて、いろいろな男性の大人の方と出会って、高校生が成長していけたらいいのではないかと思いました。

以上です。（拍手）

○司会 柴川

ありがとうございました。では、こちらの班の方お願いします。

○参加者(グループ2)

よろしくお願いいたします。

こちらの班では話し合った結果、一番重要な点としては、協力して1つのことに取り組み、1つの最善の解を出すということが一番重要なんではないかという結論になりました。やはり、ここで議論していく中で、いろいろな話があったんですが、それにやはり一番つながっていることとして、先生も言われたように、解のない事象に取り組むことに、これは生徒もなんですけど、学校の教員もなれていくことが大事なのではないか。そして、教員が上から言うのではなくて、生徒から上がってきたもの、生徒が今度やりたいと言ったようなものを大切に、育てていくということが大事なんではないかという結論になっています。

そういうことを進めていく中で、やはり大事なものが外部、地域の方との協力というものが大切なのではないかということが意見として上がりました。ちょっと余りうまくまとまってないんですが、以上でよろしいでしょうか。（拍手）

○司会 柴川

ありがとうございました。では、こちらの前の班の方。

○参加者(グループ3)

失礼します。それぞれの学校現場とか目の前の生徒をこのようにしたいと、このような力をつけさせてやろうという思いがあるときに、その実践するぞという力の源になるの

は何かっていうと、やっぱり自分自身が、生徒もそうだし、教師もそうなんだけど、持っている経験とか、今回の先生のお話でしたら、震災を体験されて、そこからよりよい地域とか、負けずにやっ払いこうと。やっぱり体験があるっていうことが大きいなあと。それから、まず自分たちがやっ払いいくんだ、実践、行動ありき。それから、今日の前にあるピンチをチャンスにかえてやるんだっていう、そういう思いがやっぱり実践の源だなと思えました。

それから、それじゃあ子供たちのため、今の学校をよりよくするために実践するに当たっての留意点として何が大事かという、解のない課題に取り組む。いろんな人がかかわってやっ払いいくっていうふうなことから逃げないということ。そこにチャレンジすること。それから、それらをやっ払いいくに当たって、チームで協力したり、具体的には総合や教科のつながりいう話が出たんですけど、やっ払いいることをつないでいくということ。それが手段、手法としてきちんとないとだめだなと、そのような話がありました。

以上です。（拍手）

○司会 柴川

ありがとうございました。

では、最後に。

○参加者（グループ4）

失礼いたします。

2枚にわたるんですけども、さまざまなポイントがあるということで、6人から意見が出されました。E S Dの活動がなぜ重要かという、意識の変化が行われる、意識が変わることによっていろんな行動が変わっていくからだということで、さまざまなネガティブな事象をポジティブにできたりとかというような意識の変化が起こるから大事だという話になりました。

いかに実践をしていくかという、こういった若い人の力の活用。高校生の力をしっかり使っていくのもそうだし、あと体験の場っていうのをしっかり設けることで実践していくことが可能ではないかと考えました。

なぜ実践できないかという、さまざまなアクシデントが起こったり、あとはE S Dの活動というのは、正解、答えがないという難しさがあるからこそ、なかなか具体的な行動に起こしにくいところがあるのではないかということになりました。

そこで、じゃあどう発展させていくべきかということで、すばらしい意見が最後出たん

ですけれども、愛と思いだということです。有名なアンパンマンも愛と勇気だけが友達というふうに歌っていましたが、愛と思いがあることで、それを乗り越えていくということで、抽象的ではあるんですけども、でもやっぱりその思いが解決する上で一番大事なんじゃないかなと。これを忘れないように、こういった交流で我々自身も変革を取り入れることが大事なんじゃないかと感じました。

以上です。（拍手）

○司会 柴川

ありがとうございました。

今4つの班からすばらしいポイントが出て、そして良い論議ができたと思うのですが、對馬先生、今4つの班の発表を聞かれました、何か一言いただけますでしょうか。

○對馬教諭

先生方ありがとうございます。本当に、改めて、「ああそうなんだなあ、そうなんだなあ…」なんて、こちらで話をさせていただいたんですけども…むしろ何か気づかせていただいたようなお話がいっぱいあって、こちらの班の校長先生からの今の附箋かなと思うんですけど、教師が夢を語らないとだめなんだって。今の「愛」と「想い」にもつながると思うんですが、家庭で子供たちの周りで夢を語る存在って、テレビかな、それとも何かのスターかな、いやお父さん、お母さんかな。お父さん、お母さんは余り語らなそうな気がしますね。教師しかそれを語る、未来像を語る存在ないんじゃないかな、なんて考えながらお聞きしてました。教師が夢を語らないと、明るい未来を語らないと。ポジティブっていうのも出ましたけど、明るい…？もう暗いですね、世の中。もうどう考えても。客観的に考えると暗い方向に映りますけど、教師はやっぱり夢を語って、こうあるべきだって訴えて、そのためにいろんな教育素材を使っていくってことなんだな、なんて。改めて勉強させていただきました。先生方ありがとうございます。

○司会 柴川

對馬先生、ありがとうございます。

それでは、本題でした「日常授業におけるESDの実践」というところで、今グループからは熱い思いと、乗り越えるために教師が夢を語ったり、愛や想いで乗り越えていくということだったんですけど、これからは皆さんにその愛と想いを発揮していただいて、もし、来週或いは来月、皆さんの所属されている学校でESDの教員研修を行うとするならば。日常授業の中でESDを実践していくことを、同僚、仲間をたくさんつくっていつ

て、チームワークを発揮させて、そしてその研修を受けることで、E S Dが今こうして必要なんだということ。この研修やE S Dを行うことでこういう見通しが立つっていうことを頭に入れていただきながら教員研修を企画するのなら、どんな企画にするか、ということこれからグループでプランニングしていただいて、それをまとめて終わらせていただきたいと思っています。そのときに、岡本先生がアドバイザーとして来ていただいていますし、對馬先生もグループワークに時々入っていただきながら、意見交換をしていただきたいと思っています。その教員研修プランを皆さんの学校でするならば、ということで、1～2枚程度の紙にまとめていただいて、最後にお互いにプレゼンをして終わりたいと思っています。

では、先ほどまでと同じように、ざっくばらんに意見交換しながら、どんなドリームプランというか、教員研修の企画を立てれば、仲間をやる気にしたり、そして見通しと、そして必要性がある研修になるのだろうかというあたり。そのあたりを一緒に考えていきたいと思っています。

時間は、実は3時20分にはこの場でアンケートを記入していただいて、3時半には終了とさせていただきたいと思っていますので、お互いに共有する時間を10分ほどとったとしても、あと15分—20分弱しかありませんが、フルに時間を使って企画を立てていただけたらと思います。

それでは、始めてください。お願いします。

※これ以後は、グループ協議の発言（抜粋）。

○参加者

…この実践って合致しているんじゃないかとか、ここをもうちょっとこうしたら、その視点が伸びるんじゃないかっていうことを確認したら、それで十分じゃないかなと。はっきり言って忙しいわけだから、1個でも研修は少ないほうがいいと思う。そんな暇あったら、自分の授業と学年実践をする計画を学年団で話でもしてくださいというほうがよっぽど現実じゃないかなと思う。結局、幾ら言っても、言う人はぐじゃぐじゃ言うだけだし、しない人はしないから。とりあえず、やっていることを持っていけや言ったほうが話が早い。みんな結構考えてやっているから。すごいと思うんです、それは。

○参加者

やっている人はやっていますよね。やらない人はやらないけど。でも、やっている人は、でも自分のものしか見えてないから、周りがどうしているのかということに多分興味はあると思います。けど、ほかの授業を見に行くってなかなかできないから。

○参加者

そういう機会づくりっていうのは必要ですね、そういうのはね。今京山中なんかも、学期に1回はもう全員が公開して、公開授業研究会開いて、それをE S Dの視点で、じゃあどうい能力、態度を育てようとしている授業なのかとか、この活動はどこに焦点やっっているかっていうのをもう明確化させて、みんなで共有するというのをしているんです。でも、やっぱり広がらない。やっぱり、何だかんだ言って、先生らの意識にE S Dって何か新しいものっていう意識がある。言葉では、いや今やっていることをこういう視点から見直すとか、こういうふうに見える化していくことだって頭ではわかっても、結局多くの教師が何か別物って捉えちゃっている。

○参加者

何か面倒くさいなって……。

○参加者

面倒くさいし、何かすごいことみたいに捉える。でも、それはE S Dを普及している立場の人が問題。やっぱりすごい格好いいことをしたり、「えっ、すごい！」っていう雰囲気やっっているから。すごい時間と体力割いている人しかできないようなものに見せちゃうからだめ。そんなことない。

○参加者

そう思うから、多分難しくなる。何でこれ以上忙しく……。

○参加者

そうそう、絶対そうなりますよ。

○参加者

という人が多いでしょ。だから……。

○参加者

そうそうそう。それ正常な反応だと思いますよ。

○参加者

何か「いやだ、いやだ、何で研修させらなきゃならないのか、いつもの授業でいい。」みたいな。

○参加者

京山なんかでも、じゃあESDにすごい熱意を持ってやっている人は、もともと自分がやっていることが教科書だけじゃつまらないから、こんな視点でやってみたいな、ある人がやっぱり、まさにそれがESDの視点で、ここをカバーしていたんだとか気づいて、おもしろいなって入っていく、どんどん。だから、すごい分かれちゃうんです。

○参加者

ですよ、それは思います。教員もある程度スキルアップしないと、厳しいですね。

○参加者

地球市民講座をプランするので、各教科としてどうかかわっていくかですね。地球市民講座っていうのはもうされたことがあるんですか。

○参加者

ないんですけど、ほかの学校は多分してるんですよ、たしか。地球の未来とかで、何か。地球の未来とかいう教材使って。でもそれって国際的なことを取り上げるんだけど、それが何かどのようにかかわっているとか、公平性とか、そのようなことを考えたり、その次のリーダーシップを養うような感じの授業でもあるんです。



○参加者

自分が研修をするということで、多分自分のもう経験とか、やったことしか語れないので、教科書はどの教科もあるので、教科書の題材一步踏み込んで、もしくはもっと深

く、とか広く扱ってみましょうっていうことで、自分が実践紹介するとしたら、英語なんですけど、私。100人村の英文を読んだことがあるので、教科書に出てくるので、もう実際に教室にビニールテープで仕切りをつくって、大陸ごとの面積比で、クラスの数で人数比も割って、はいアフリカ大陸にはこんなにたくさん人がいますとか、そういうふうにもう実際教室の中でやってしまって、さらにあめを配って、富の分配の量も、アメリカはこれだけしか人がいないのに、こんなにあめをもらっているよ、アフリカの方はこんなにいるけど、これだけしかいないよみたいな話をやったことがあるので、その話をすると、翌年1年生の合宿研修で、じゃあ今度は体育館で全員でやりましょうっていう話にもなったりして、ちょっと広がった例でもあるんですけども。

あとティム・バートンの英文を読んだときに、「チャーリーとチョコレート工場」でウンパ・ルンパがすごいもう黒人の、有色人種の印象をめちゃくちゃ強く出して描かれているんですけど、実は何十年も前に映画化されたときは結構白人っぽいウンパ・ルンパで、その写真を比較して出して、「どう思う？」みたいな話をやったりしたことがあります。そこで何か論文たまたま見つけて、それでやってみたんですけども、要するに教科書の題材を広げたり深めたりするとESDになるんですよっていう話をしていくかなと自分では思いました。以上です。

○参加者

長期研修やるとしたら、まず絶対ここは欠かせないのかなと。まず一番最初に、ESDとは何で、こういうものですよって紹介した上で、じゃあそれをするによって生徒にとってどんなメリットがあって、社会がこうよくなってとか、学校にもこういうふうにい影響があって、なおかつ教員にも実はこういうふうに戻ってくる、というような話をまずして、ESDしたいなっていうふうには教員自身に思ってもらうことが一番大事かなと思います。それをした上で、この事例がすごいっていうことで、いろんな事例を紹介していくかなあと。余り思いつかなかったんですけども、例えば英語の授業で国際理解教育をしてもらったりとか、理科、社会で環境の問題を取り扱ってもらってこういう事例がありますよということで事例をたくさん紹介すれば、これならじゃあうちの教科でできるなっていうふうなことを思ってもらえんじゃないかと思いました。

○参加者

去年の世界大会の中で、一番心に響いたのが、大阪の子が何かおじいちゃんに会って、それで遺言でもないけど、昔のことを聞いてあげたら、すごいおじいちゃん嬉しがっていたみたいな、そんな話聞いたときに涙が出たんですけど。何かやっぱり持続可能性とか考えるときに、自分もうちょっとで死ぬなと思ったときに、何を自分の子供とかに言うかなっていうところが何か肝のような気がしていて、例えば自分の学校を転勤するとき、あと2週間ぐらいとかっていうときに、何をここへ残すんだろうみたいな話が過去にあったら力強いかなと思って、いわゆる死に際の遺言を考えるんですけど、教科に落とし込んで、自分のこの教科で何を伝えたいのかなっていうところで、もう自由にやっけていいからみたいな習慣を作って、そこで自分の教科で一番この生徒に伝えたいことを引き出して。多分そうしたら、感じ取れるようなものがちょっと出てくるかなと…

○参加者

教科ってということなので、何かちょっとよく、どう表現したらいいかわからないんですけど、要は各教科の先生が参加してるわけじゃないですか。だから、その教科とじゃあ実社会がどうつながっているのかっていうのを、教員は当たり前なのでわかっているんだけど、それを多分子供にうまく伝えられてないんじゃないかなっていう気がするんですよ。だから、その具体的な部分というのを各教科でどんどんどんピックアップしてもらって、それが要は社会につながっている、教科と社会がつながっているわけだから。それをより具体的にしていって、ちょっとESD見えてくるんじゃないかなっていう気がするんです。当たり前なんだけど、実はこのつながりってというのが、イメージできているつもりが、生徒に伝わってない。だから、生徒に伝わってないから、生徒もよくわからないし、だからどのぐらい各教科、僕は国数英社理ではないので、どんな授業を皆さんさんされてるのかわからないですけども。時々数学の先生なんかと話ししていたら、これはこういうふうに使えるんだよ、みたいな。へえ、そう聞いたら、これやる気になるけどなどかいう話を時々するんですけど、何かそんな感じでやっていくのが実はいいんですね、現実社会の中ではESDであるみたいな。何かつながっていかないかなっていう気がしました。

○参加者

何か教員って、新しいことをやれって言うとなんか嫌がるんですよ。だから、教員研修するって言ったら、めちゃくちゃ嫌がると思うので。間違いなく。年間計画って、計画を立てるって言うとなんか嫌なので、去年をやったことをずっと、要するに結果ESDカレンダーみたいなを出して、それでこれを使うんですよ。例えば、この教材は、私高校なの

で、この教材は未来にかかわるようなことをやりましたと。この教材の中で言われているのは多様性ですよって、こういうアイコンでそれぞれ年間計画の中に落としていったものを全部の教科でどんとまとめると、多分それぞれの教科にこれが散っていると思うんですよ。散っているんで、じゃあこの教材とこの教材と、高校なんか割と入れかわりきくので、入れかえちゃうと、例えば国語でやったことが家庭科につながっているよねとか。数学が、実は数学ってE S Dに使えないとかってよく言われるんだけど、数学って基礎的な部分の解析とか、グラフの解析とか、あんなところってすごく予測を立てるとか、そんなのもあるので、数学でデータ解析のことやりました。何か負の相関とか正の相関やりました。じゃあ、アンケートとります。ドットでグラフに落としてみて、その結果を分析してみたらデータ解析できると。だから、新しいことやるんじゃないくて、とりあえずニーズ、ユース、メリットっていうのを我々がもっと自覚化しなきゃいけないので、やっているじゃないか、こんなことやっていますよねっていうのを意識させるところから始めるといいのかなと思います。

○参加者

・・・割と高校って、個人商店じゃないけど、お互いのこと知らないんです、何をやっているか。まず、その教科の横軸というか、縦軸というか、軸をつくってやるといいのかなあと感じます。

○参加者

このアイコン、今これスキャナーでとって、ポスターセッションのポスターに張れるように。実践報告会でもいいし、しようと思って。このマークがあると、ぱっと目につくしと思うんです。

○参加者

ユニバーサルですよ、このマーク。これいいと思います。特許取ったら、絶対買いますよ、これ。欲しくないですか。

○参加者

これもなかなか刺激的ですね。もし今日一日の命だったらって考えて、やれることを全てやるなんて。やっぱり毎日大切にしなくちゃいけないのをふっと忘れちゃいますよね。

○参加者

これも大事だなと思ったんですよ。社会生活につながる、何かリアルなものってなくて。

○参加者

キャリア教育につながるのか。

○参加者

英語で、それこそこんな人権の話が英語で聞いてて、現社でやったりして、それってもう見事にリンクしている感じだから。それが市民講座みたいなことにつながっていくでしょうし。

○参加者

数学は実際どうですか、E S D。

○参加者

E S D、それはもう完全に未来予測だと思うんですけども、関数って全て未来予測。だから、過去から未来までの予測を、時間をTであらわして、その何年後かにどうなっているかとか、死亡分析とかも・・・この成分がどんなに減っているかとか、死亡推定時刻を推定するとか、何年後にはエネルギーがこうなっていてとかいう予測すれば…。

○参加者

どの関数を選ぶかっていう、その前提がすごくおもしろそうですね。直線なのかとか。

○参加者

人間的に、足すとか引くとか割るとか掛けるの力。力ですよ。足す力、引く力。何かいろいろ減少とか増加とか出てくるけど、先程のネガティブ・ポジティブじゃないが、引く力にこんな力がある。

○参加者

数学の中ですか。

○参加者

何かそんなのあったらおもしろいなとか。

○参加者

常に足すとか掛けるだけがプラス表現ではないという。

○参加者

村に人が少なくなることですごく力が…

○参加者

マイナスを足すみたいな感じですかね。マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるんですよね。

○参加者

…体育どうつなげるだろうなあ。

○参加者

それは健康とかで、こんなのはまさにチームワークとか、あとはこんなんもそうだし。結構最近、何かもう、運動ができればいいってもんじゃないから、こういう部分であったり、結構入ってきますよね、やっぱり。

○参加者

体育って、やっぱりチームワークだと思うところがあって。能力みんなばらばらなやつのが最適なところを引き出し合って、相互作用してチームとして。それって、そういうところで学んできたような気がする。ここは出過ぎちゃだめみたいな。

○参加者

多様性もありますよね。いろんな子たちがいるっていうね。結構。

○参加者

トップアスリートの人種構成、結構偏りあるじゃないですか。でも、今回ラグビー、日本人が大躍進遂げたわけだから、日本人がいかにその競技を頑張るかっていう課題解決学習になっちゃうみたいなの。いかに体力伸ばすのか。

○参加者

体力的には劣っているんだけど勝っちゃうみたいなの。

○参加者

そうですね、女子バレーなんかはね、ありますよね。

○参加者

何でバク転ができないのかって、批判的思考力ですよ。ここで手が曲がるからだとか。

○司会 柴川

それでは、残り時間も少なくなりましたが、各グループから、同僚をやる気にさせ、必要性和見通し感のある教員研修プランが出たかと思えます。

今度は、順番は、先ほど一番最後だったグループから先に発表していただければと思います。どのような教員研修プランが立ったのでしょうか。2分程度でお願いします。

○参加者（グループ4）

教員研修をする上で、まずはESDとは何か
ってということと、ESDをすることでどんなメリ
ットが生徒にとってあって、学校にとってあ
って、さらに教員にとってあるのかっていうの
をやはり伝えて、理解してもらうことが必要か
と思います。

それを伝えた上で、具体的にじゃあどうい
うことが言えるのかってということで、たくさんお
もしろい案が上がってきました。

例えば、各教科、死に際の遺言を考えてく
れ。例えば、数学も、あと2週間であなたはこ
の学校を去ります、じゃあ何をあなたは教えま

すか、生徒に教えますかっていうのはかなりESD
的な内容が出てくるんじゃないかって
いうことで、アイデアが出てきました。ほかにも、
世界がもし100人の村だったらの英文を
実際に英語で使ってもらったらどうかとか、
地球市民講座を実際プランニングするよ
うな研修をしてみたらどうかとか、あとは
各教科で一般的な社会生活にどうい
うふうにつながっているかというのを
ピックアップしてもらって、それを授
業に落とし込むっていうような話を
してはどうかということがありました。

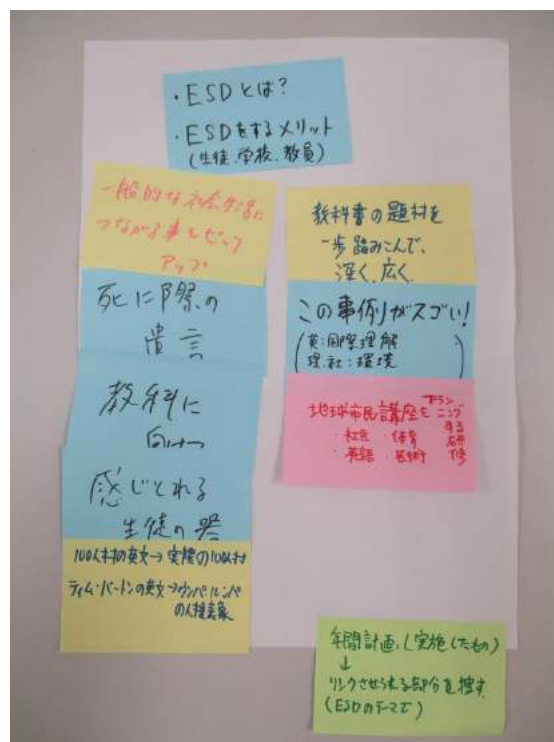
こういったことを具体的事例として挙げて、
最後に、自分の教科で今年一年間実施
した計画ですね。各教科での計画って
いうのを、じゃあ実際にESD的につな
がっていませんでしたかかっていう
ことを振り返ってもらうことで、実
は知らず知らずのうちにESD的な
ことをしていたんじゃないかってい
うふうに教員が気づけば、それを次
から意識して、ESD的な授業って
いうのを実践してってくれるんじ
ゃないかということ、こういったこ
とを最後に持ってこようというよ
うな話になりました。

以上です。

○司会 柴川

ありがとうございます。

○参加者（グループ4）



私からの話は以上です。（拍手）

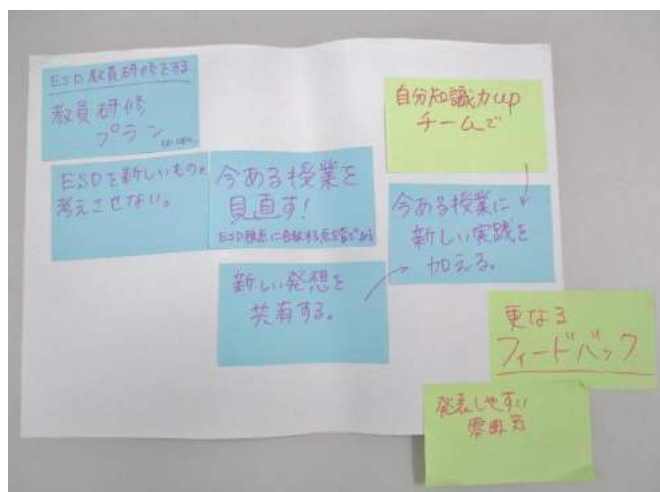
○参加者（グループ4）

我々がつくったわけじゃない、これ岡本先生につくっていただいたものなのですが、E S Dの構成概念って言われているもの、それからつけたい力、6つの構成概念、7つの能力、態度ですが、これを結局可視化する形でいろんなところに当てはめていくと、それぞれリンクが見やすいんじゃないかということ。だから、数学の中で批判的思考力を働かせているところもある、国語の中でも働かせているところがあるということ、何か個人商店みたいにばらばらになっている高校の授業が何か軸で結ばれないかなということ。それが教員研修の中でE S Dの自覚化にもつながっていくんじゃないかということです。

以上。（拍手）

○参加者（グループ3）

私たちのグループでは、E S Dを新しいものというふうに捉えるのではなくて、今ある授業の中でE S Dに合致しているようなところがたくさんあるんじゃないのかなと思い、まずはそれを見直すことから始めようと思います。E S Dの視点に合致するものを、こういうのがここにありますが、こ



のようなどこかの授業に合致しているんじゃないのかなということ、まずはそれを見つけてよう。

さらに、その中でもっと伸ばせるようなところとか、補っていったらもっとE S Dとして充実するんじゃないのかなというところ、新しい発想をみんなで共有して、じゃあそれに対して、自分の知識力もアップすることはもちろんなんですけど、チームでどうやってサポートできるか、教員同士のチーム力をもっと少し補い合いながら、理科教員だけで何とかするとかではなく、社会の先生がサポートするとかっていう形で、みんなでその授業を一つずつをよくしよう。

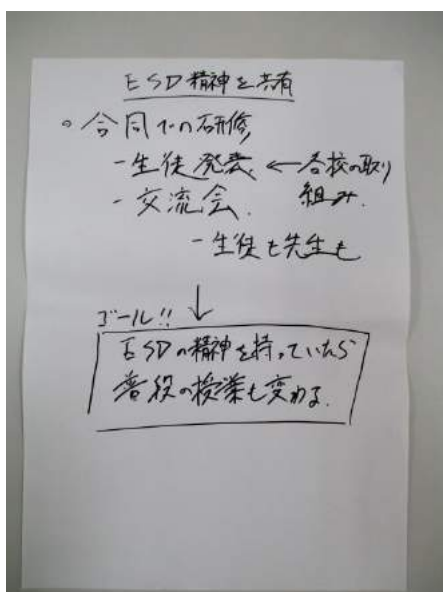
さらに、今ある授業にそれを加えていこうと、そこからフィードバックをもっとするべ

きなんじゃないのかなと考えています。今の中では、フィードバックちょっと少ないのではないのかということで、じゃあ生徒が一生懸命ESDの授業の受けて、アクティブラーニングだとかいろいろやっても、じゃあ今度それをもっとよくするためのフィードバックを教員がどうやったら生かせるのかということと、あとフィードバック、意見をもらいやすい、発表しやすい、子供たちがもっと意見を発表しやすい雰囲気をつくって、もっとフィードバックをして、新しい授業、新しいというよりかは、よくなった授業、ESDとして充実した授業をできるんじゃないのかということを考えていこうというのを研修プランで考えました。

以上になります。(拍手)

○参加者(グループ2)

まず、ESDですけど、そもそもESDって何だってなったら、なかなか答えが見つからない。それはなぜかというところ、幅広いからだそうです。そうすると、ESDって何って考えさせた時点で、先生たちは、もうそんなのはわからないからいいやってってしまう人のほうが多い。そうじゃなくて、それを逆手にとって、自分たちの授業は実は持続可能なんだってことに先生たちに気づかせてもらうのが大切かなと。自分が今教えている教科が実はずうっと生徒たちが使えるスキルになるって、それを知っただけで先生たちにとってはいいモチベーションになるじゃないかというところがありまして、ESDの精神っていうものをしっかりと先生たちに教え込ませる、理解してもらってということが大切かなあと考えました。



具体的には、例えば今日やられているような、合同で、何校かと合同で。例えば、1校だけだとやっぱり限界があると思うんですけど、いろんな学校がかかわり合うことで、それぞれの学校が相乗効果で高まっていくことができるんじゃないかなと思います。大の大人がステージに立って話しても、先生方半分ぐらいは寝ちゃうと思うので、そうじゃなくて、生徒が今日みたいに発表する。生徒の発表って、先生やっぱり寝ないんですよ。やっぱりしっかり聞くんですよ。だから、生徒にまずは発表し

でもらって、各校の取り組みについて発表してもらおう。その後に、交流会で先生同士ももちろんそこで交流しますし、生徒同士も今日みたいに交流すると、生徒同士の中からESDってこういうものだよってアイデアが出て、それが教師に対してもいい影響力が出るんじゃないかなって。

ゴールとしては、やはりESDの精神を持っていたら、ふだんの授業でもちょっと変わってくる。例えば、数学とかだと、連立方程式・・・余り使わないですけど、そうじゃなくて、これは考え方の授業だと。考え方は、一つの物事に対する考え方はいろんな方面から見ることができる。それは数学の授業で教えているんだっていうことをつけ加えるだけでも、生徒たちの授業に対する意識っていうのはもっと高まりますし、それはまさにESDの考え方じゃないかなというところで話をしました。

以上です。(拍手)

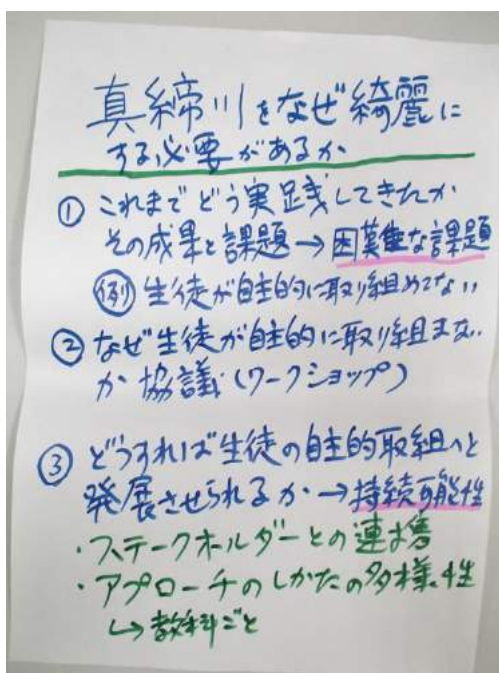
○司会 柴川

ありがとうございました。

○参加者(グループ1)

それでは、失礼します。山口県の宇部工業高校から来たイワタニと申します

今回、具体的な本校で、今真締川の清掃作業、学校の前を真締川という川が流れているんですけど、この清掃作業をやっております。それで、本校ESD、今回僕が余りわからなかったもので、ちょっとこの研修会に参加させてもらって、当然学校の教員のほうもそこまでESDを意識したようなことはやっておりません。今回は、この真締川をなぜきれいにする必要があるのか。清掃活動からつなげて、どうESDにつなげた話ができるかということを考えてみました。



それで、これまでどう実践してきたかというのを、結果を踏まえて、どのような課題があるかをまず最初に教員全体で見出せたらいいかなど。具体的な例としては、困難な課題として、生徒が自主的に取り組まないと、こういうのが上げられます。これを自主的に取り組ませるためにはどうしたらいいか。これを教員が、このような今日研修会開いていますけども、このような形でグループワークをして、それでそ

の課題について具体的な例を生徒に示してやることで、生徒のやる気にもつながりますし、それをもとに教員側のやる気にもつながってくるんじゃないかと思っております。

それで、今回それをステークホルダーと教員が連携ということありまして、それを具体的に考えていくと、地域との連携。例えば、川を流れた後の企業との連携、それから川の周りの地域との連携。そういうことから、E S Dはいろんなところに広がっていくんだよってということを教員が理解できるんじゃないかなと思って、今回このような形でとらせてもらいました。

以上です。（拍手）

○司会 柴川

ありがとうございました。

それでは、魅力的な教員研修プランが出そろったところで、もう時間が少ないんですけども、最後に一言、岡山理科大学のオカモト先生より、本日の感想を 言葉をいただきしたいと思います。

○アドバイザー 岡本弥彦（岡山理科大学）

失礼します。岡山理科大学の岡本です。

今日は、この分科会ですね、前半は對馬先生に貴重なご講演いただきましてありがとうございました。後半は、先生方本当に、皆さん主体的に、なおかつ共同的にワークショップを展開していただいて、短い時間でしたけど、かなりいろんな制度が見えてきたんじゃないかなと私思いました。

もう余り時間ないんですけども、ここですね、E S Dを同僚にどうやったらやる気にさせることができるか。当然、これいろいろ難しいと思うんですけど、私は大きくやっぱり2点上げたいと思っています。大体、もう今までの各グループのお話で出たんですけども、1点目はやっぱりE S Dがわかりにくいから、E S Dとは一体何か、どこがE S Dなのかっていうところをやはりわかりやすく伝えていく、普及していく必要があるんじゃないかなと思うんですよね。先ほど内田先生が、あそこにマグネットを張っていただいたりもしたんですけども、もう皆さんよくご存じだと思うんですけど、国立教育政策研究所がこういうリーフレット、最近はまだ新しいのを1つ出していますけど、こういうものの作成にもずっと私関わらせていただいています、それで要するにE S Dっていうのはなか

なかわかりにくいんだけど、いわゆるE S Dの視点っていう言葉がよく使われますから、だからせめてそこを何かガイドラインに当たるようなものを作成して、それでもってまずE S Dを普及していったらっていう、そんな趣旨でこういうものをつくりました。割と多くの学校でこれ取り入れてくださってまして、ですから今あそこでマグネットを張っていただいたんですけども、やっぱりE S Dの視点っていう言葉だけだったら、どうも曖昧ではっきりしませんから、6つの視点ですね、構成概念とか7つの能力、態度とかっていうものがありますから、ああいうもので、いわゆる視覚化ですよ。自分たちでやっている取り組みを視覚化し、それによって今度、特に中学、高校は教科も縦割りになりがちですから、教科を超えて、教科連携をしながらやっていく上では、やはり視覚化していくことが大切だと思います。それがE S D本来の教科連携にもつながると思うし、もっといえば、いわゆるホールスクール・アプローチ。学校全体だとか。それから、E S Dをやることでカリキュラムマネジメントも進んでいくなっていうふうな、そういうことも出てくる可能性もあるかなと思っています。ですから、1点目はやっぱりこのE S Dの視点の可視化っていうものを広めていくことかなっていうふうに思っています。

それから、2点目は、これもどっかのグループにありました。やっぱりE S DをやることをメリットっていうものをしっかりPRしないと、E S Dやったって、何か苦勞ばっかりだっていうんではやっぱりいけないわけでしょうから。特に、高校の場合だったら、E S Dのメリットをどこに置きたいか。これも一つはやっぱり学力っていうところにぶつきたいと思うんですよ。文科省の学力調査、小・中学校のほうでは、もう先生方ご存じだと思うんですけど、総合的な学習で、しっかり探求活動をやっている学校のほうが、A問題もB問題も高得点なんですよ。それはどっちが後先かわかりませんが、でも少なくとも、やっぱりこのE S Dが求めているような、いわゆるアクティブラーニング…そういうものをしていくことが、探求力とか問題解決力の向上にもつながるし、いわゆる基礎学力のほうにも反映してくるっていうのがやはりあるんじゃないかと思うんです。ですから、E S Dをやるのがやはり子供たちの広い意味での学力、当然その中には受験学力も含まれると思うんです。そこの向上にもつながっていくんだっていうようなことがもっとPRできれば、E S Dも推進するっていうか、同僚の先生方にもやる気を持っていただけないかなと思っています。だから、逆に今日お越しの先生方の学校では是非、E S Dを推進かなりもうされていると思うんですけど、今度はそれが自校、自分のところの学校の生徒たちの学力にどう結びついたらっていうようなこともしっかり評価をしていた

だいて、また発信をしていただけると、そうしたらE S Dの推進につながるんじゃないかなと思っています。

すみません、まとまりのない話だけでも、是非先生方これからも各自、学校、各地域のほうでE S D推進にご尽力いただければありがたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。

○司会 柴川

ありがとうございました。それでは、閉会にしたいと思います。最後に今日、とてもお忙しい中遠くからお越しいただいて、心の温まる、そして勇気の出るプレゼンテーション・報告を聞かせていただきました對馬先生に、拍手でお礼の気持ちを表したいと思います。本当にありがとうございました。（拍手）

それでは、ここで解散にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

付 録

プレゼンテーション資料

1. 「ESDの視点に立つ教科学習の展開」
～宇宙空間の概念を広げ、自然観を豊かにする理科学習を通して～
岡崎市立男川小学校 稲垣 裕子 教諭
2. 「ESDの推進および授業改善」
～未来につなぐ地域連携教育～
大田区立大森第六中学校 柴崎 裕子 教諭
3. 『復興教育からのESD～新教育プログラムへの挑戦』
福島県立ふたば未来学園高等学校 對馬 俊晴 教諭

ESDの視点に立つ 教科科学習の展開

愛知県立岡崎市立男川小学校 稲垣裕子



持続可能な社会

能力・態度

のつながり

構築する担い手

思考力

表現力

判断力

教材の
つながり

人の
つながり

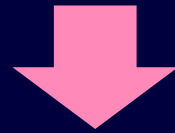
めざす子供像

地域や周りの「人・もの・こと」との
「つながり」に気付き、周りの人々と
協力し、共に生きる未来のために進ん
で考え、行動できる子

研究仮説

仮説 1

ESDの視点に立ち、**教科・領域を関連させ、大単元を設定する**

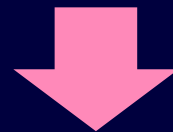


教科の学びと今日的な課題のつながりに気づき、共に生きる未来をつくらうとする姿につながるであろう。

研究仮説

仮説 2

「ひとり学習」を基盤にして「関わり合い」や「振り返り」を重視した授業展開の工夫



子供たちの思考力・判断力・表現力が高まり、課題解決に迫る資質・能力が身に付くであろう。

E S Dの視点に立った学習指導で 男川小学校が重視する能力・態度

- ① 批判的・建設的に考える力
- ② 見通しをもって、具体的な解決方法を見いだす力
- ③ 多面的・総合的に考え、本質を見抜く力
- ④ 気持ちや考えを表現し、伝え合う力

E S Dの視点に立った学習指導で 男川小学校が重視する能力・態度

- ⑤ 他者と協力する態度
- ⑥ つながりや多様な価値観を尊重する態度
- ⑦ 進んで参加する態度
- ⑧ 地域や伝統文化を大切にする態度

ESDカレンダー

教科領域	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	元気調べ(相手意識をもった関わり合い)											
国語	春の自然		夏の自然			秋の自然			冬の自然			
	案内係になろう	わたしが選んだ今月のニュース	わたしが考えたこと				みんなで新聞を作ろう	世界一美しいぼくの村		調べたことを報告しよう		
算数	角とその大きさ	一億をこえる数	折れ線グラフ							整理の仕方	直方体と立方体	
理科	季節と生き物											
	電池のはたらき	星の明るさと色	とじこめた空気や水		月の動き		星の動き		すがたを変える水		自然の中の水	
社会												
総合	宇宙の不思議を探ろう ～わたしたちが生きる地球と宇宙のつながりを見つめて～											
	地球の歴史を知ろう (生命の海科学館) ・地球は宇宙に浮かぶ星 ・月も星 ・太陽も星 ・地球と月と太陽の位置関係	わたしたちが暮らす男川の星を上げよう ・プラネタリウム来校 ・春、夏の星座の見つけ方 ・今夜の男川の空 ・星の明るさと色 星博士の話① ・いちばん明るい星って何 ・太陽系惑星の見つけ方	・火星 ・木星 ・土星 ・天王星 ・海王星 ・そのほかの星 ・星座	宇宙博士の話 ・3D映像で宇宙空間を実感 地球にとって、月は特別な星 ・月の形の変化観察 ・月の動き方観察 ・月の模様調べ ・星座の動きとの違い	皆既月食観察 ・天文現象の補足	・JAXAの宇宙博士の話 ・地球と月の関係 ・月の実際の姿	宇宙博士の話② ・流星群観察のこつ ふたご座流星群観察 「この星」の博士を目指して ・流星の星を調べる ・ポスター作り	地球と宇宙のつながりを見つめよう ふるさと地球を守れ討論 ・星空から考えるわたしたちの暮らし ポスターセッション準備 男川ユネスコフェスティバル				
特活												
道徳												
		ふるさとを愛した歌人					ふるさと紹介				わたしたちの心を育ててくれるふるさと	

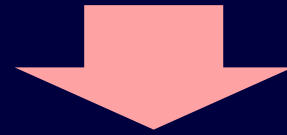
4年 理科・総合的な学習の時間 重点単元指導計画

8月～10月	9月～11月	1月～2月
<p>単元名「空を見上げよう」(13時間) (総合8時間・理科5時間・観察随時)</p>	<p>単元名「夜に輝く月や星の不思議を探ろう」(18時間) (総合12時間・理科6時間・観察随時)</p>	<p>単元名「わたしたちが生きる地球と宇宙のつながり」(11時間) (総合10時間・理科5時間・観察随時)</p>
<p>【学習目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・星により、明るさや色がちがうことに気付くことができるようにする。 ・夏に見られる主な星座や星の名前を知り、宇宙に散らばる星々への興味を高められるようにする。 	<p>【学習目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・星や月の動き方や特徴について理解できるようにする。 ・月食の観察やプラネタリウム観察、専門家の話を通して宇宙とのつながりに気付くことができるようにする。 	<p>【学習目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでに習得した学びを生かし、宇宙に関する自分の追究テーマについて調べ、伝えられるようにする。 ・友達の調べと関わり合い、共感したり批判したりしながら、地球環境と宇宙のつながりについて、自分の見方や考え方をもちつことができるようにする。
<p>【導入と課題設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命の海科学館見学を通して、地球の誕生の秘密や、太陽系の形成について学芸員の話や映像から学び、宇宙への興味を抱き、天体について様々な角度からアプローチし、見たことのない宇宙へ思いをはせる。 	<p>【導入と課題設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇宙物理学の専門家から宇宙空間の実際について、先端の科学や研究から分かることを聞く。宇宙の空間概念や時間概念のイメージをもち、未知の宇宙への疑問を掘り起こす。 	<p>【導入と課題設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学びを活用し、問題意識をもって宇宙や天体に関する自分の課題を見つける。
<p>【ひとり学習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天体の専門家から、星空の魅力と観察のこつを聞き、星空観察の計画を立てる。 ・移動プラネタリウムを呼び、男川小上空の夜空や、月や星の特徴について学芸員から学ぶ。 ・夏の夜空の星を観察し、星の明るさや色について記録する。夏の大三角を観察し記録する。 ・星空観察会を行い、天体望遠鏡を用いて月の模様や土星の輪を観察する。 ・地球にしか存在しない水と空気の性質を利用したペットボトルロケットを作成、発射する。 	<p>【ひとり学習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇宙物理学教授から3Dソフトを用いた宇宙の姿についての話を聞き、実際に行くことのできない宇宙空間に点在する星の本当の姿について知る。 ・月の動き方や満ち欠けを観察し、記録する。 ・星座の並び方と動き方を観察し、記録する。 ・10月8日の皆既月食、12月14日のふたご座流星群を観察し、天文現象の神秘を実感する。 ・JAXA から月の専門家を招き、地球の最も近く最も関わりが深い天体である月について、新たな知識を得る。 	<p>【ひとり学習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月、太陽系惑星、星座等自分の課題について調べたことをまとめ、ポスターセッションの準備をする。 ・調べたことをもとに、地球環境や自分たちの生活と宇宙とつながりについて、考えをもち。
<p>【関わり合い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・星の明るさや色について、気付きを伝え合う。 <p>【振り返りと広がり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の気付きを受け入れ、家族と共に星空を見ながら、天体についての興味を高める。 	<p>【関わり合い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月を観察して分かったことを話し合う中、月の動き方や満ち欠けの周期についての規則性を見つけ出す。 ・専門家から聞いた実際の星の位置と、自分が観察した地球からの星の見え方の違いから、地球が回っていることについて説明し合う。 <p>【振り返りと広がり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月の動き方についての考察や、月食や流星群観察での気付きについて、友達の考えを受け入れながら話し合う中、新たに生まれた自分の考え方を記録する。 	<p>【関わり合い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が調べた宇宙の秘密はどんなことか、他の星にはない地球の良さや問題点は何か、自分なりに考えたことを中高学年や地域の方に発表する。 ・星空を隠す電気エネルギーや地球を取り囲む宇宙ごみの存在について、討論する。 <p>【振り返りと広がり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球の中に暮らしながら、宇宙という外から地球を見つめ直したことで、星や月が地球にもたらす恵みや直面する問題を改めて感じられるようにする。大気と水と生命を育む地球の環境と宇宙とのつながりを保つことの大切さを見つめる。
<p>【地域素材・関係講師】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命の海科学館 学芸員 浅井氏 ・天文学会員 藤井哲也氏 ・シネマ館 プラネタリウム設備 ・プラネタリウム学芸員 遠山幸氏 	<p>【地域素材・関係講師】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・愛知教育大学教授 澤武文氏 ・奈良女子大学附属小学校 杉澤学氏 ・JAXA 宇宙教育アドバイザー 藤純夫氏 	<p>【地域素材・関係講師】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋市科学館 プラネタリウム ・男川ユネスコフェスティバル 地域で発表

専門家の授業



知的好奇心を刺激

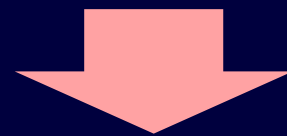


追究の糸口
新たな視点

男川ユネスコフェスティバル



学びの共有

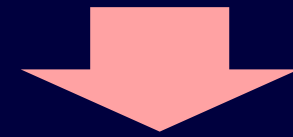


教科学習と自分の
生活とのつながり

朝の元気調べ



相手を意識して

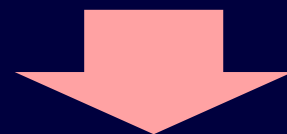


- ・ 納得させる表現
- ・ 建設的な関わり合い

ひとり学習



子供の迷い・つまずき

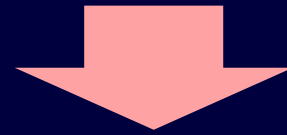


- 視点を与える個別支援
- 得た情報を活用させる個別支援

関わり合い



互いの考えを比較検討

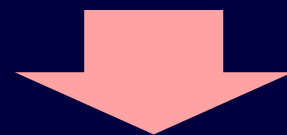


- ・ 類似点や相違点を
関連付けた思考,
判断,表現

振り返り



建設的な関わり合い



- 新たな見方
- 考えの深まり

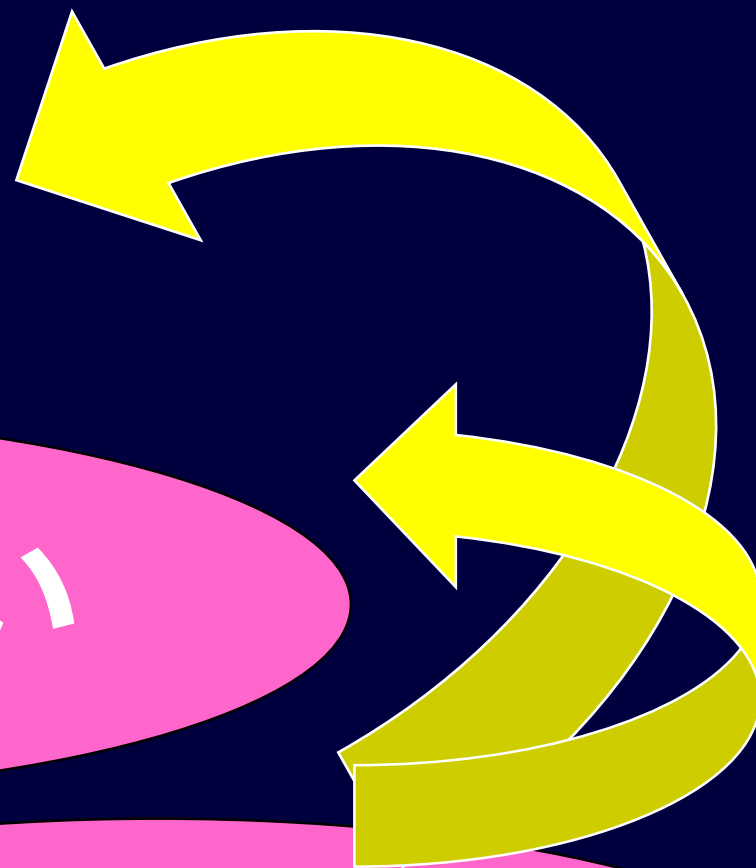
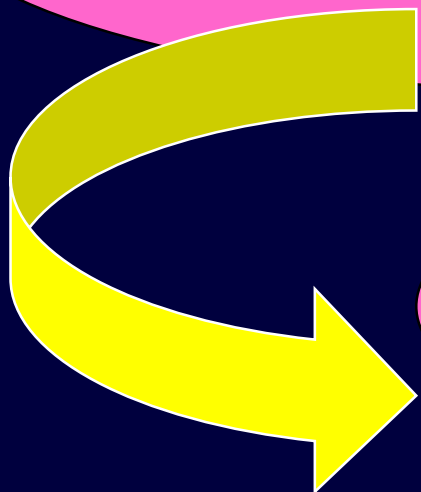
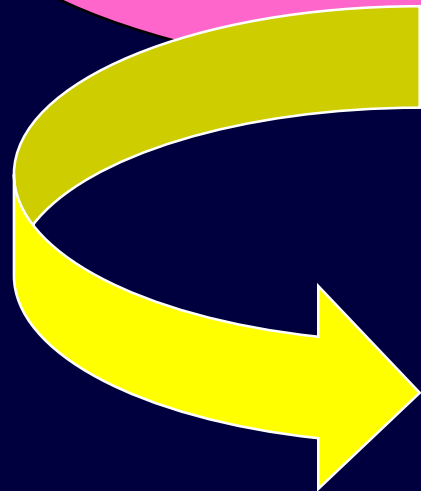
ひとり学習



関わり合い



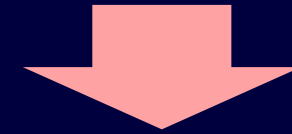
振り返り



ESDの視点に立って



教科の学び



- ・ 環境や暮らしに役立つ
- ・ 身の周りの今日的な課題

宇宙空間の概念を広げ、
自然観を豊かにする理科学習

～4年「宇宙の不思議を探ろう」の実践から～

目指す子供の姿

自ら自然に関わり、興味・関心を高めながら観察・実験を続け、結果を関係付けて考えることができる子供

科学的根拠をもった思考を通して、豊かな自然観を獲得できる子供

星に親しむ

観察の視点

移動プラネタリウム



星に親しむ

結果の共有

夏の星空観察会

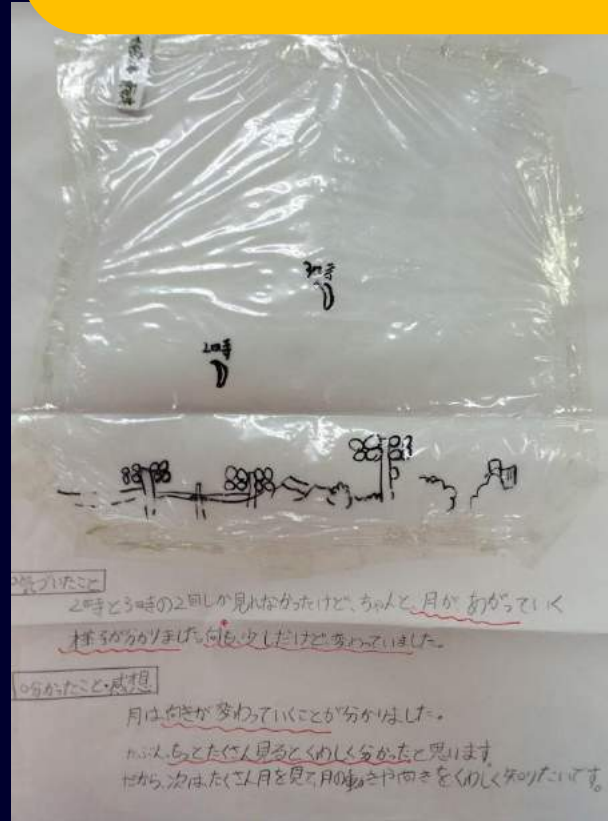


技能を高める

教具の工夫



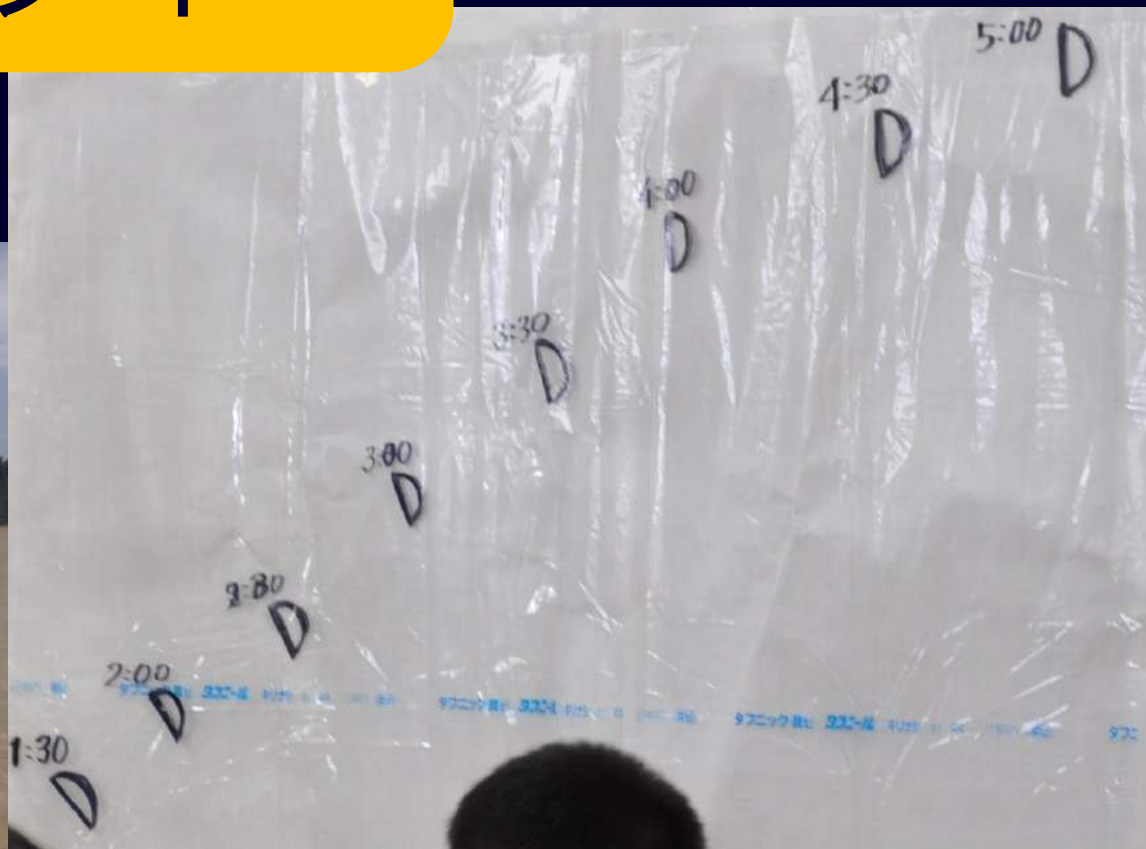
透明シート



技能を高める

教具の工夫

大型シート

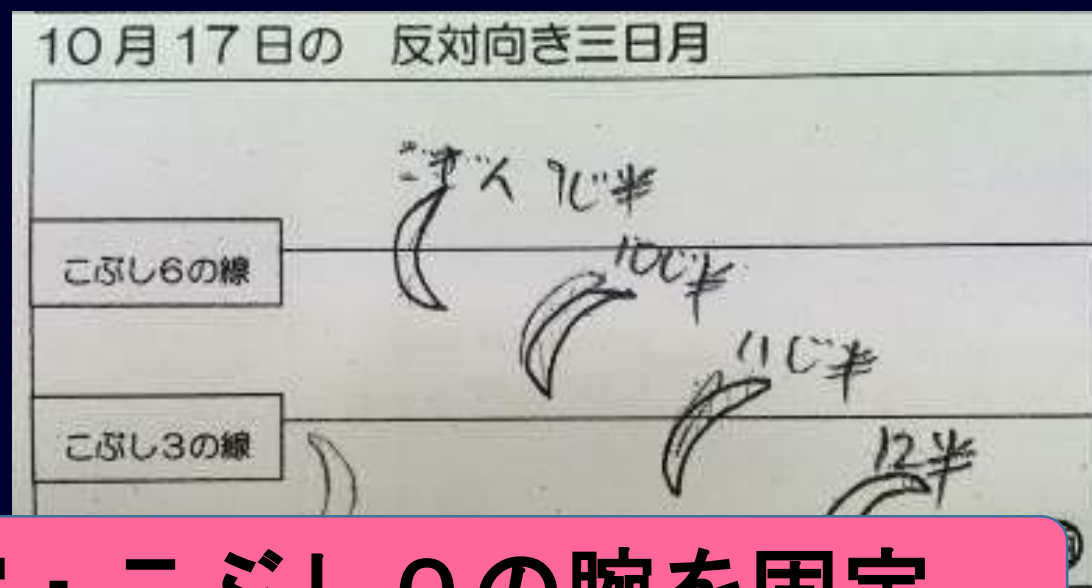
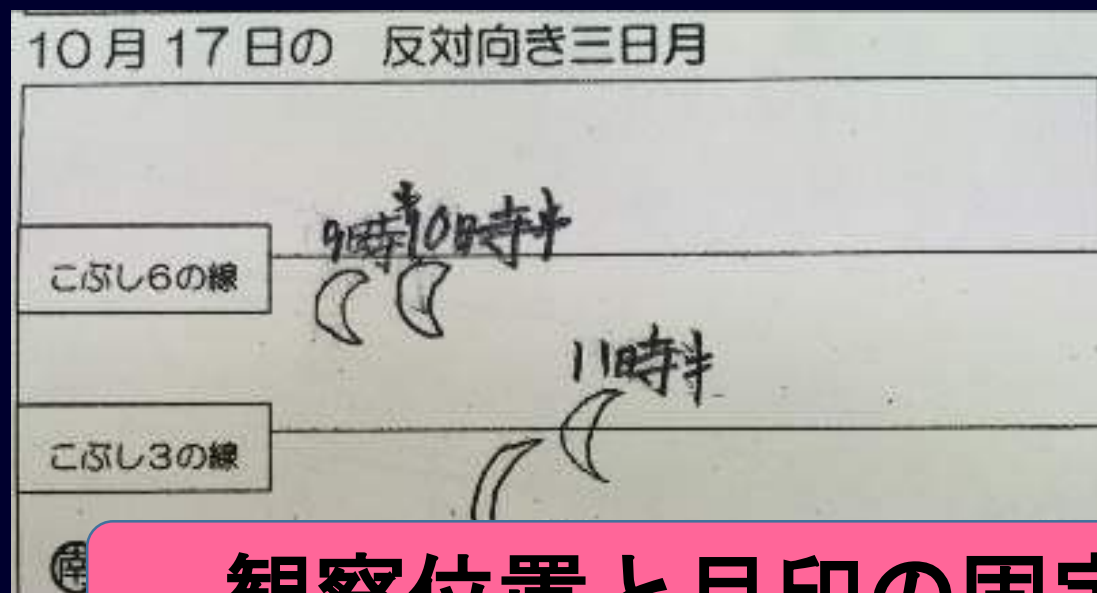


思考・判断・表現

比較検討

建設的に関わり合う

違う結果の原因を考える→高さや方位のずれ



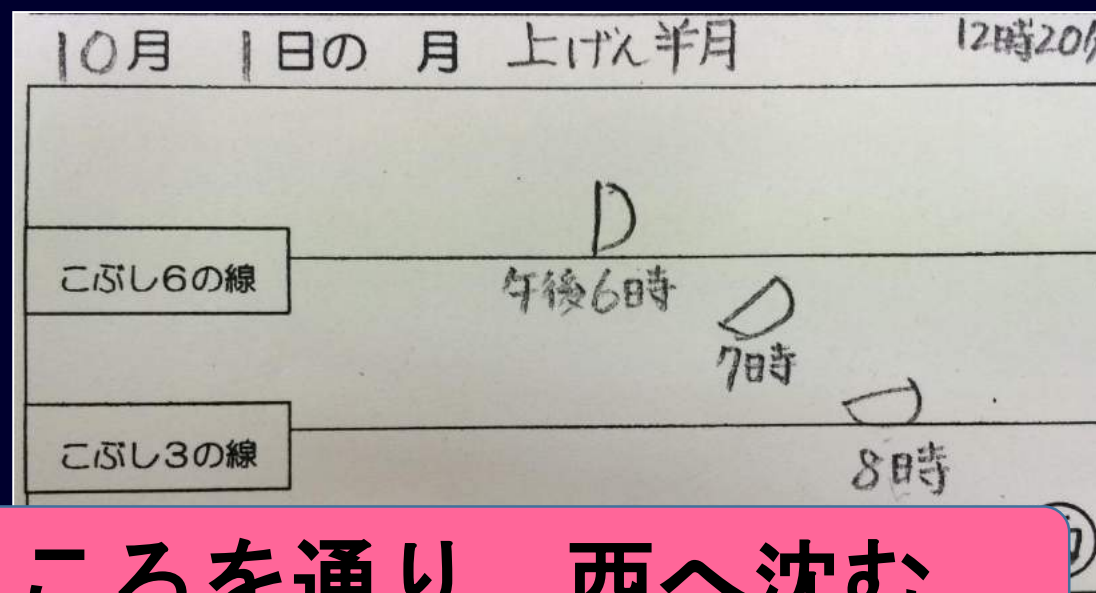
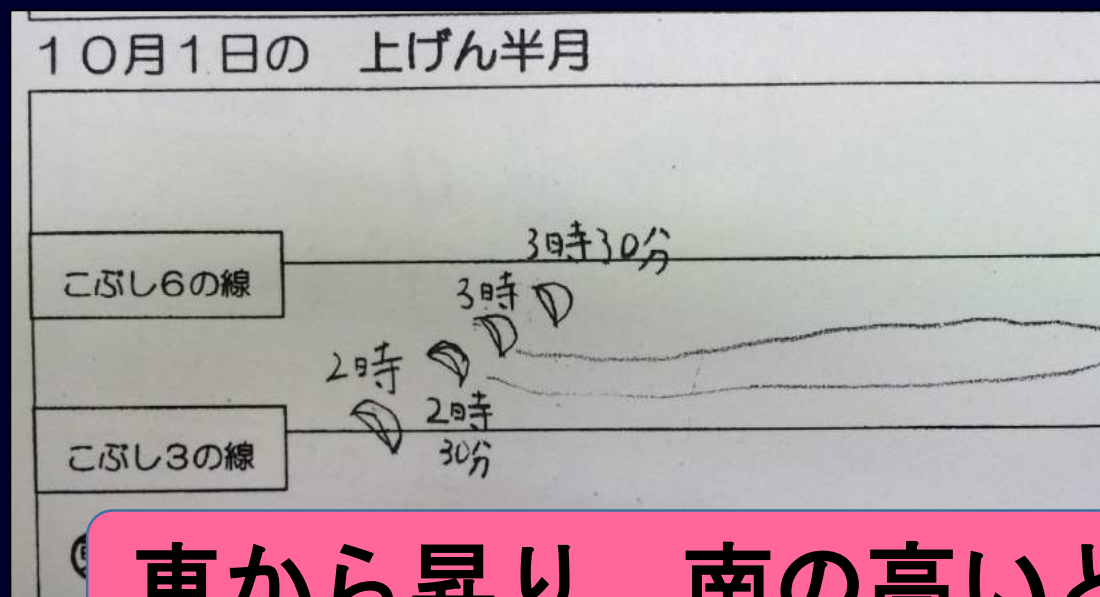
観察位置と目印の固定・こぶし0の腕を固定

思考・判断・表現

比較検討

関連させて関わり合う

違う時間帯に観察した結果をつなげて



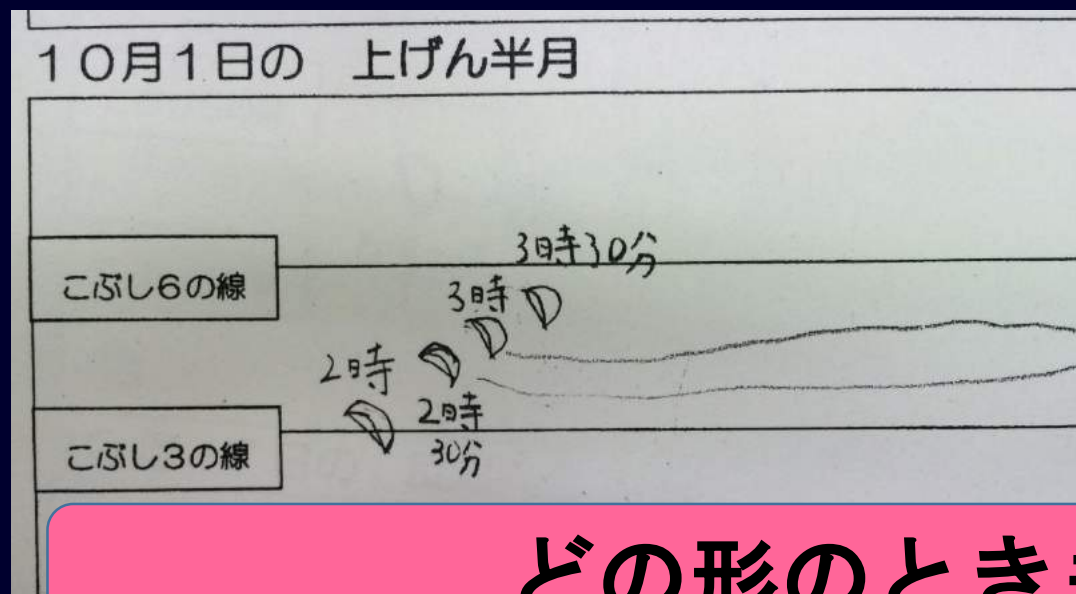
東から昇り、南の高いところを通り、西へ沈む。

思考・判断・表現

比較検討

視点を変えて関わり合う

形が違う月を観察した結果を関係付けて

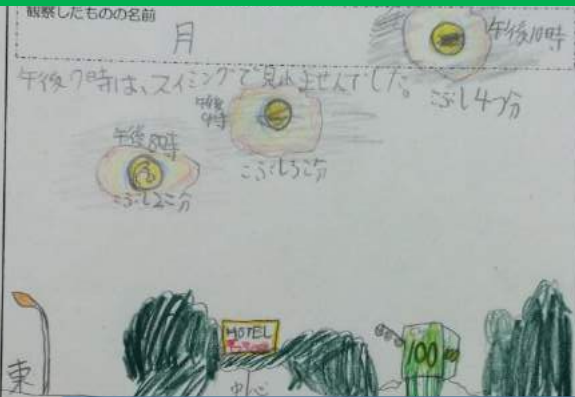


どの形の時きも、同じ動き方



2014.09.29 17:46

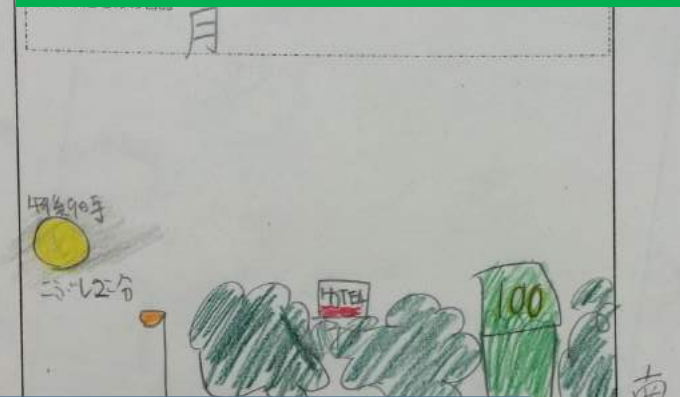
7月11日



7月12日



7月13日



同じ時刻に観察すると、前日より東にずれる。

毎日約1時間ずつ月の出がおそくなる。

満月はいつも夜に見える。三日月は夜見えない。

専門家から

宇宙空間概念

3D 宇宙の旅



不思議を実感

天文現象

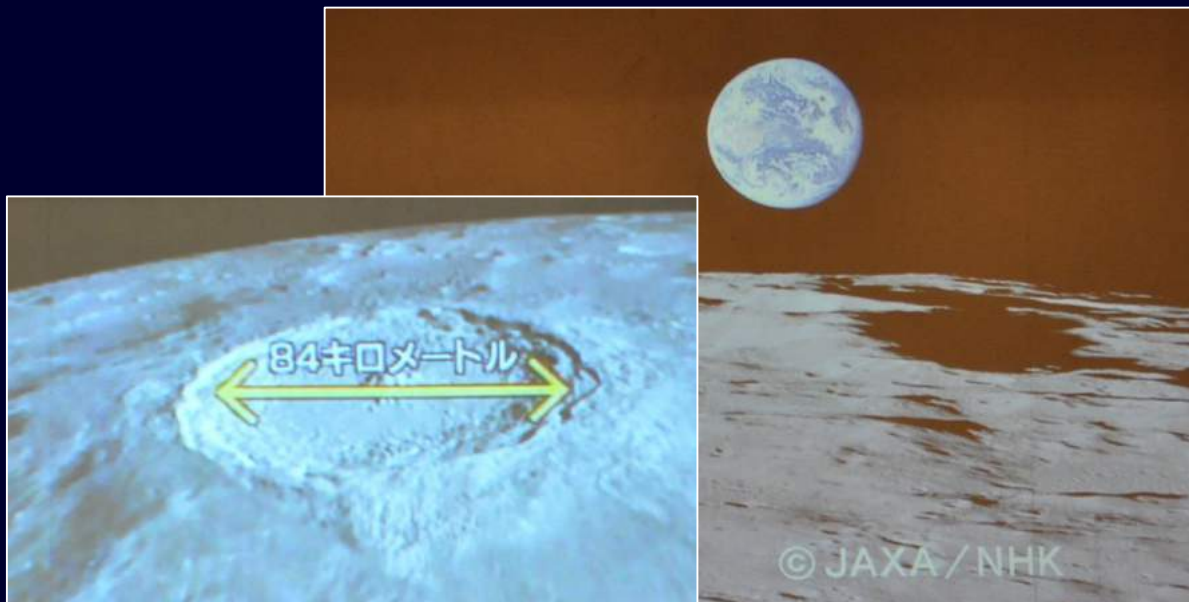
皆既月食観察会



専門家から

月の実態

「かぐや」の映像 モデル



実
毛



実感を伴う

立体モデル

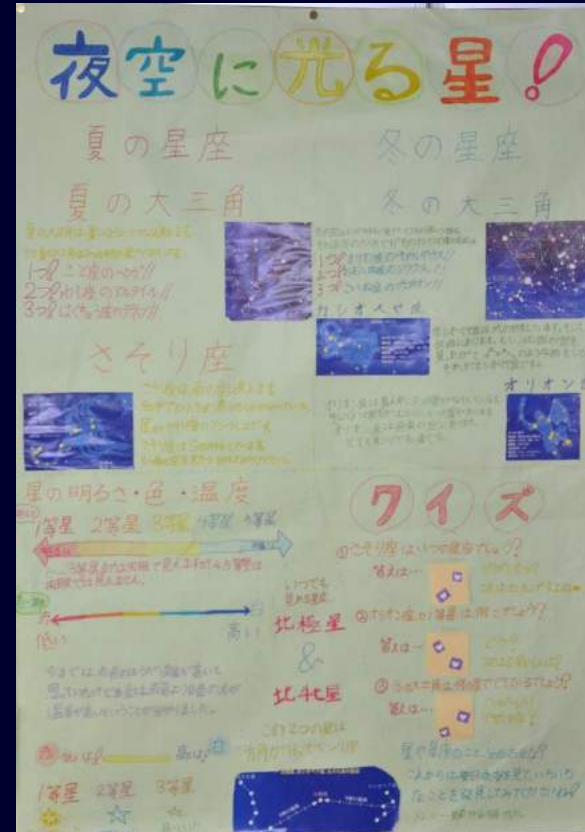
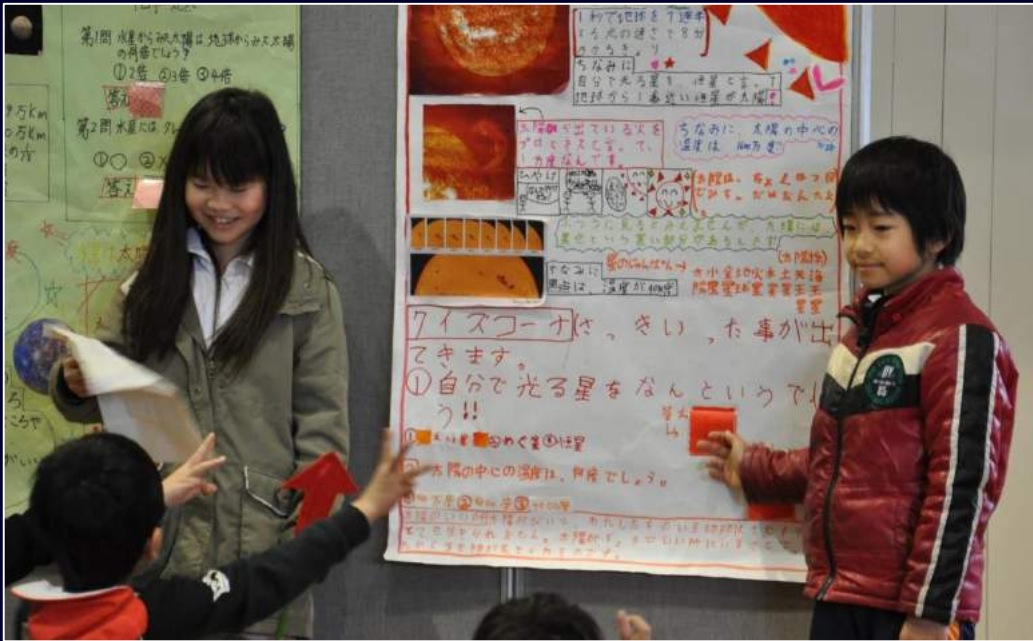
オリオン座を構成する星



探究のまとめ

学びの発信

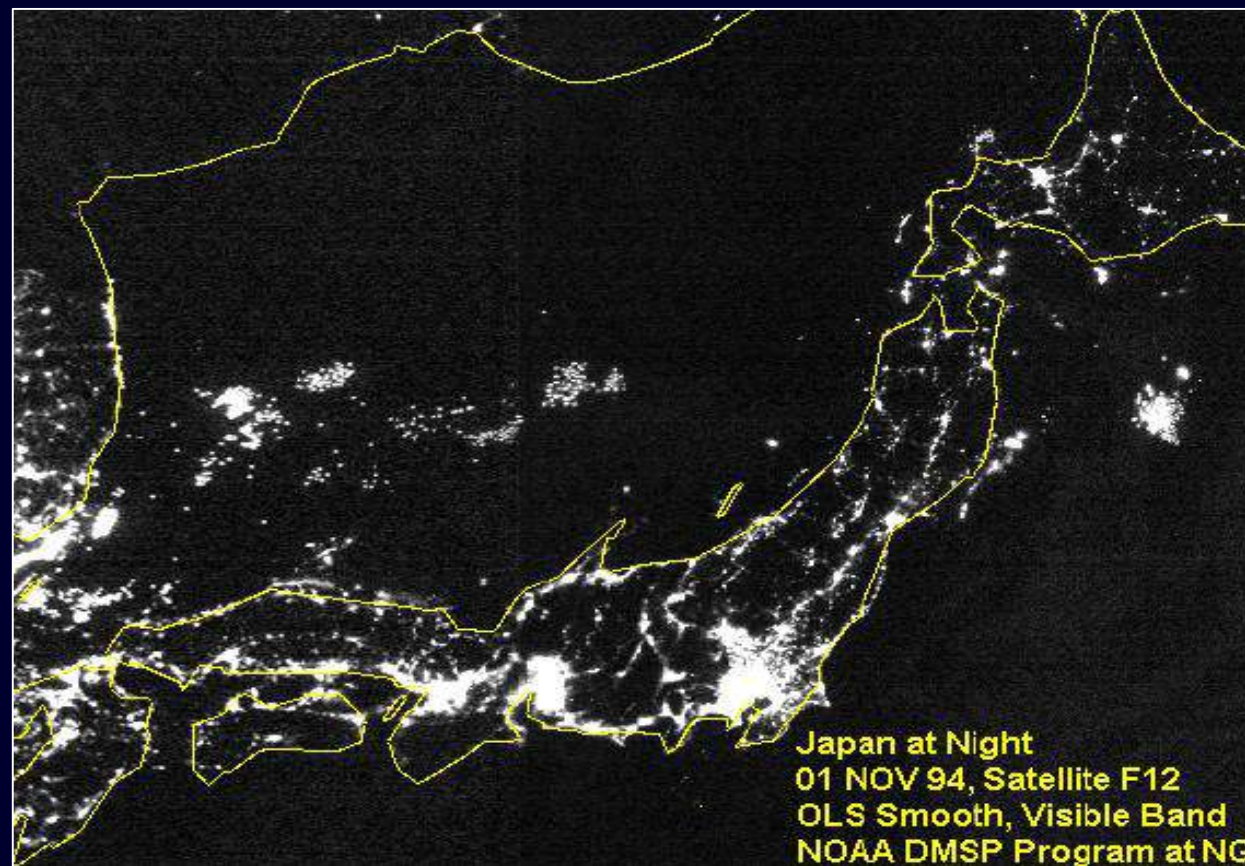
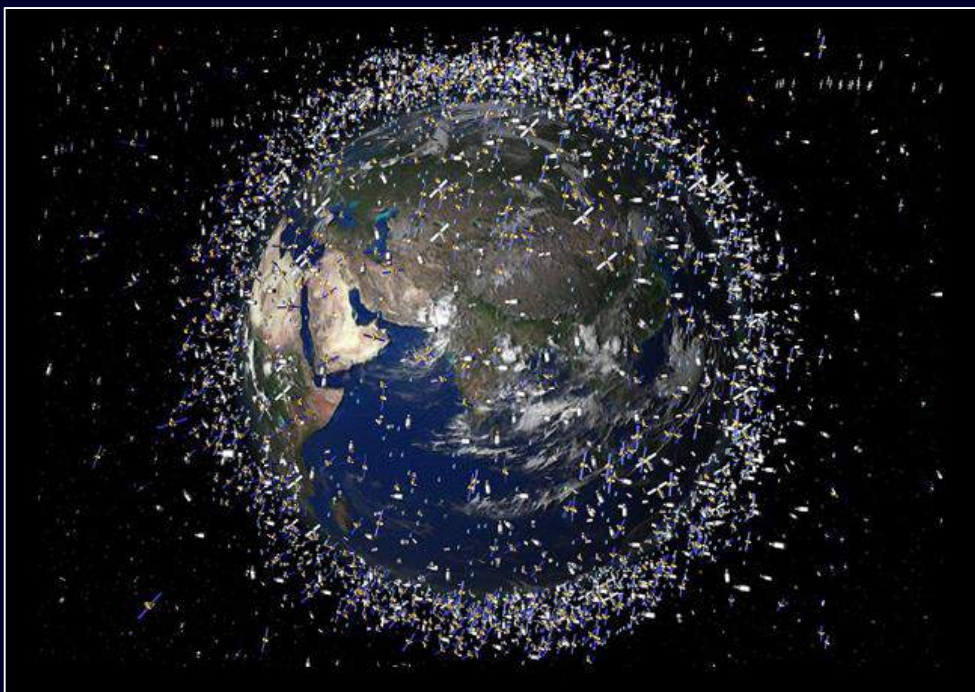
ポスターセッション



地球環境

ESDの視点

宇宙から見えてきた地球の姿



成果

- ・プラネタリウムを活用した観察視点の支援
- ・星空観察会での支援や情報の共有
- ・他者の見方や考え方との関わり合い

- ・専門的な知識と最先端の宇宙情報
- ・モデル作成

- ・ポスターセッション
- ・地球とのつながりという見方や考え方

関係付ける科学的思考力

宇宙空間概念

宇宙という自然
地球の今の姿

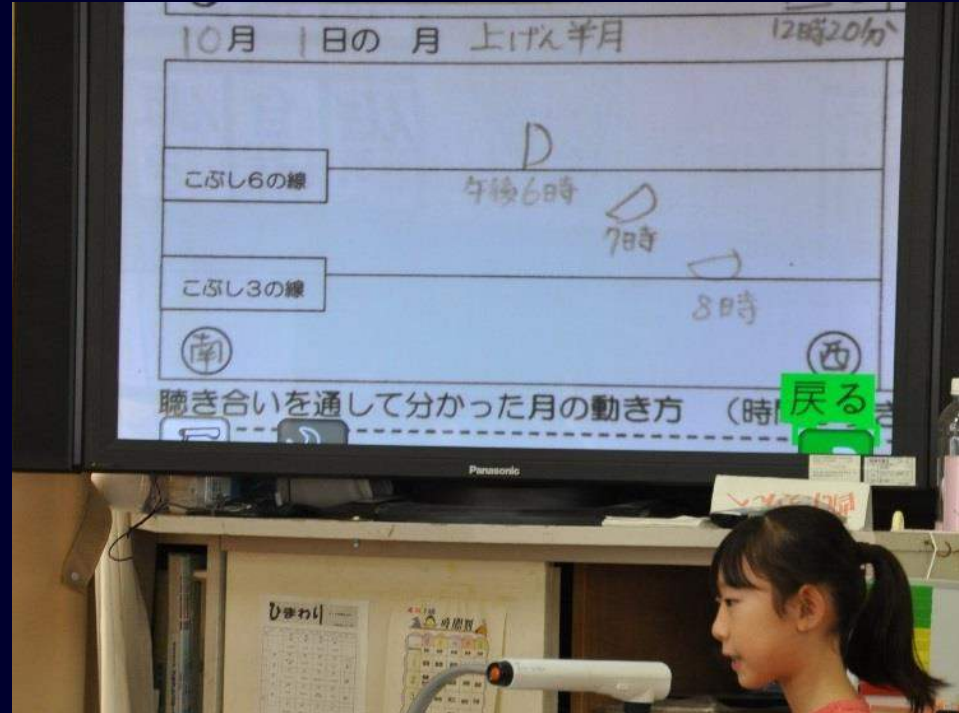
課題

- ・ 実感につながる教材教具の開発
- ・ 短期間の観察では情報が不足
- ・ 天候に左右される観察計画
- ・ 授業時間外の観察には限界

- ・ 教師のESDの視点のとらえ
- ・ 教科学習との関連の見通し
- ・ 教師の子供の見方や考え方の見取り
- ・ ESD学習の系統的な関連の見通し

理科学習のこれから

ESD学習のこれから



ご清聴ありがとうございました。

ユネスコスクール研修大会

E S D の活動を通して

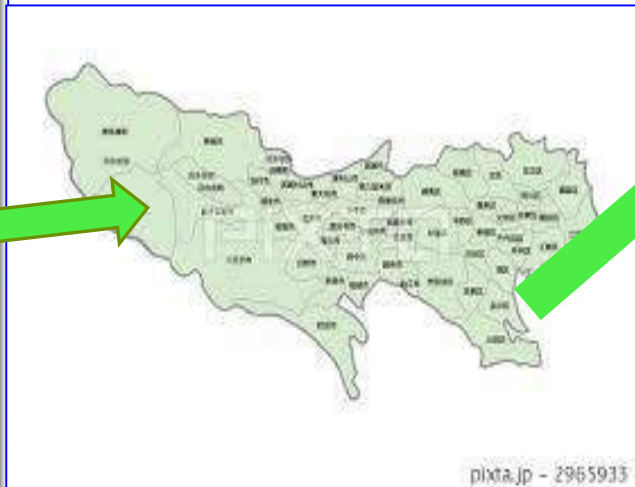
—自己肯定感を育む活動—

大田区立大森第六中学校

東京都大田区

2011年1月1日

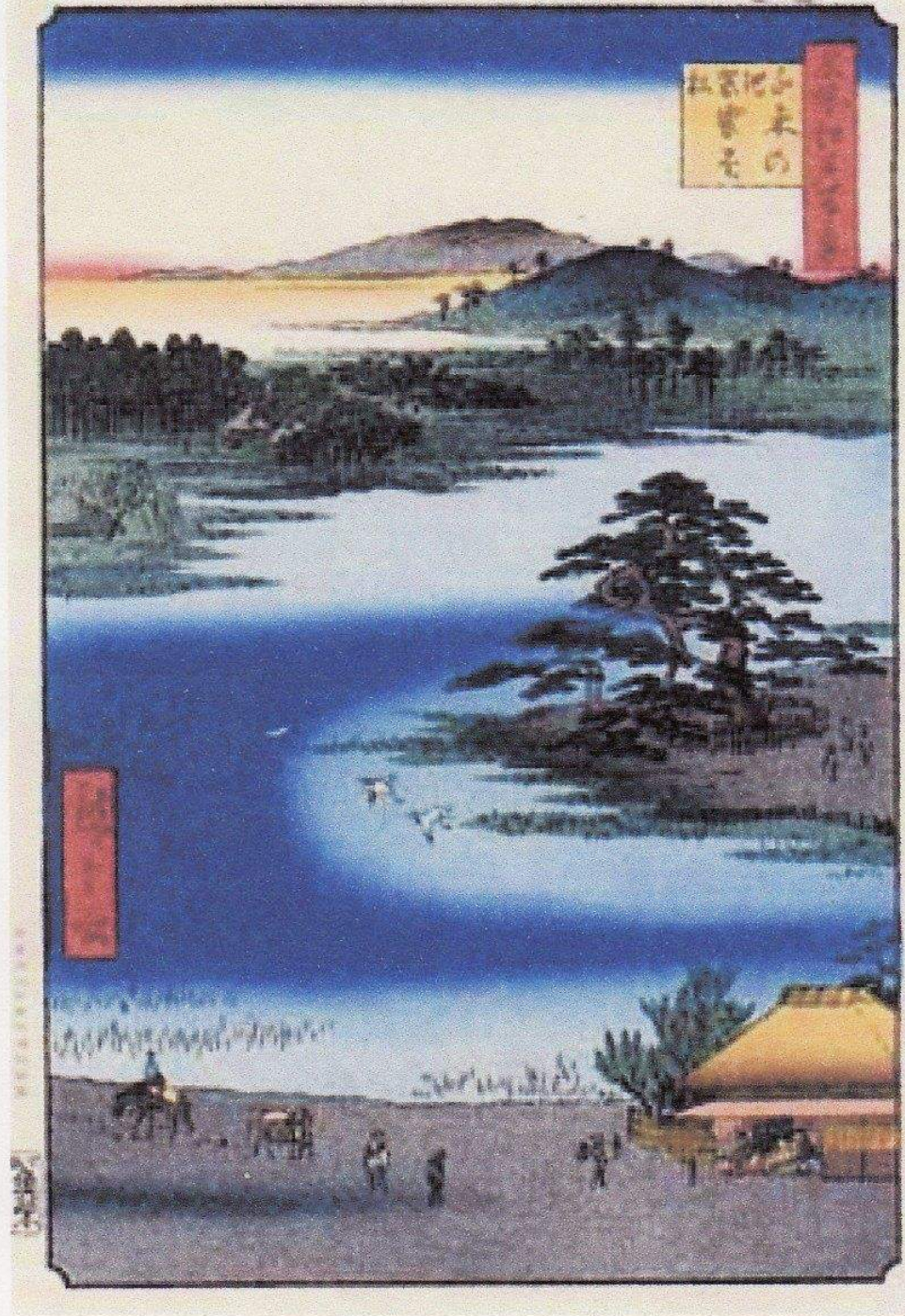
ユネスコスクール加盟



洗足池

浮世絵

江戸名所百景 千東の池袈裟掛松
歌川 広重〔初代〕
大田区立郷土博物館所蔵

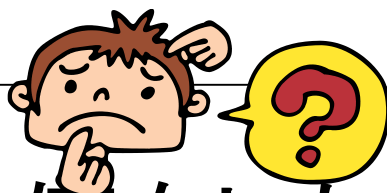




東京都大田区立大森第六中学校

本校の学習環境

学習意欲は
ある



でも、何をしたらいいの
かわからない

ユネスコスクールに加盟



学習指導要領で推進
持続発展教育（ESD）
E d u c a t i o n f o r
S u s t a i n a b l e
D e v e l o p m e n t

持続可能な社会の担い手を育む教育
20年～30年後の姿



生きる力、学びの本質

ユネスコスクール 六中

ユネスコスクール最優秀賞
環境教育農林水産大臣賞
東京都教育委員会表彰



ESDの成果

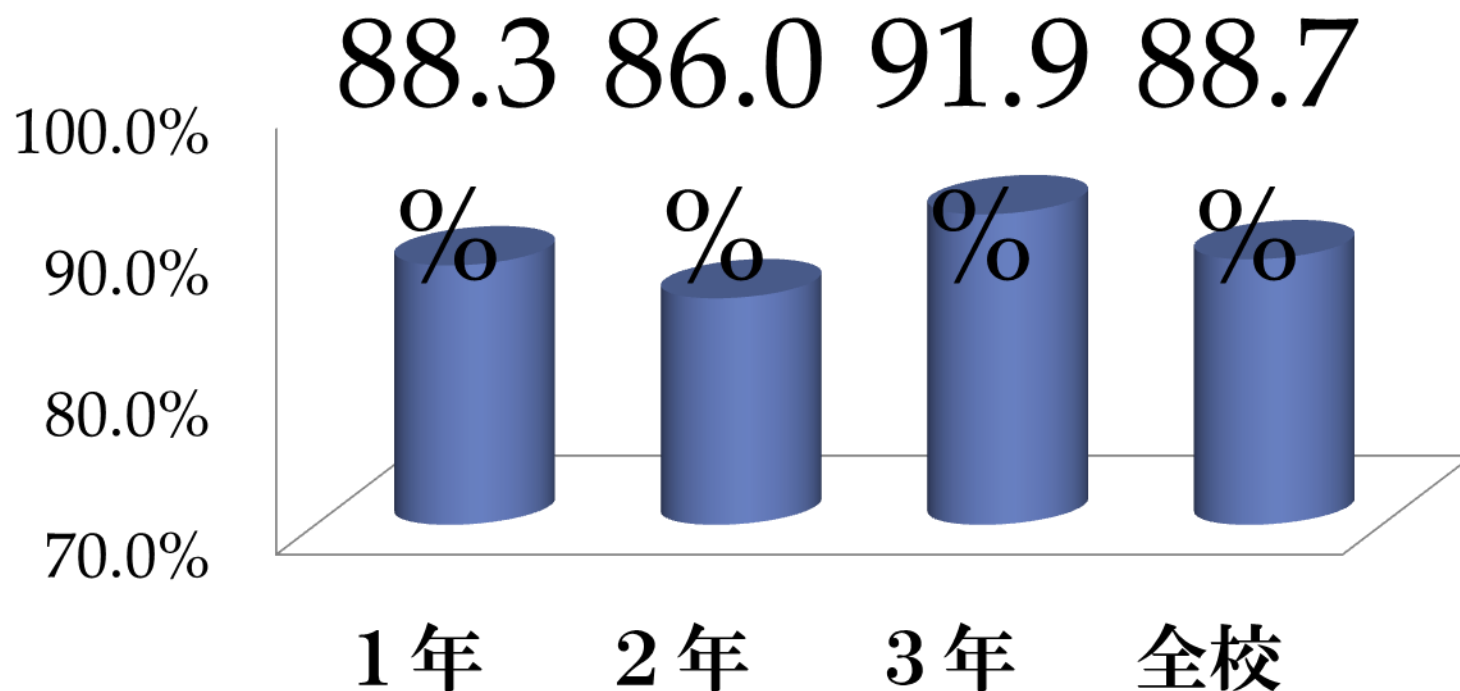
Research subject

六中の優れて
いること

○自己肯定感

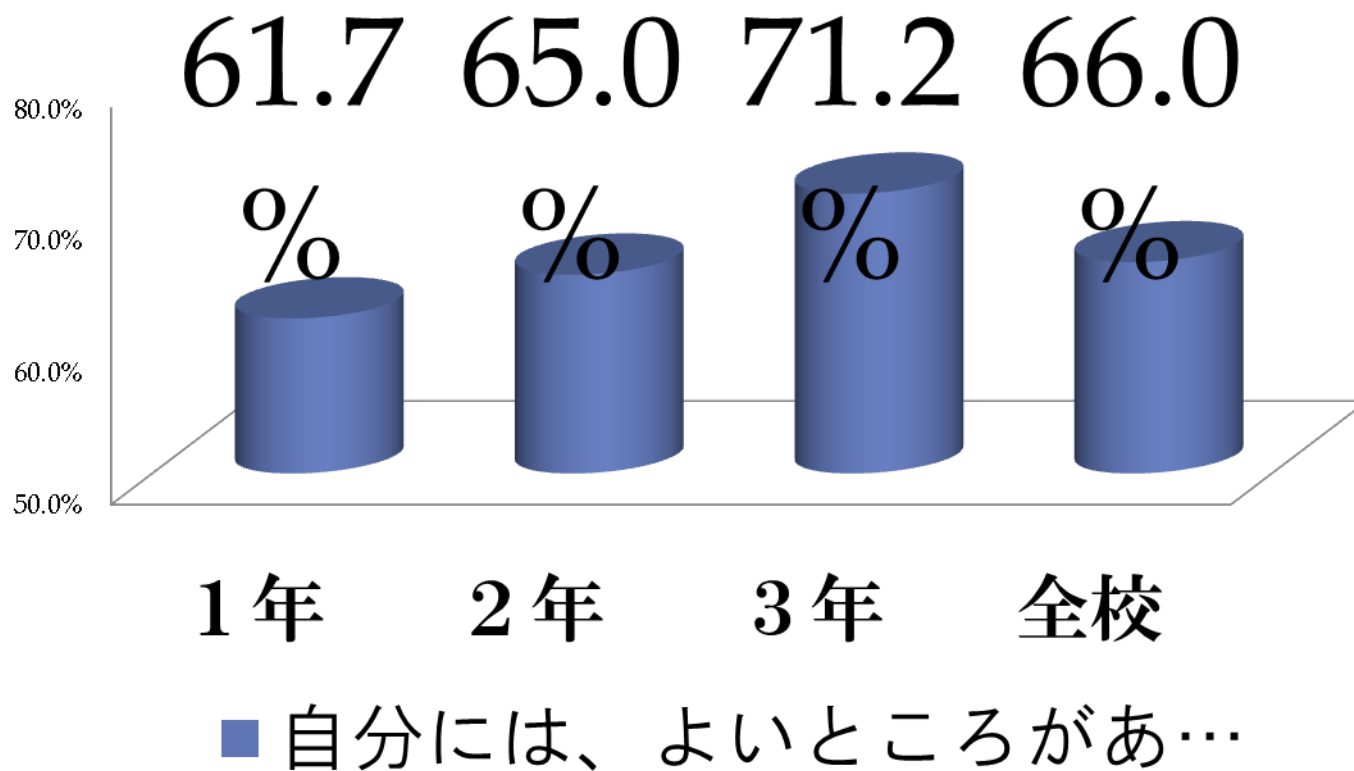
(文部科学省全国学力実態調査)

自己有用感の高まり

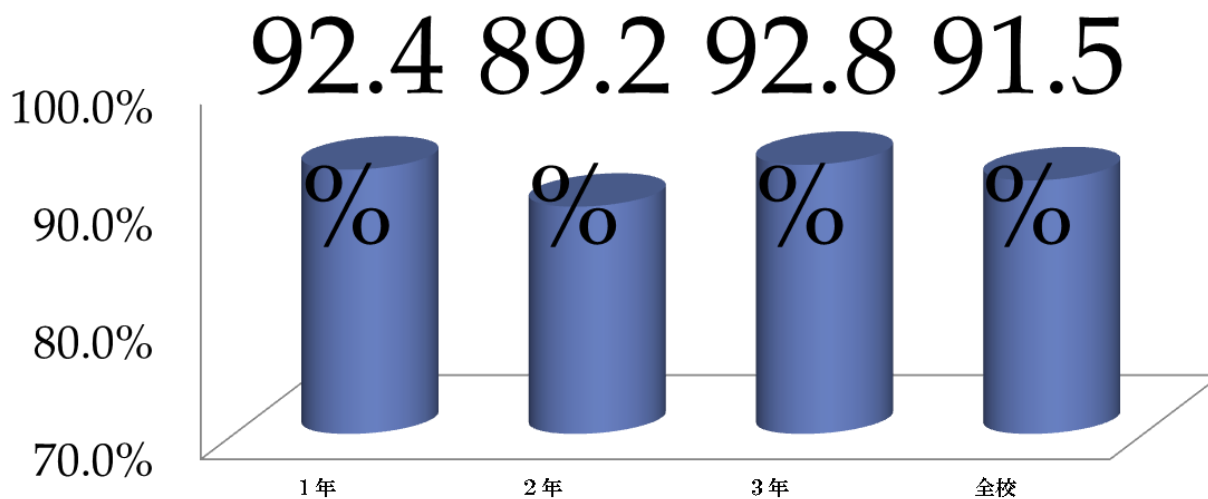


■ 学校行事を通して、自分は成長した。

自己肯定感の高まり

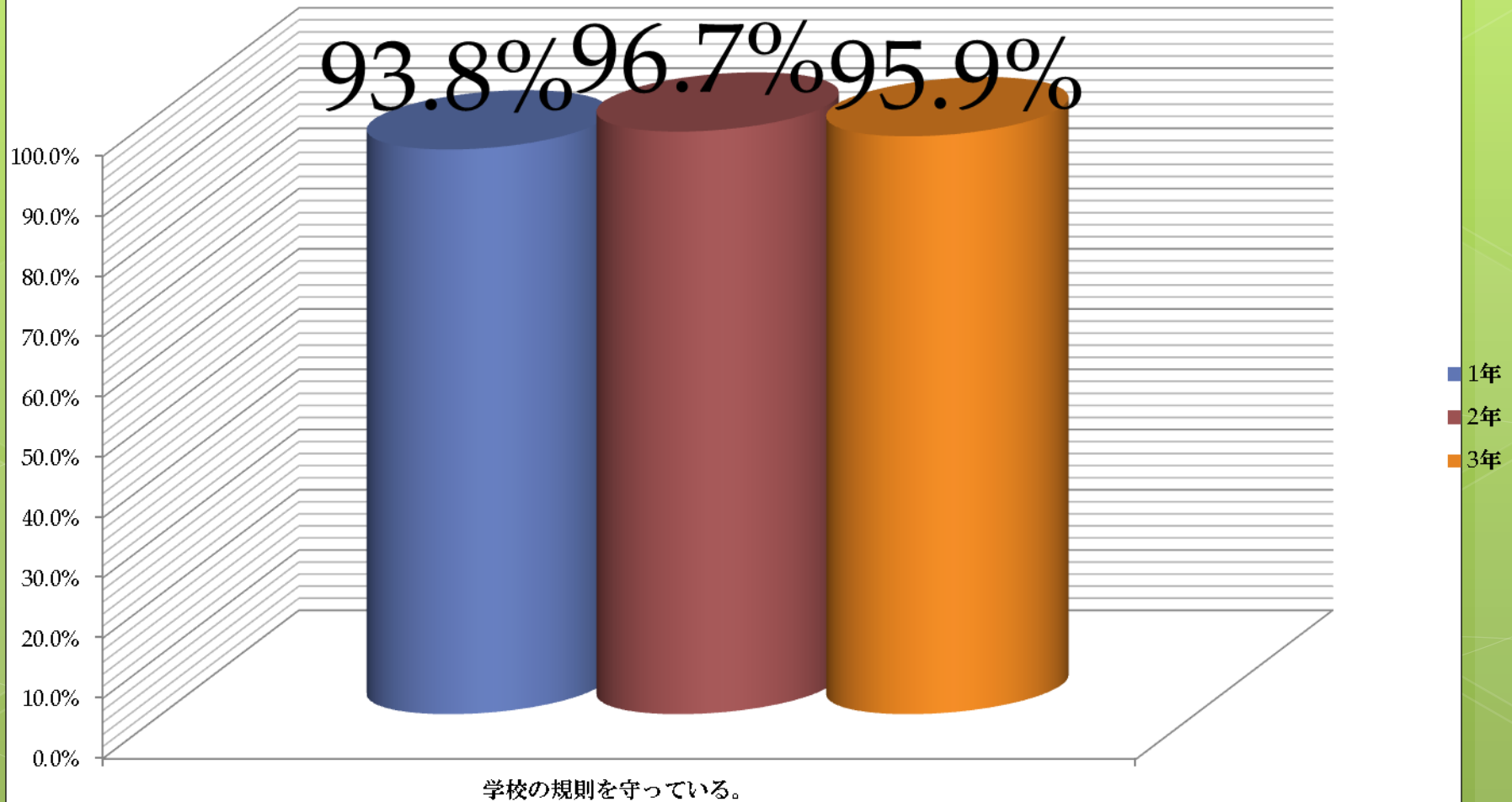


人を思いやる気持ち



- 人が困っているときは、進んで助けようと思う。

学校の規則を守っている。



六中の教育

キーコンピテンシー (OECD)

経済協力開発機構（パリ）の教育分野で必要であると考えられる問題解決能力

研究主題

ESDの推進及び 授業改善

ESDの意味

○ Education
for
Sustainable
Development

村長さんになって考えてください

○ 「環境的要因」

○ 「社会的要因」

○ 「経済的要因」

○ 「精神的要因」

○ 「文化的要因」



Happy Life and Sustainable Development

經濟

環境

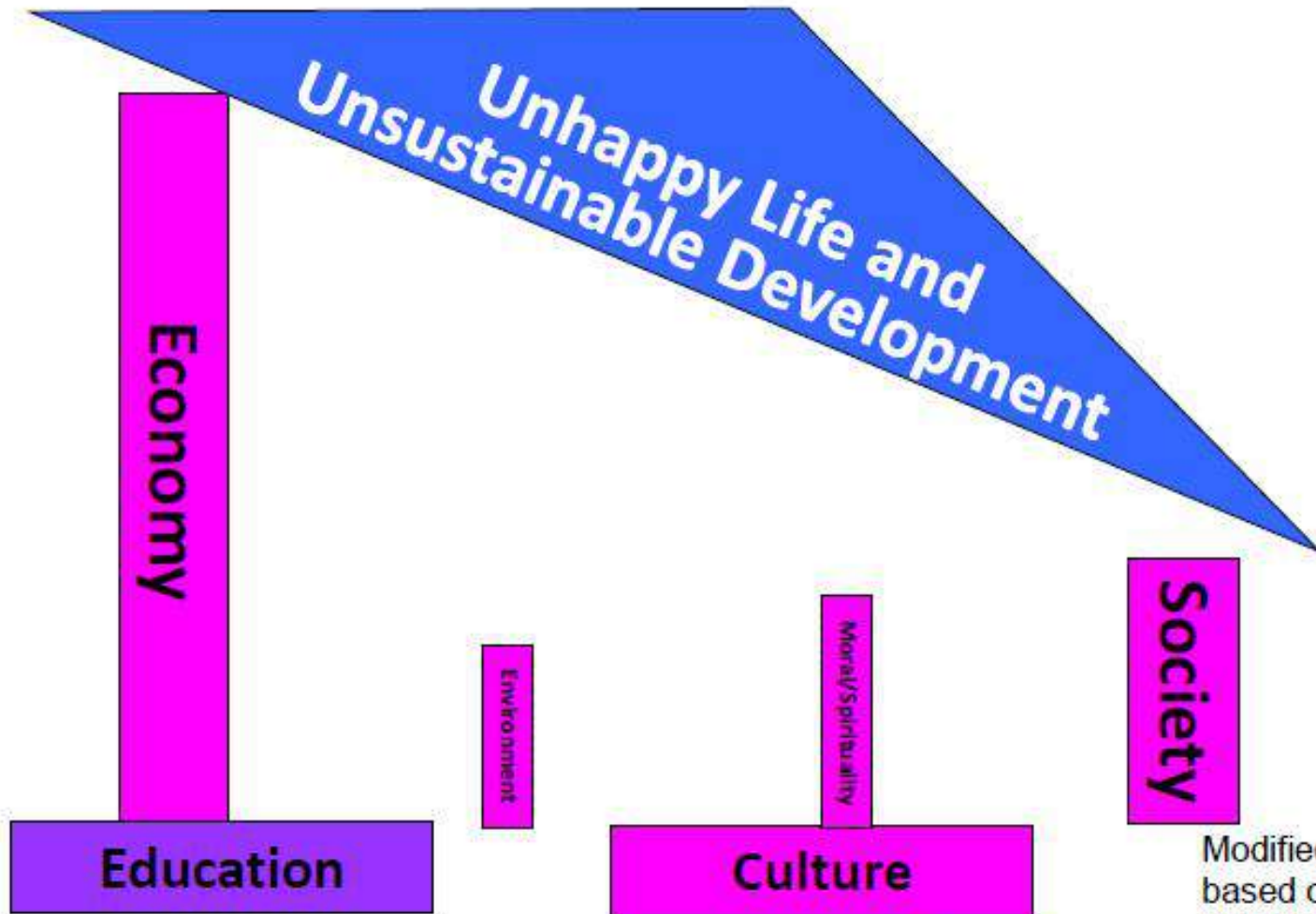
精神

社会

文化

教育の質

Modified by Miki Saito based on Sombath Somphone, 2007



Modified by Miki Saito
based on Sombath
Somphone, 2007

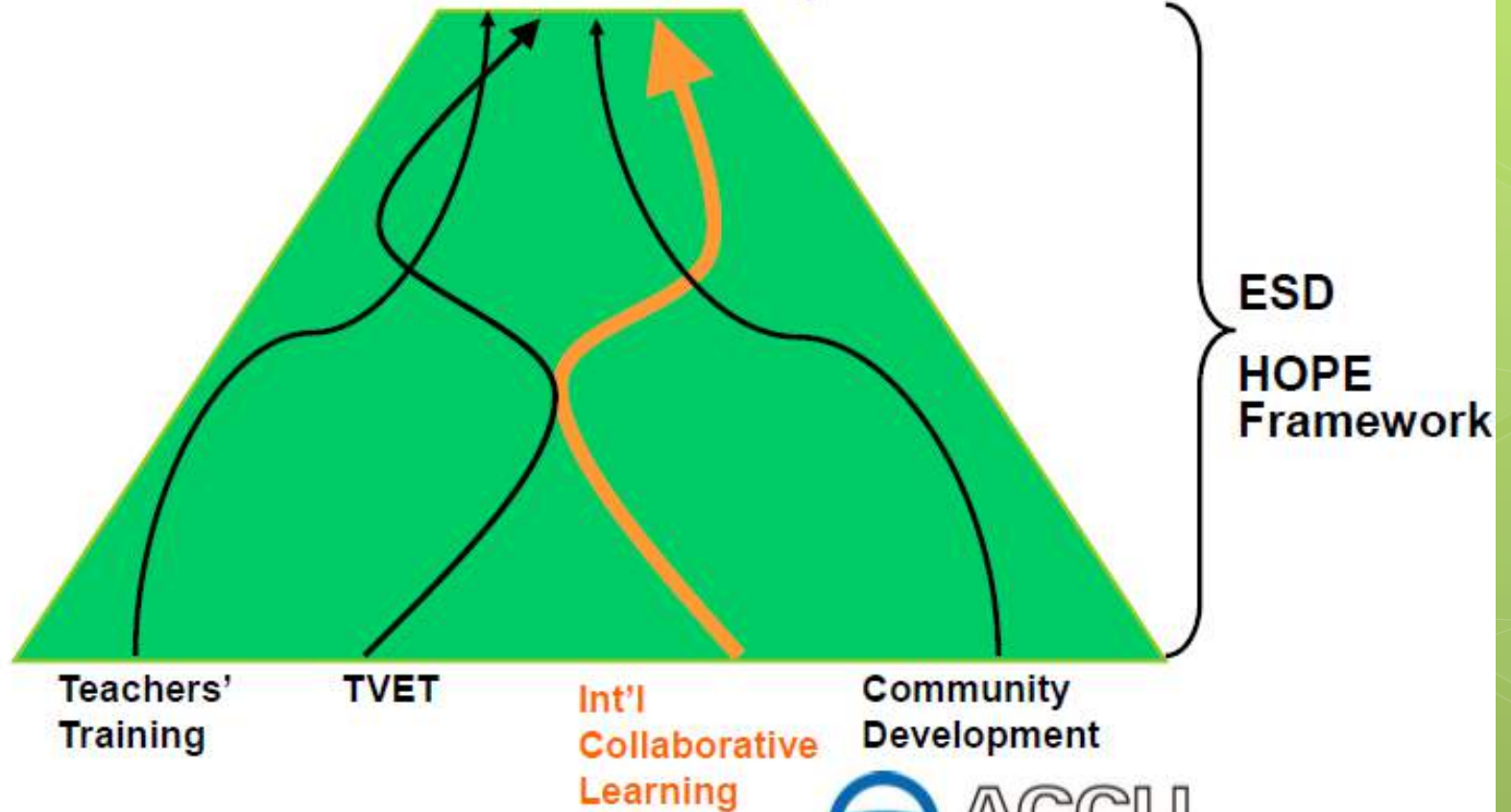


ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

Mt. Sustainable Development

Sustainable Development



ESDの概念

人を取り巻く環境に関する概念

- 多様性
- 相互性
- 有限性

人の意志・行動に関する概念

- 公平性
- 連続性
- 責任制

「学校における持続可能な発展のための教育に関する研究」
国立教育政策研究所

力と態度

「学校における持続可能な発展のための教育に関する研究」

国立教育政策研究所

- 批判的に考える力
- 未来を予測して計画を立てる力
- 多面的、総合的に考える力
- コミュニケーションを行う力
- 他者と協力する態度
- つながりを尊重する態度
- 進んで参加する態度

研究主題

○ E S D の推進 及び授業改善

授業改善の3分科会

○思考力

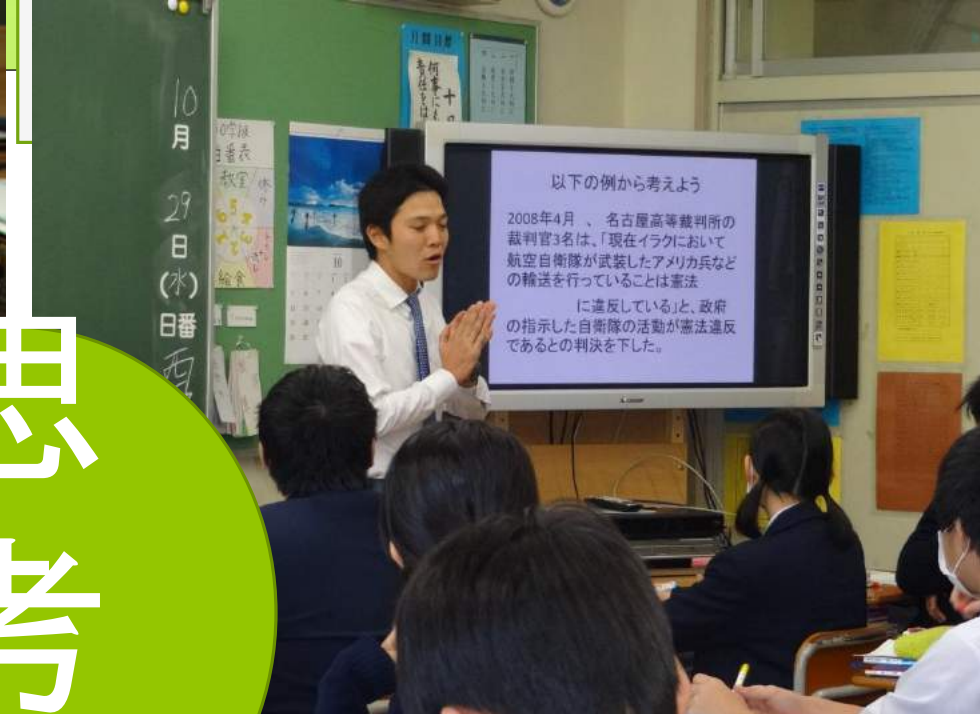
○コミュニケーション

○ESDの態度

ESDの推進及び 授業改善

未来につなぐ地域連携教育

「思考力分科会」



思考力



新しい学習指導要領における

育成すべき能力・資質

- ① 何を知っているか、何ができるか
(個別の知識・技能)
- ② 知っていること、できることをどう
使うか (思考力・判断力・表現力)
- ③ どのように社会・世界と関わり、
より良い人生を送るか
(人間性や、学びに向かう力等)

批判的に考える力

課題
解決

方法 1

方法 2

方法 3



課題の解決方法は、一つだけでないことを意識し、自分の考えや、他者の考えを協働して吟味し、より良い解決法を見いだしていく力

未来を予測して計画を立てる力

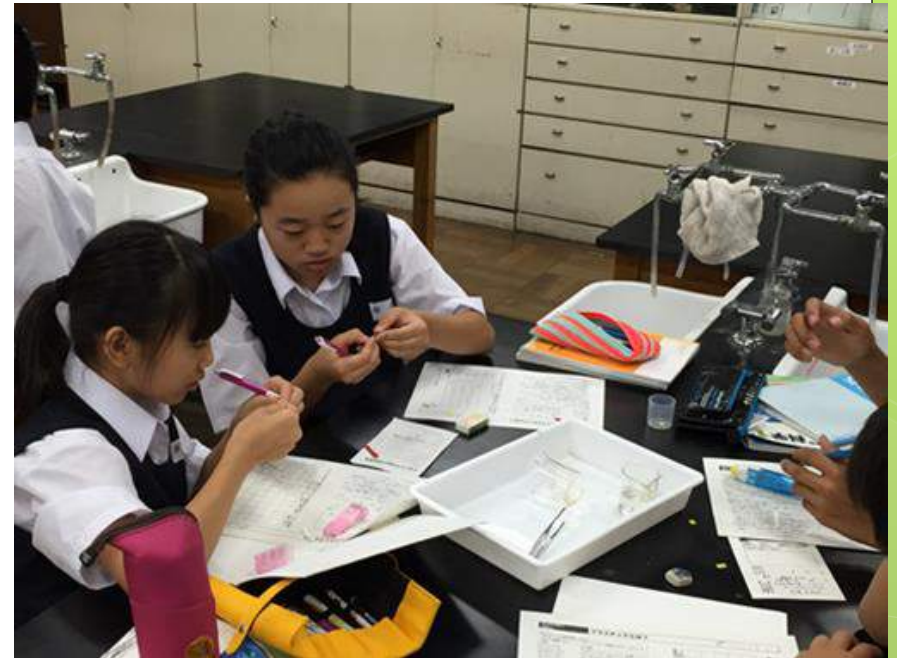
よりよい未来像

ステップ3

ステップ2

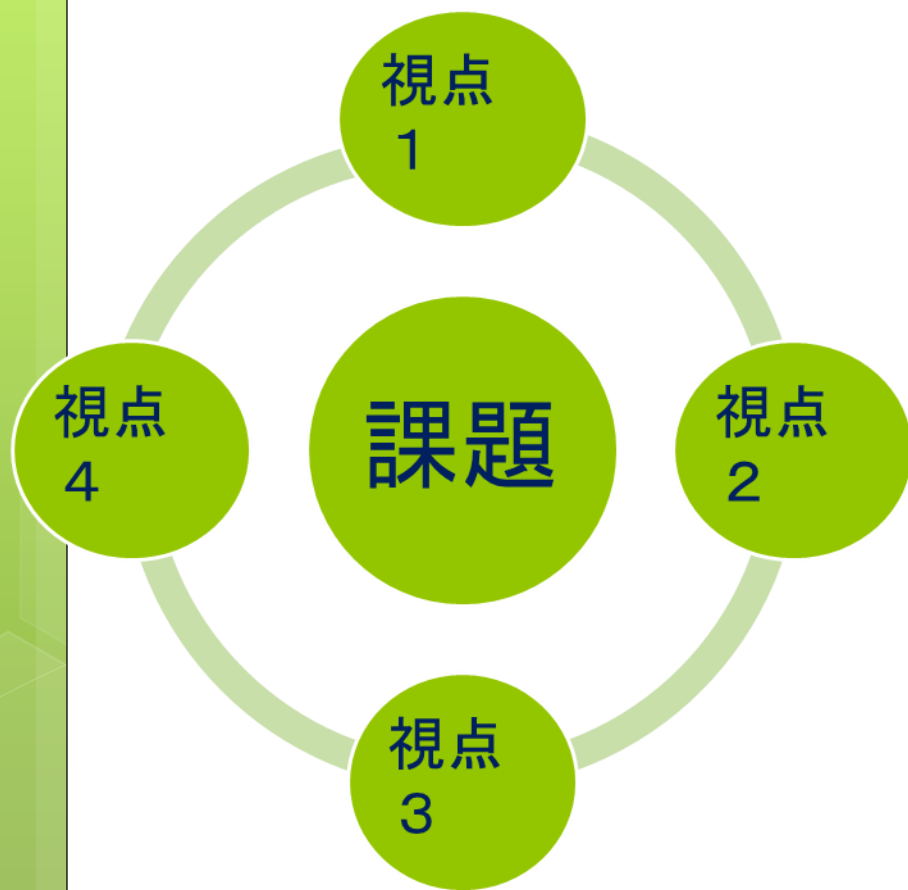
ステップ1

必要なスキル



より良い未来像を共有化し、それに向けてどのようなスキル、ステップが必要かを協働して考え実行していく力

多面的、総合的に考える力



情報を他者と共有しながら、互いの考えの共通点や相違点を理解し、共感したり、統合したりしながら課題を解決する力

成果

授業における焦点化

教科	単元	伸ばしたい力	授業内容・形態	留意点
理科	気体の性質	批判的に考える力(クリティカルシンキング)	<p>「水素と二酸化炭素はどちらが重いか」をテーマとし、グループワークを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験法をグループで話し合う ・図や文章で実験法を表現し発表、質疑、意見交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの話し合い、発表準備を重視する。
美術	季節の色	未来像を予想して計画を立てる力	<ul style="list-style-type: none"> ・季節を感じる色や形を想像し、平面構成のスケッチをする。 ・スケッチを元に、効率の良い作業手順を考える。 ・生徒相互でスケッチを鑑賞し合い、作品の良い点や改善点を考える。 ・計画的に丁寧に着彩し、平面構成を完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色の種類や数、構成の位置関係を考え、どの色から着彩を行うのが効率的かを理解させる。 ・自分以外の客観的な価値観により、より良い作品のヒントとする。
社会	平安時代の民衆の力	多面的・総合的に考える力	<p>尾張国郡司百姓等解文を題材に「平安時代に農民の権利は守られたのか」というテーマについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝廷が下した判決について予想しその根拠を、個人→4人 グループ→コの字形で発表、質疑、意見交流。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝廷、国司、農民の視点から意見をまとめるため、既習事項や時代背景の確認させる。

アクティブラーニングの取り組み

課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習

プロセス

- 問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程

インタラクション

- 情報との相互作用、他者との協働により、考えを深める対話的な学習

リフレクション

- 自らの学習活動を振り返って次につなげる



今後の課題

E S D カレンダ－での位置づけ
どの思考力をどの単元で
教育課程全体での見通し
アクティブラーニングの手法の開発
「思考力」の評価法の検討

ESDの推進及び
授業改善
未来につなぐ地域連携教育

「コミュニケーション分科会」



コミュニケーション



多様な価値観、異なる文化や歴史
に立脚する人々と生きる

「多文化共生」



コミュニケーション
を行う力

課題解決

コミュニケーションを行う力

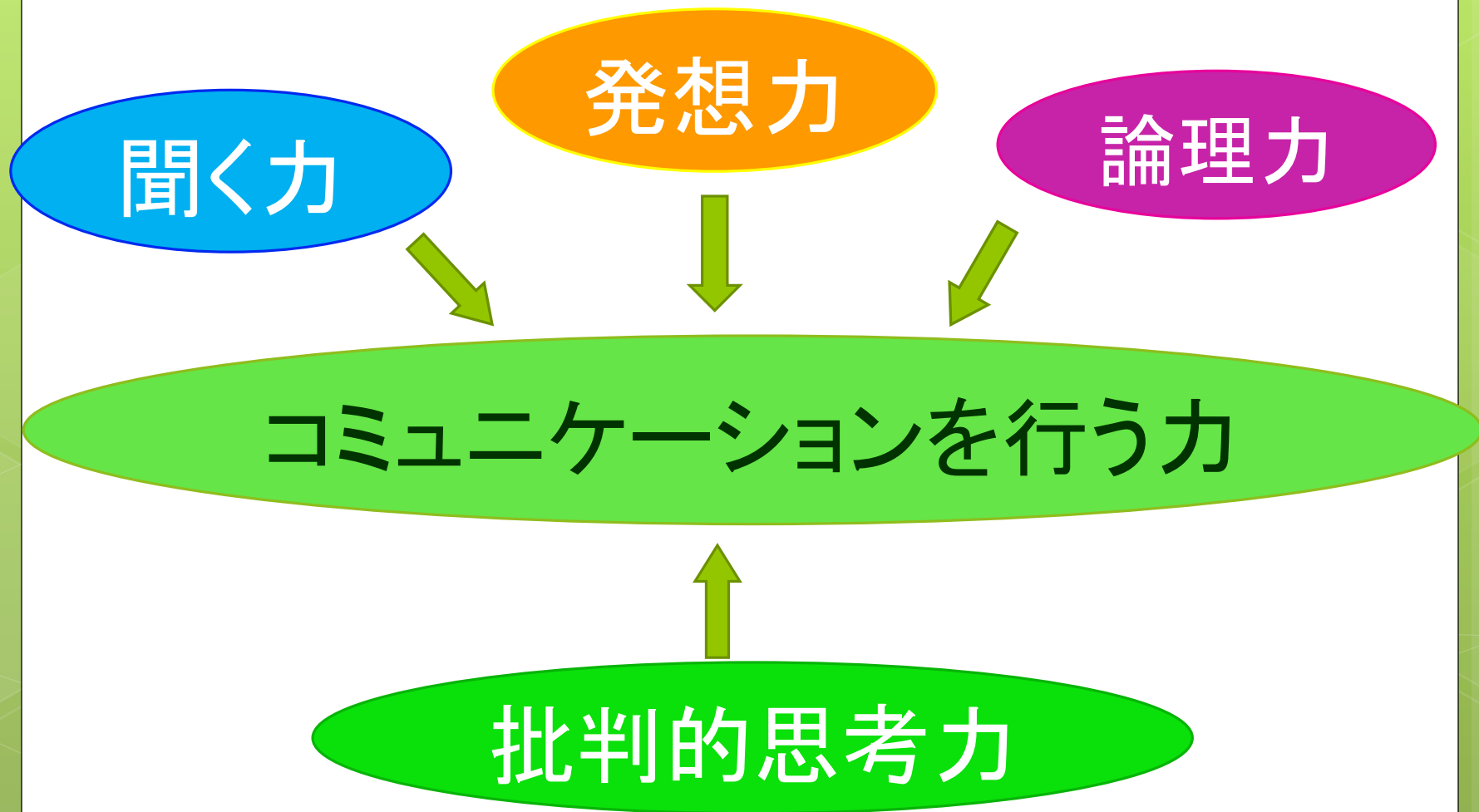
聞く力

発想力

論理力

コミュニケーションを行う力

批判的思考力



5つの力を育てるために

- 様々な形態

討論会、ディベート、ゲーム、スピーチ

ペア活動、グループディスカッション

- グループの人数

2人、4人、6人 など

- 書くことも重視

授業の様子

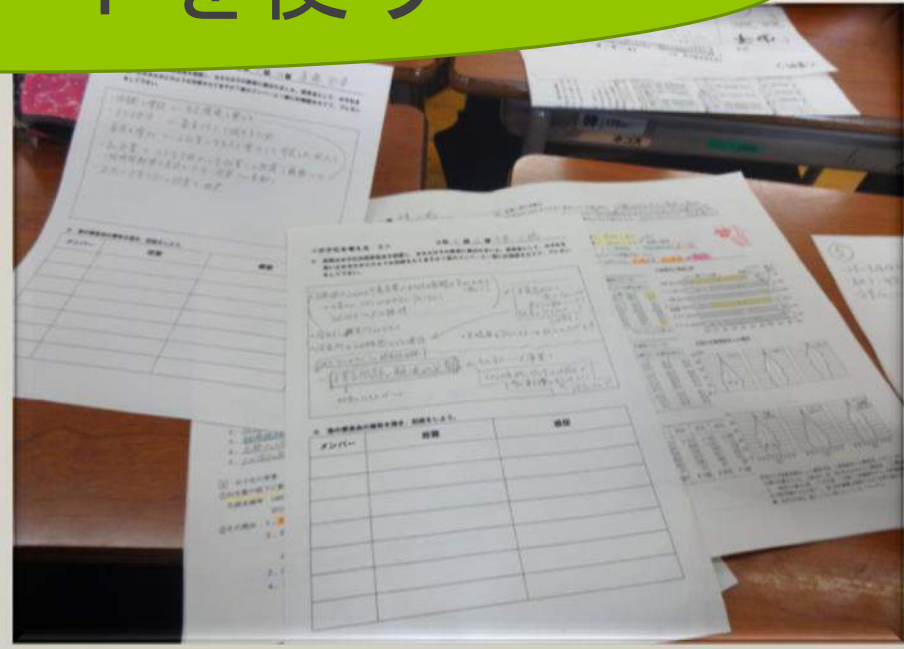


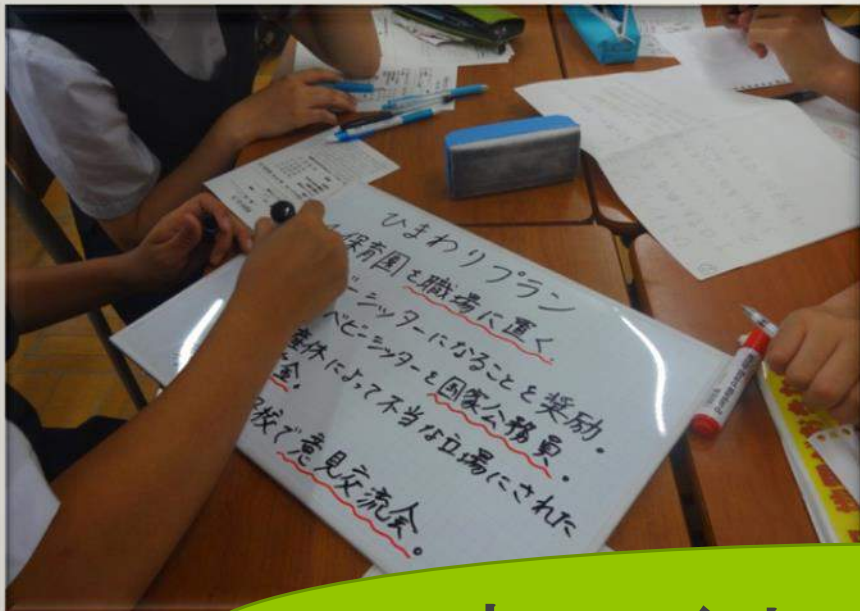
4人グループが有効





ワークシートを使う





ホワイトボードが有効



成果

- 発想力、批判的思考の向上
- 表現力の向上
- 人間関係の構築
- 自己肯定感、達成感



コミュニケーションをとる楽しさ→自信
次につながる

今後の課題

- 継続
- 興味関心のあるテーマ
- 全ての授業、行事等で取り組む

コミュニケーション → 「考える」機会を増やし、他者の様々な考えを聞くことで自分の考えを深めることができる。

ESDの推進及び
授業改善

未来につなぐ地域連携教育

「ESDの態度分科会」



ESDの態度



ESDの態度分科会

- 持続可能な担い手として必要な資質
 - ・ 他者と協力する態度
 - ・ つながりを尊重する態度
 - ・ 進んで参加する態度

「求める生徒の理想像」

- 異文化を拒まない
- 命を大切にす
- 積極的に関わる

ESDの

態度分科会

授業改善のテーマ

「平和」

「平和」に関する概念の共通理解



ESDクロスカリキュラム「平和」

時	特別活動	教科						
		総合的な学習の時間	道徳	国語	社会	理科	英語	芸術
本時	→	「平和について考える」授業の導入として、話し合い活動を通して、						
4月		調べ学習①「過去の戦争の歴史を調べる」	日本人の自覚を持ち世界に貢献する 世界との関わり 異文化理解	批評の言葉をためる			エネルギーの変換	身近な環境 入内調査
5月	修学旅行	調べ学習②「過去の戦争の歴史を調べる」		自分の魅力を伝えよう	世界恐慌とブロック経済		命の尊さ「生殖」	
		「調べ学習」を発表する。	「海と空－樺野の人々」		日中全面戦争			日本の文化 紹介しよう
		戦争体験した人の話を聞く。						
6月	運動会 開校記念 講演会	最近の世界の動きから考える。新聞を使って①	仲間との協調、自分の役割と責任		第二次世界大戦			
7月		最近の世界の動きから考える。新聞を使って②		「挨拶」	戦争の終結 占領と日本の民主化			
8月		「戦争のない世界」を築くにはどうしていくことが大切かを考える。①						
9月		「戦争のない世界」を築くには、どうしていくことが大切かを考える。②	人間の強さや気高さを信じ生きる 「あなたはどうか考え、行動しよう」	新聞記事まとめ 新聞 状況を読む	日本国憲法 「国民主権」 「平和主義」			Energy environ

「グローバル化」社会で起きている出来事を読み解く、価値観を育てる。

ESDの態度分科会 取り組みの成果

① 生徒に考えさせたい

「持続発展的な平和な世界」のイメージ



ESDの態度分科会 取り組みの成果

② ユネスコスクールとしての 行事の理論づけ



E S D の態度分科会 取り組みの成果



ESDの態度分科会 今後の課題

- ①「平和」に関する概念
規定の精査
- ②ユネスコスクール以外での実践
- ③クロスカリキュラムの完成

生徒の変容の確認



どのような態度を . . .

生徒に身に付けさせるか

環境教育

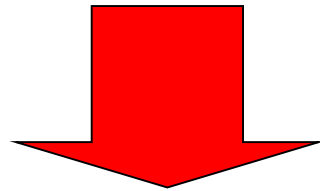
Environmental education

ボランティア活動

○農援隊の発足

農援隊の由来

(学校を) よくし隊



(幕末の志士 坂本竜馬)

農援隊

現在170名が登録

全校生徒の活動

○始業前の活動

毎週金曜日は、洗足池清掃



始業前に落ち葉はき

勝海舟夫婦のお墓





ミミズコンポスト



夏休み

キレイキレイ活動



小中一貫洗足池清掃



小中自然講習会 ボート教室



人と環境

グリーンカーテン



ミミズコンポストの
腐葉土で、
ゴーヤグリーン
カーテンづくり



全校生徒で育てた
ゴーヤでつくった
ゴーヤ入り
かき揚げうどん

人と自然

・ホタル復活プロジェクト

H22度 水生植物園完成



水生植物園の造園



第1回ホタル放流式

ホタルの 幼虫放流式



人と自然

○ホタル復活プロジェクト



昨年度の放流の様子
地域の方が約200名

人と自然

- 2年連続、ホタルは100匹以上が光った



人と自然

- ホタル自生

昨年の幼虫が自生して、光を放つ。

3年目にして自生成功！

さらに、
自然の力で
水質浄化

人と自然



東急電鉄みどりリンク

いかだづくり イグサ ミツガシワ カヤツリグサ フトイ カサスゲ
ハナショウブ ミント アサザ ミソハギ 空芯菜

人と自然



持続可能な社会の担い手

大岡山駅前花壇





大岡山駅前花壇

奉仕

• 中学生の活動

関心

• 地域の関心

環境

• ポイ捨てが減った

この功績が実を結び

○東京都都市緑化基金

助成認定校

平成25年度～27年度

地域の祭に参加



江戸伝統野菜馬込三寸人参



震災による写真の 洗浄プロジェクト



身についてきた ボランティア活動

達成感

自己有用感・
自己肯定感

「ありがとう」
の感謝の声

防災教育

Education for disaster prevention



地域貢献

学校避難所開設訓練

逃げ込む場所から、

災害に立ち向かえる場所に

まちなか点検

11自治会、
消防署、
消防団と共に



大田区学校防災拠点

整備事業モデル校



災害用電話設置



仮設トイレの設置



炊き出し



学校避難所開設

救命技能認定証 取得



國際交流教育

International
understanding
education



インドネシア教育視察団来校



モンゴルから
教員が本校に視察





中国招聘プログラム

中国政府より招待

●本校から

北京、上海

貴陽へ視察



スペインの留学生から 折り紙ハウスを寄贈

今年度、ベラルーシより来校

- 国際ユース作文「地球市民としての役割」
内閣総理大臣賞受賞 Kirill Mayanskiy 君



1月20日（火） 韓国招聘プログラム



- ACCUユネスコアジア文化センターによる
招聘プログラム

9 : 3 0 来校

3時間目 授業視察

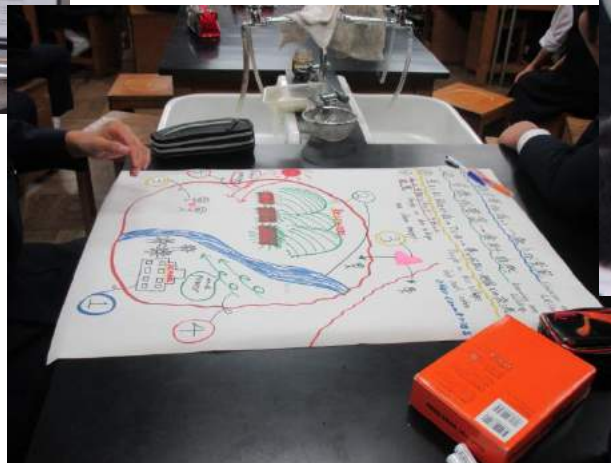
4時間目 全体交流会

5時間目 韓国教員による授業

6時間目 お別れ会

国際協働プロジェクト

- ACCU主催「食」をテーマに、インドと交流



平和維持活動

Peace-keeping operations

防空壕保存工事完成記念行事

●平和維持活動



平和の歌



学校行事

School event

学校行事によるESD

- 責任感 (リーダーシップ)
- 協調性 (コミュニケーション)
- 団結力 (他者理解)



3年修学旅行（東北）



世界遺産平泉中尊寺



被災者語り部の会



平成25年度修学旅行
花巻市公民館にて

● 運動会



● 文化祭



○ 学習成果発表会



上野文部科学大臣
政務官



文部科学大臣政務官の講評

○六中は

地域と地域、世界と世界
とのつながりを育んでいる

どの地域の人よりもどの
中学校よりも、つながりの大
切さを学ぶことができている

文部科学大臣政務官の講評

- 地域や先生、生徒が一体となり、行動している学校はほかにない
- 世界のことが教えられる学校として紹介し、発信していく

特別活動

部活動の活躍

- 吹奏楽部

地域で活躍！

- 自然科学部

最優秀賞

持続可能な社会

リーダーとして

地域を巻き込んだ

環境維持活動

● 地域とのつながりが

より一層深まった

すべての教室に 新聞を

- 6紙各4部計**24**部が毎朝学校に！
- 世界のトピックス

教師が毎月選んだ記事を全校
で聞き取り、感想を書く

世界の情勢を知る
批判的思考力を育む
表現力をつける

進路指導

- 大学入試の大きな変化

国立大学の推薦入試

ボランティア活動

コミュニケーション能力

進路指導

- 都立高校の躍進
集団討論の選考
今年度春卒業生
日比谷高校へ 3 名
その他難関校

国連（ユネスコ）の世界会議が 2014年秋に愛知・名古屋で開催！

国連が定めた「持続可能な開発のための教育（E S D）の10年」の最終年にあたる2014年に、10年間のE S Dの取組の成果などを取りまとめる最終年会合が、愛知・名古屋で開催されます。

開催地として、2005年の愛知万博、2010年のCOP10の開催経験を活かして、会議の円滑な運営をサポートするとともに、会議の開催をきっかけに、E S Dの普及啓発とこの地域の未来を担う人づくりを積極的に行っていきます。

「国連E S Dの10年」最終年会合の概要

- 開催時期：2014年秋
- 開催場所：愛知・名古屋
- 主催：国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）、日本政府
- 参加規模：1,000人規模（ユネスコ加盟国は195カ国 ※2012年5月現在）
- 内容：各国の10年間のE S Dに関する取組の報告や取りまとめなど
- 形式：閣僚級会合、全体会合、分科会など

※このほかに、岡山市では各種ステークホルダー（国連機関、研究者、学校関係者、民間企業、NPOなど）の会合が開催されます。



名古屋国際会議場（会場予定地）

小中一貫教育



小中一貫教育 教員研修

国語 算数数学 理科

社会科 保健体育

外国語活動・英語

キャリア教育 道徳

生活指導

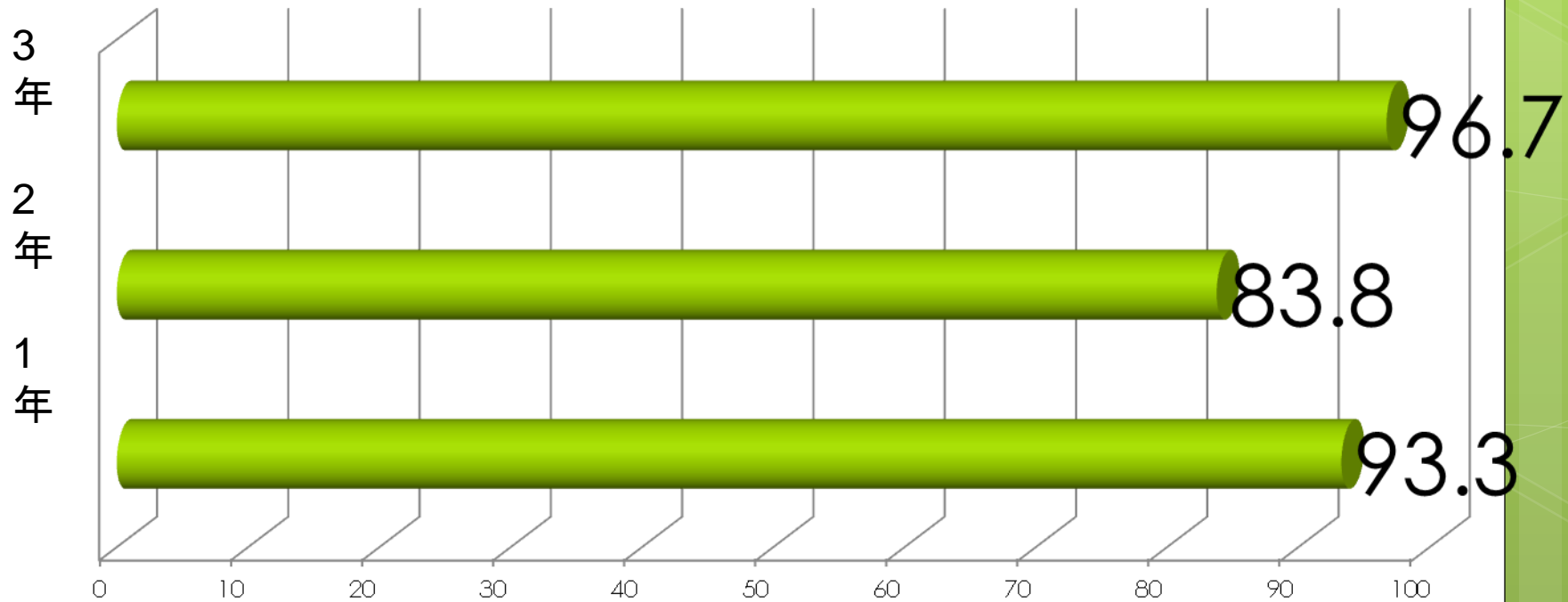
以上9分科会

成果と課題

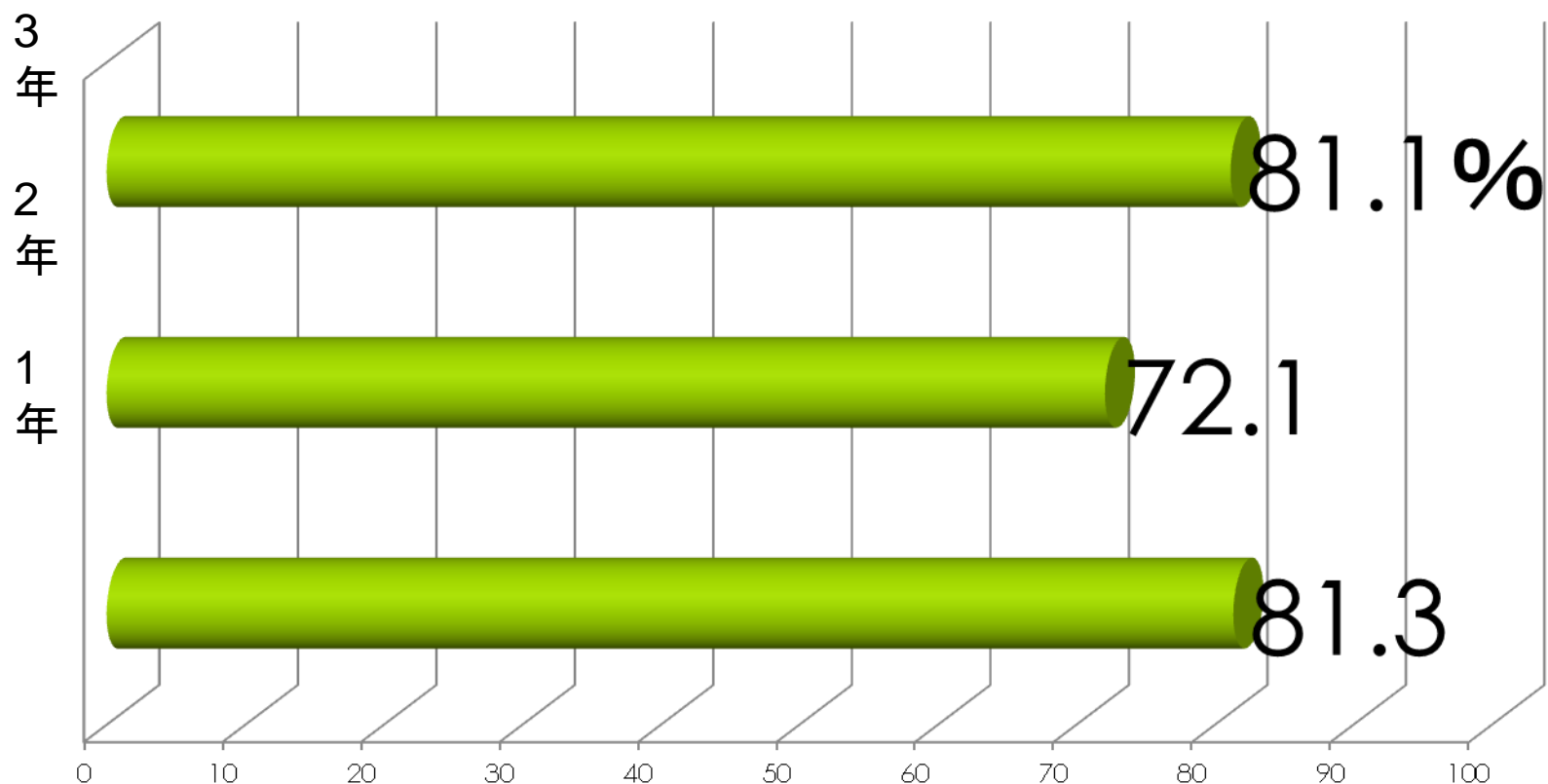
研究の成果と課題

- 生徒アンケートの結果から80%以上の生徒が、肯定的な回答
- ・友人への思いやりと批判力
- ・未来を予測して、計画を立てる力
- ・危険を察知して、事件・事故を回避する力
- ・多様な価値観を認める
- ・**他者理解したうえでのコミュニケーション力**
- ・他の人と協力・協働する態度
- ・手段における自分の役割・責任感
- ・社会の情報に対する批判力
- ・自己反省し、改めようとする態度
- ・多様な価値観をもった人たちとのつながりを尊重する態度
- ・自然環境とのかかわりを大切にする態度
- ・**ボランティアに積極的に参加する態度・伝統や文化を重んじる態度**

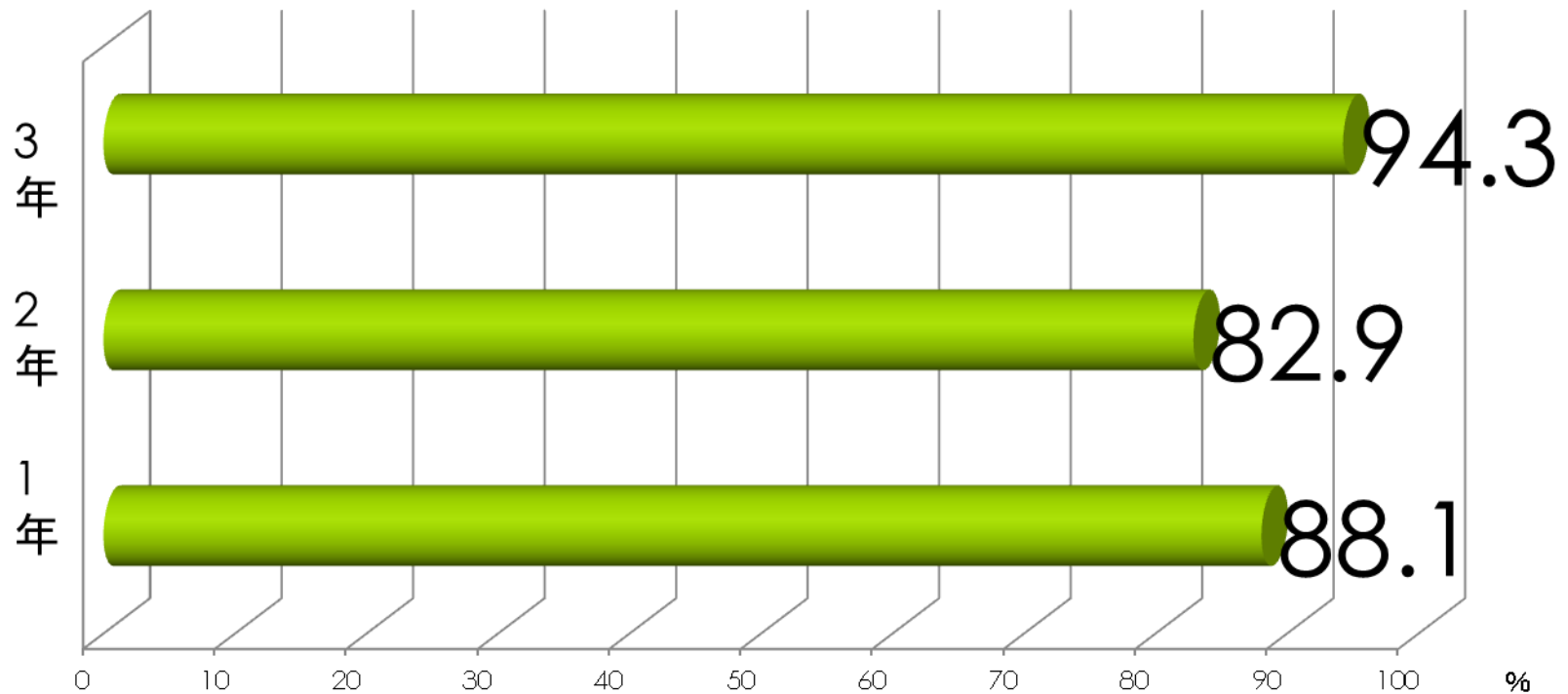
自分の考えを伝えたり、他の人の考えをよく聞いて、自分の考えに人の考えを取り入れていくことは大切なことだと思う



地域でボランティアに参加し、地域とつながりを持ちたいと思う

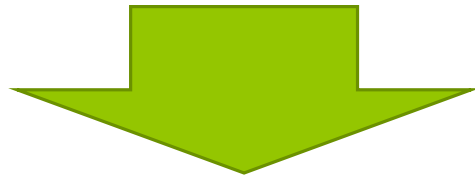


他の人と協力・協働して物事を進めることができる



研究の成果と課題

授業改善



アクティブラーニングの
導入

研究の成果

3つの分科会

- 思考力分科会
- コミュニケーション分科会
- ESDで育てる態度分科会

課題設定



I PROCESS (プロセス)



II INTERACTIVE

(相互交流)



III REFLECTION



課題

- アクティブラーニングの導入を図るため、年間の指導計画を検討
- 話し合い学習や協働学習は、思考が深まり、発展的な学習には効果があるが、基本的事項の定着との併用が必要

まだまだつづく

ご清聴ありがとうございました

平成27年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」
ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2015

復興教育からのESD ～新教育プログラムへの挑戦～

福島県立ふたば未来学園高等学校
企画・研究開発部
對馬俊晴

2015.11.1.Sun

発表内容

- 1 安達高校
「復興教育」からのESD
- 2 ふたば未来学園高校
スーパーグローバルハイスクールとESD
- 3 「解のない事象」への挑戦としてのESD

自然科学部から学校全体へ 2012年4月～(震災2年目)

① 現状を分析し理解する。

放射性物質と放射線への正しい理解を図る。

② 将来像を描く。

持続可能な社会にするための学習をする。

③ 現状を改善する行動をする。

価値観や行動様式を変化させ、学んだことを積極的に発信する。

ユネスコスクール (ASPnet)

復興への課題に学ぶ



パソコンを使って発表の準備をする生徒たち(8日、二本松市の安達高校で)

「風評被害」「エネルギー」……

安達高

県内初「ユネスコスクール」に

震災からの復興や未来のあり方について考える「復興教育」に取り組み県立安達高校(二本松市郭内)が、国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)の「ユネスコスクール」に認定された。県内の学校が認定されたのは初めて。20日に認定書の授与が行われ、生徒が1年間の学習の成果を教育関係者らの前で発表する。

「ネギの価格が1ポ・増当たり22円下がっているね」「もっと字を大きくした方が見やすいんじゃない?」
8日午前、同高1年4組の生徒36人がパソコンの画面をのぞき込み、真剣な顔で

放射能と風評被害について調べた速藤泰来さん(16)は「どうしたら風評被害がなくなるか、結論が思いつ

ユネスコスクール 国際理解や人権尊重、持続可能な発展などユネスコが提唱する理念を、教育を通じて実践しようとする学校。181か国で9000校以上が認定されている。日本の認定校は今年1月現在、41都道府県で550校。

かない」と頭を抱えつつ「原発事故で福島が被災を受けたことも、その福島普通にも暮らしている人がいることも、多くの人に知ってもらいたい」と語った担当の佐藤満講師(55)「考え方がまだ幼い部分があるが、1年間で本当に長じた。こうやって真剣に考える経験が、将来生きてくる」と強調した。同高は昨年6月から復興教育に取り組み、震災と原発事故で被災

福島県立安達高等学校 ユネスコスクールとしての取組

平成26年度

ユネスコスクール

主にESDを推進している学校(幼小中高大)

世界の加盟校:180カ国、約9,566校

日本の加盟校:705校(2014年4月現在)

福島県の加盟校:2校 平成25年度



ESDの基本的な考え方

知識、価値観、行動等
環境、経済、社会の
統合的な発展

文部科学省HPより転載

持続発展教育(ESD)

Education for Sustainable Development

持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動

平成24年度

平成23年度

東日本大震災

H23.3.11

教育環境復旧への努力

復興教育スタート

「総合的な学習の時間」「情報」

- 1 放射線教育
- 2 再生可能エネルギー教育
- 3 ESDを意識した展開

- カタール国訪問 生徒6名
- 韓国訪問 教員2名
- 在カタール駐日大使の講演会
- **ユネスコスクール認定**
(H24.12.20)
- ESD防災アジア次世代リーダー
国際ワークショップ 生徒4名

ユネスコスクールとしての活動スタート

「総合的な学習の時間」「情報」
1, 2および 4 ESD実践

- 校内ユネスコスクール委員会設置
- 国際協力機構JICA二本松と連携
 - ・教員研修
(ユネスコスクール委員、英語科)
 - ・生徒研修
(6名の隊員による教室での講義)
- ユネスコスクール世界大会
Student(高校生)フォーラム準備会議
 - ・生徒4名(大阪府堺市)1名(岡山市)



プラス

+

新教育モデルへの挑戦

「総合的な学習の時間」「情報」
1, 2, 4および 5 国際理解教育

(実施予定を含む)

- 公開ユネスコスクール発表会
(全校生徒、7月)
- OECD東北スクール(フランスパリ8月)
 - ・ 研究発表を実施
 - ・ 生徒7名渡仏
- ユネスコスクール世界大会
Student(高校生)フォーラム(岡山県、11月)
 - ・ 世界33か国の高校生来日
 - ・ 東北代表校として生徒4名参加
 - ・ 交流事業として、フランス、レバノン、
バングラディッシュ、チリ高校生来校
- 再生可能エネルギー教育実践校指定
- 自然エネルギー交流研修(8月)
富山県の高校生来校

成果(H25年度～)

- ・ **ESD大賞**
(小中高を含む全国のユネスコスクール最優秀賞)
- ・ **エネルギー教育賞優秀賞**(全国高校部門2位)
- ・ JICAとの連携教育実現
- ・ 生徒の意識の変化
(海外等校外研修者増加(アメリカ7名、フランス9名))
etc



Fukushimaから福島へ

- ① 困難克服の努力によって、彼らの前に今後訪れる様々な困難に耐えられる力を育む。
- ② 高校生の努力は、保護者や県民を勇気づける。
- ③ FUKUSHIMAからのメッセージ性は非常に高い。



2 ふたば未来学園高校 スーパーグローバルハイスクールとESD



平成27年4月8日

開校式・入学式

広野中学校校舎を借用

双葉群8町村立中学校連携型中高一貫校

全校生徒152名

(本校舎・猪苗代校舎・三島長稜校舎)

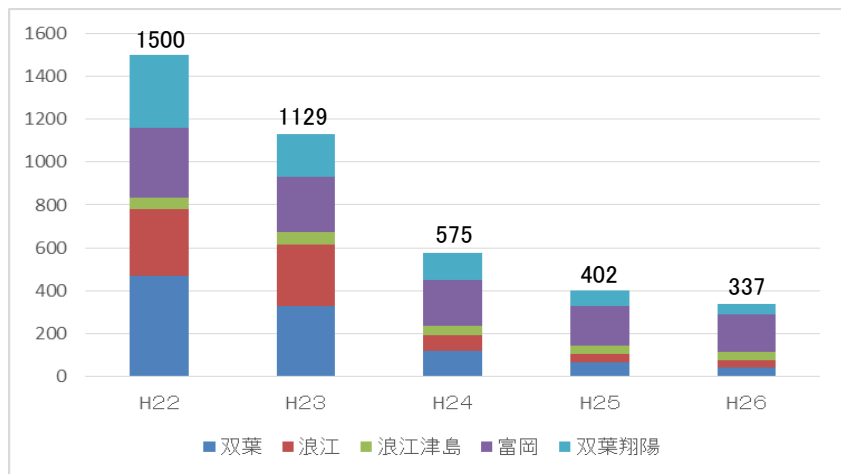


平成31年4月

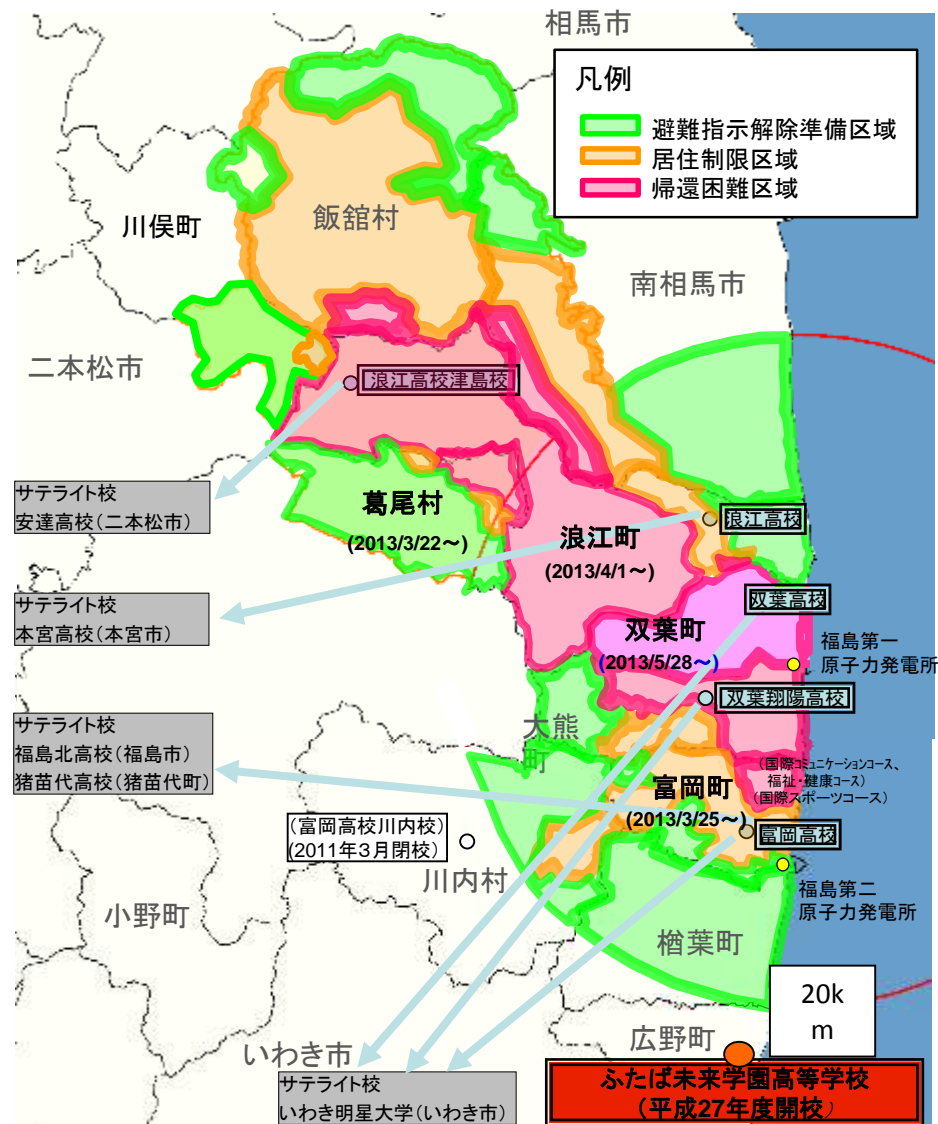
新校舎

併設型中高一貫校へ

双葉郡内の高校の生徒数の推移



双葉郡内の高校の避難状況



※サテライト校となっている5校については、平成27年度より募集休止(在籍生徒の卒業後休校)

3 構想の目的

- 東日本大震災、東京電力福島第一原発事故は、双葉郡のみならず福島県にとっても大惨事となった。現在でも、11万人以上の人々が避難を余儀なくされ、双葉郡の生活・産業基盤はその機能を失ったままの状態が継続している。
- なぜ事故が起こったのか。なぜ避難し、家族と離れなければならなかったのか。なぜまだ故郷に戻れないのか。いつになったら戻れるのか。どのように復興していけばよいか。このような疑問は、避難している生徒だけでなく、福島県民の共通の疑問である。これらの疑問に答える、又は答える努力が求められる高等学校は、世界中でも福島県立ふたば未来学園高等学校において他にはなく、積極的に真正面から原子力災害及びそこからの復興というローカルでかつグローバルな課題の解決に取り組んでいくこととする。

強い学習の動機を、
グローバル社会における生きる力へと伸ばしていく

○ 世界的な課題の解決を成し得るグローバル・リーダーの育成

- 本研究開発では、原発事故に関する調査を通して、複雑な事象をグローバルな視点から多角的にかつ多面的に捉える力を育てる。また、事故再発防止の対策及び災害からの復興を模索することを通して、思考力・判断力・創造力を身に付けさせる。さらに、復興のための方針と実行するための手段を内外にアピールすることで発信力、さらには行動力を育成し、最終的には地域の課題解決に留まらず、世界的な課題の解決を成し得るグローバル・リーダーを輩出する。

○ 世界と協同する福島復興、 世界の先鋭化した課題を乗り越える持続可能な社会のモデルの構築

【新たな産業の創造】

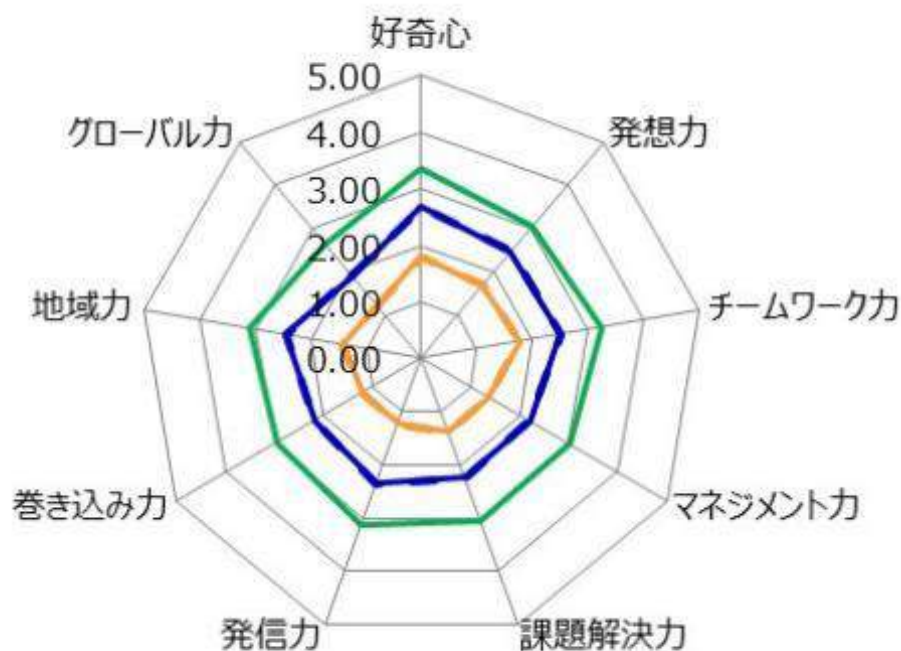
- 最終的には、例えば、ふたば未来学園高等学校の卒業生から自らの力で再生エネルギー開発事業を起し復興に貢献していく人材を輩出する。中学生・在校生がその姿に憧れ、自分でも事業を起こそうと挑戦する。このような憧れの連鎖によって、生徒が卒業後も活躍することで、双葉郡が再生し、地元に対する新たな誇りが生まれるようにする

【世界への福島発信】

- 原子力災害からの復興を国内外にアピールすることは、世界から福島に対する関心を高め、正しい知識を深めるとともに、事故の風化を防ぎ、風評被害を払拭する役割も担う。

○ OECD東北スクールの成果をいかす

- 双葉郡をはじめとした東北の中高生は、国際的イベント企画、企業訪問での協力依頼、地域での商品開発等を行った。
- 生徒の復興への強い動機と、実社会での実践が、大きな成長へとつながった。その成果分析と実践ポイントが教育課程特別部会(第3回、H27 3/1)で報告され指導要領改訂の参考とされている。



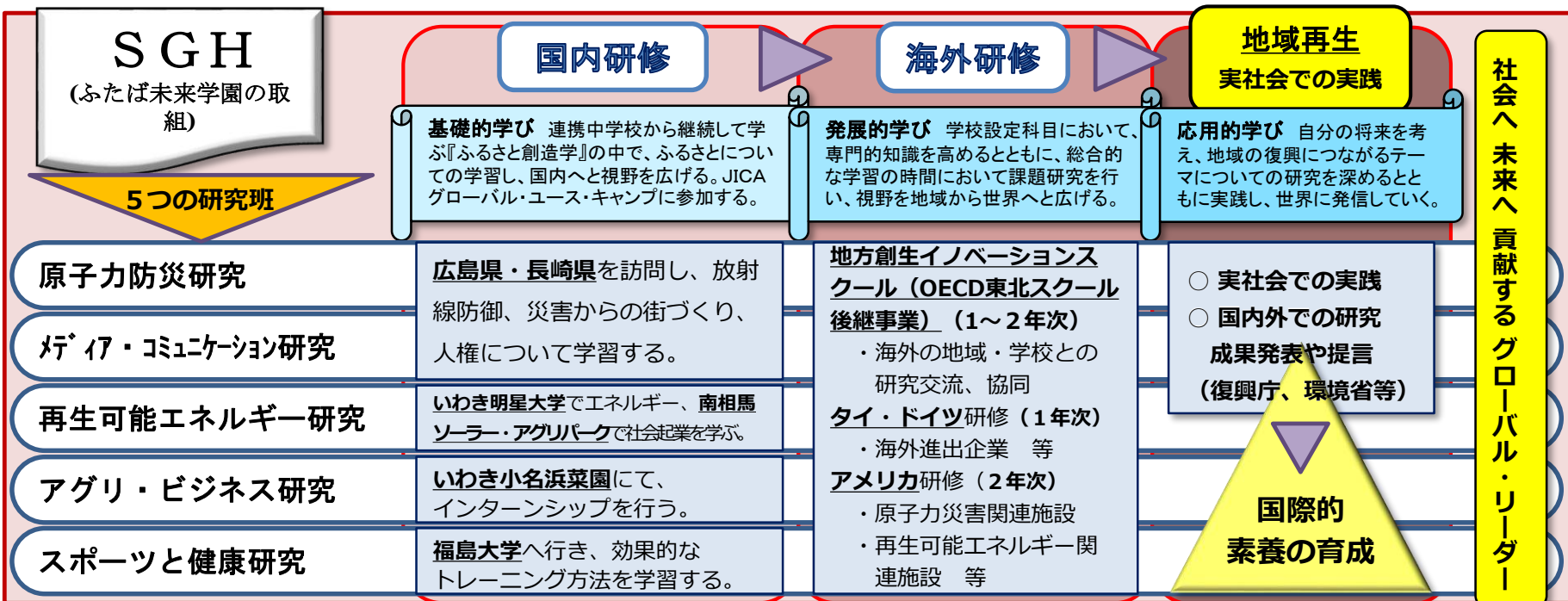
成長要因の分析

1. 他地域の生徒との交流 (71%)
2. 異学年の生徒との交流 (56%)
3. 地域の将来・未来に対する議論・活動 (54%)
4. 企業・団体への訪問・プレゼン
5. LL (引率教員) との交流
6. EP (企業等の支援者) との交流
7. 講師・有識者との交流
8. 地域コミュニティとの交流
役割に対する責任
9. 大人・子ども対等での議論

※ ルーブリック評価における生徒自己分析での「成長要因」の上位回答

6 研究開発内容（2）

- 国内研修から海外研修へと世界へ視野を広げるとともに、未来創造へ向けた実践を通して学んでいく
- OECD、JICA、福島大学、地域内外の企業、イノベーションコースト構想関連機関等との密な連携を行っていく。



ふたば未来学園高等学校
運営管理事業

魅力ある学校とするための先進的な教育を実践するとともに、ふるさとの復興を担い、双葉郡の中学校との連携を確立する。

先進の学びで地域へ、地域から世界へ、未来へ **社会に貢献する人材の育成**

産業社会と人間 ②

- ◆ 防災教育・ふるさと創造学から地域を考える授業
- ◆ 各界の第一人者、地元企業及び地域の方々からの授業
- ◆ 生徒が主体のアクティビティを導入した授業

学校設定科目 ②

- ◆ 再生可能エネルギー施設の見学
- ◆ 風評被害の払拭に取り組む農家での就業体験
- ◆ 総合学科研究発表会での発表
- ◆ 福島・国際研究産業都市（イノベーションコースト）構想との連携

総合的な学習の時間 ③

1 年次

2 年次

3 年次

6 研究開発内容（3）ふたばの教育復興応援団との連携イメージ

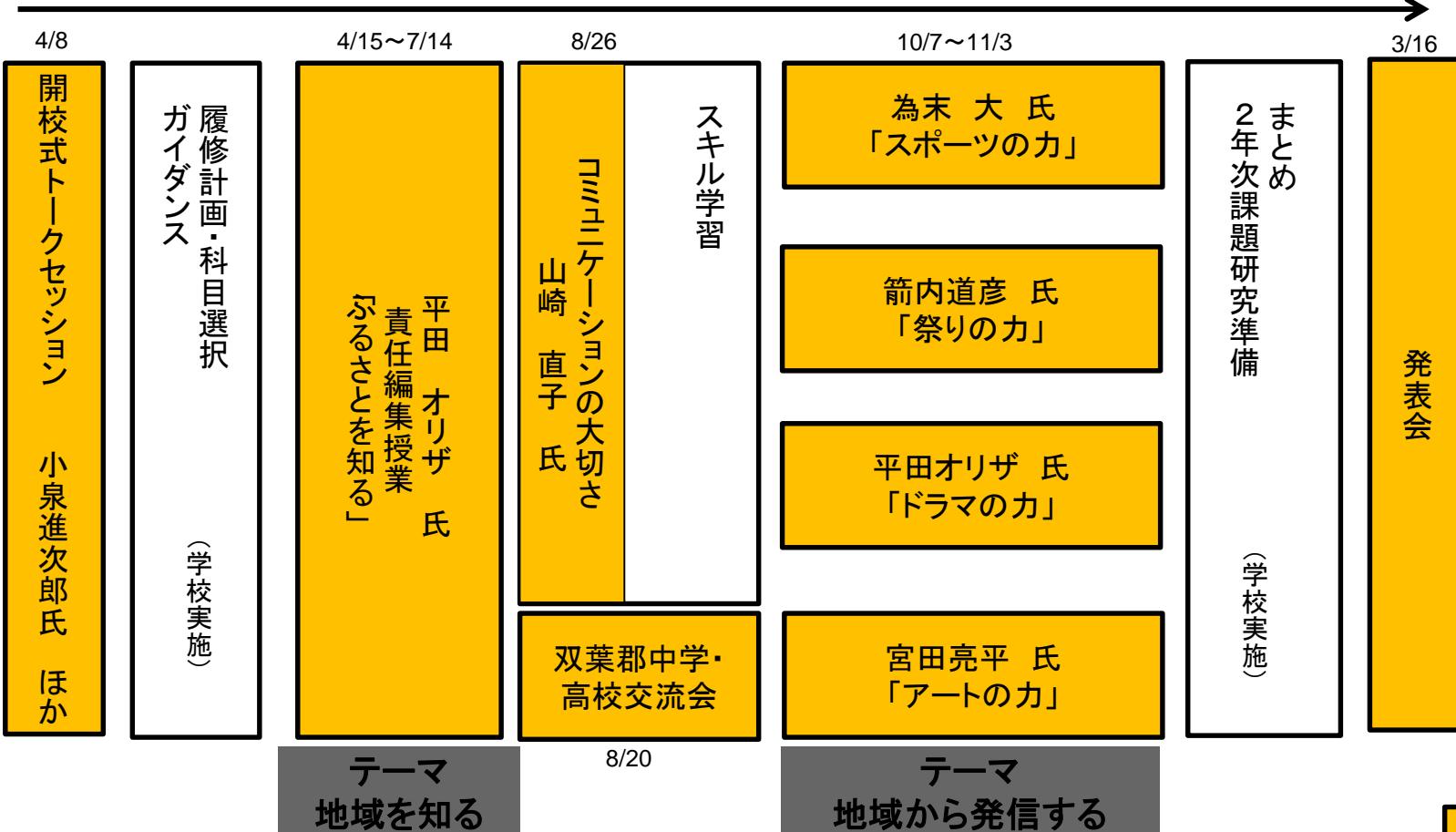
○ 平成27年度1年次「産業社会と人間」における「責任編集授業」の展開

- 生徒が取り組む実践的な学習に応援団が参画し、生徒が視野を世界や未来へ広げる機会や、自らの夢を見つけていく機会としていく。
- 生徒たちの学びにつなげていくために、単発の講演に留まらず、応援団と担当教員が連携して、複数日にわたるひとまとまりの授業を実施。平成27年度は年間のべ100時間程度の授業を実施予定。

2015

2016

4月 6月 7月 9月 11月 3月



応援団
参加授業

ループリックの設定

1 知識

Knowledge "What we know"

2 技能(スキル・コンピテンシー)

Skills "How we use what we know"

3 人格(キャラクター・センス)

Character "How we engage in the world"

4 自らを振り返り変えていく力(メタ認知)

Metacognition "How we reflect and learn"

I. 能動的市民性		4月時点	今現在	
71				【今現在、その力を持っていると感じた具体的理由】
72	レベル1 所属する集団の一員として、その自覚を持っている。			
73	レベル2 社会の中の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けている。			
74	レベル3 社会をより良くしようと、その一員であるという意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。			4月時点と今現在でマルを付けた項目が変化した人は・・・ 【力が変化した(成長した)具体的要因】
75	レベル4 社会に貢献しようとする意欲と、自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとすることができる。			a 各教科の授業を通して成長した b 産社のフィールドワークや演劇を通して成長した c 部活動や委員会での活動を通して成長した d 寄宿舍での活動を通して成長した e その他 (具体的に:)
76	レベル5 社会・未来をより良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語るすることができる。			
77	- 該当する力はまだ身に付いていない。			
78				
J. 自分を変える力		4月時点	今現在	
79				【今現在、その力を持っていると感じた具体的理由】
80	レベル1 自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。			
	レベル2 自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を冷静に見つめ			

3 解のない事象への挑戦としてのESD

- ① 内的動機づけによる学習意欲の喚起
（各教科の重要性，総合力）
- ② テストで評価しにくい力の育成
（生き抜く力 人を思いやる力・・・）
- ③ ふるさとを大切にす力
（高校生，学校が地域を変革する力に）
- ④ 解のない事象への挑戦
（総合的に判断し，最適解を導く力）
↑ 異文化，異年齢，チーム力

3 解のない事象への挑戦としてのESD

具体的な目標

① 受験対策

小論文 面接 プレゼンテーション

② 力強く生き抜く力

愛する人を守っていく力

(家族・地域・日本・・・)